日独伊

必ず勝つ

伊藤千代藏著

博聞堂

伊藤千代藏著

日獨伊必ず勝つ

博聞堂刊

序

敵を知り己を知るは、敵に勝つ兵法である。この際、米英を徹底的に究明検討する必要がある。アメリカの生産力擴充といひ、またイギリスの不撓不屈といひ、兩國共に最後の勝利を得るものと信じてゐる。しかも樞軸側は壓倒的優勢を保持してゐるが、長期戰化せんとする相貌をますます露呈するに至つた。だが大御稜威のもと、燦たる三千年の歴史と傳統を有する帝國は、我に勝算あり何等怖れるものではない。

今次の東亞及び歐洲の戰線を眺め、將來を想ふ時、日獨伊三國の前途は誠に多事多難である。世界新秩序の建設は決して容易な業ではない。されば三國はその同盟、協定の精神に則り、水も漏らさぬ緊密な提携のもとに、やがて來るべき歴史的大業を成就せずには措かないものである。

本書では、樞軸國側とか聯合國側とか、或はわが國と戰つてゐるゐないかをいはず、その國々の立場から交戰した、また現に交戰してゐる諸國を擧げて、いろいろな觀點から長所短所を探尋しようと試みたものである。

幸ひに、本書が必勝確立の一助ともならば、著者の本懐これに過ぎるものはない。なほ著作するに當り、諸種のものを資料としたことに就いて深く謝意を表する次第である。

大東亞戰爭一周年記念日

著者

目次

第一章　日本の勝利

一、敵の長所と短所を知れ

大詔を拜す　昭和十六年十二月八日、アメリカ及びイギリスに對して宣戰布告の大詔が渙發せられた。そして陸海將兵は全力を奮つて交戰すべく、百僚有司は勵精職務を奉行すべく、衆庶は各々その本分を盡すべく、億兆一心國家の總力を擧げて征戰の目的を達成するに遺算なかるべきを訓へ給ふたのである。まさにわが國開闢以來の歷史的大事業の展開が宣せられたのである。

されば皇軍の大活動は、電光石火の急と疾風迅雷の勢とをもつて、各方面の攻擊は敢行された。その中の主なるものを摘記すれば、帝國海軍部隊はハワイ海戰に米太平洋艦隊の大半を屠り、マレー沖海戰に英東洋艦隊を、スラバヤ、バタビヤ沖兩海戰で西南太平洋聯合艦隊を擊滅し、近くは珊瑚海海戰で主力艦、航空母艦を含む米英の大艦隊を捕捉、擊摧し、なほ最近ではソロモン海戰で、米英聯合艦隊並に輸送船團に潰滅的損害を與へたのである。

帝國陸軍はわが海軍と緊密なる協同の下に、香港島要塞を、比島の首都マニラを、シンガポール要塞を、バタアン半島を、コレヒドール島要塞などを覆滅し占領せしこと數知れず、これら海軍力及び陸軍力の絕大なる戰績には全く世を擧げて驚嘆せしめたのである。

今や、わが雄渾無双の大作戰は、最近におけるマダガスカル、シドニーの特殊潜航艇奇襲作戰を加へて一段と飛躍し、東は八千三百キロの米本土、西は一萬二千キロの南阿、南は八千キロの南濠に及ぶといふ、渺茫たる大戰域を形成するに至つたのである。從つて日本は以前の三十八萬方キロの島國ではなくて、南方占領地面積だけでも實にわが本土の三・七倍強の二百五十二萬一千五百キロ、その全人口はわが國人口に近い九千三百六十八萬人にも達するのである。そしてこの尨大なる陸地と二億方キロにも及ぶ大洋との新建設を圖られればならない地位に立つたのである。

實に有史以來、かくの如き廣大なる戰域において、しかも赫々たる戰果を短期間に收めたことは未だ曾て類を見ないものである。これひとへに御稜威の下、一死報國の至誠に燃ゆる皇軍將兵の賜にほかならないのであつて、心からなる感謝を捧げるものである。

彼を知り己を知れ　されば、私は既に時局に關する多くの著作を上梓したが、なほ本書で、各國特有の國民性――それはわが國と敵性であらうが、なからうが――を充分に認識しようとするのである。

そこで、今を去る約二千有餘年前に成つたといふ支那の兵書「孫子」の中に、

彼を知り己を知れば百戰して危からず。彼を知らずして己を知れば一勝一負す。彼を知ら

ず己を知らざれば戰ふ毎に必ず殆（危）し。

といふ一節がある。

これを評釋すれば、そもそも勝敗の分岐點は深く敵を知り、また己を知ることである。即ち、

（一）彼を知り己を知れば百戰して危いことはない。

（二）己のみを知つて彼を知らざる時は勝つたり負けたりで、一勝一敗が全く偶然の成行といふことになる。

（三）彼も知らず己も知らず、行きあたりばつたりの手合ひに至つては、先づ戰ふ毎に危しと斷じて可なりといふのである。

今更、ここで孫子の講釋をしようとするのではないが、本書の目的は「彼を知り己を知れば百戰して危からず」の萬古不易の眞理によつて、樞軸國とか反樞軸とかいはずに、またわが國と戰つてゐるゐないに拘らず、その國々の立場から交戰した、また現に交戰してゐる諸國を擧げて、いろいろな觀點から長所短所を探尋してみようとする。けだし、これが檢討することは緊要な意義を持つものであらうことはいふまでもない。

二、日本人の魂

ことごとく死に果てる　日本精神、大和魂、武士道などに就いては、これまで度々書きつくしたから、ここでは少しく方面を變へて述べるとしよう。

平田派の國學者として、尊皇攘夷論者であり、皇國絶對論者であつたところの野々口隆正（野々口は本姓で、晩年に大國と改めた）は、「尊皇攘夷異辨」の中でかう書いた。

「一人だに殘らず死に果てたらんとき、日本國をば夷人に授くべきなり。しか思ひ定めてのち、勝つはかりごとを思ひめぐらすべし。思ひの外に彼弱く我强きこともあるべし。又思ひの外に彼强く我弱きこともあるべし。ことごとく死に果ててののち、國を授けんと思ひとりてある時は、彼が强きも弱きも、かかはるべきにあらず」

と力說した。つまり、日本が外敵に敗けて侵されたときには、わが日本の土地に、わが日本人が一人も殘らないで死に果てたときである。一人でも生きてゐる以上は、外敵に敗けたり侵されたりはしない。この決心のもとに外敵に勝つはかりごとをめぐらせば、何ぞ怖るゝに足らんやである。

それ故に、わが日本人が一人殘らず死ぬといふ覺悟を持てば、外敵が强からうが弱からうが問題で

はない、强いからとて怖れはしない、弱いからとて侮りはしない。まづ第一に、國民の精神が根本であるといふ點を强調したのである。

これは維新當時の外國崇拜者が、西洋人は武器がすぐれてゐるから戰ひに勝つことは出來ない。それで彼等のいふまゝに從つて、わが國が安全であるやうにした方がよいといふ弱音に對する一大警告である。

この一人殘らず死ぬといふ精神、これが武士道であり、日本魂である。葉隱にあるやうに「武士道といふは、死ぬ事を見付けたり」である。死を怖れるやうでは、決して國を守るために勝ち拔くことは出來るものではない。

この死ぬことを怖れない精神が、わが國民一億に徹してゐる以上は、わが國は何千年、何萬年經たうとも、外敵に侵されたりするやうなことは絕對にないのである。

最近の獨ソ戰において、ドイツ側の發表によればケルチ半島の大戰果に、ソ聯兵十五萬を捕虜にしたとあるが、全くわれわれには不思議でならない、噓としか思へない。十五萬の兵士がゐて、何故戰はふとしないのであらう、たとへ包圍されたとはいへ、銃をとつて一人も生き殘らないまでに戰ふ勇氣がないのであらうか。最後の一兵までもといふスローガンは守れないのであらうか。

支那事變につゞく大東亞戰爭において、蔣、米、英、蘭軍らが、皇軍に平氣で降伏を申入れるのは、死を怖れる精神があるからである。そこには自由主義、個人主義、デモクラシー思想など、いろ〳〵な原因もあらうが、それにもまして大きな理由が一つある。

彼等には軍人として生還を期せないといふ精神がない。その「死」を誰のために捨てなければならないかといふ理念を持合せてゐないからである。死するよりか、生きた方がましだといふ「軍人」としての使命がないのは、誰のために一命を捨てるか、その理由の發見に苦しむのに相違ない。

ところが、わが皇軍は、その死を　大君に捧げまつる榮譽を有してゐる。これこそ、わが尊き國體の强味である。この强味があればこそ、しこの御楯として喜んで死ねるのである。われわれは日本に生れたことが、實に言葉でつくせない幸福である。

荒鷲魂　そこで何故、わが荒鷲が强いかといふ具體的な例を擧げれば、まづ生還を期せないといふ烈々たる皇軍魂、これがまづ勝利の第一原因である。例へばわが荒鷲は、基地を飛び出す時に、決して落下傘を持つて行かない。絕對に生還を期せない氣持が、この一事によつて知られる。また戰死した航空兵の遺品を見ると、實に整然と處理されてあつて、いつも遺書が發見される。これに反して敵は常に落下傘で飛び降りて生命だけは助からうとしてゐる。

第二は、飛行機の性能が優秀であるといふ點だ。航空母艦からでなくては航續力が不足であるといはれるものが、陸の基地から出發してゐるので、その性能の優秀性が判る。また空中戰における、いはゆる巴戰に入ると絕對にわが方が强い。敵が一回轉するうちに、こちらは一回轉半する。だから、いつも有利な態勢で敵に對し得るのだ。それがために狙ひが敵より比較にならないほど正確で且つ敏速に勝ち得られるのである。

第三は、乘員の猛烈な訓練によるもので、第一線にあつても酷暑のなかを分隊長を中心にして戰鬪に參加する場合以上の激烈さを以て、嚴格な訓練を行つてゐるのである。

この三つのことが赫々たる大戰果をもたらした原因であるといふ。

軍人魂　また、高橋三吉海軍大將の談話によれば、或る司令官が部下の若い將校を、戰鬪機から偵察機に配置を變へたところが、その將校は偵察機に乘るのを喜ばないのである。そこで司令官が、配置を變へたのは將來のためだ、今に飛行隊長にもなる、航空母艦の艦長にもなる、司令官にもなる、さういふやうに出世して行くために、いろいろな經驗を必要とするからだ、となだめたのである。—

すると、その將校は、

「私はそんなことを考へてゐない、司令官殿には私がそんなに出世するまで生きてゐると思つてゐるのですか」

と答へたといふ。實に偉い、死ぬ氣でやつてゐる、將來の立身出世などといふことは念頭にないのである。

米英軍の根性と兵器　ところが反樞軸國の米英の如きは、第一に生命の安全が保證されなければ更に戰意がない。もしそれが危險に曝されれば、忽ち降伏して、おのが生命の保全に汲々とすることは後章で詳しく述べる通りである。

しかも、その敵の兵器なるもののうち、部分的には採つて以て他山の石とすべきものが稀にはあつたとしても、今回の大戰果はわが兵器の優秀性によるのである。卽ち機關銃といひ、火砲といひ、戰車といひ、無線兵器といひ、機動舟艇といひ、かねて充分なる自信はあつたが、いよいよ戰つてみると、敵の主要兵器に比較して、いかに獨創性があり、近代性があるかを、米英が認めてゐるのである。

だが、わが軍は兵器の奴隷ではない、兵器の性能を發揮させるには、結局人によらなければならぬ。卽ちわが精銳なる皇軍が精强無比なる攻擊精神のもとに、その兵器を使役するからである。

されば武器は質、量共に益々充實し、そして人と兵器と渾然一體をなすところに、わが將兵の強味があるのである。

「なにくそ」　紀平正美博士は、「なにくそ」といふがんばる力が日本人の特長であるといはれたが、このことは今度の大東亞戰爭の場合にもあてはまる。米英に宣戰したのもさうだが、珊瑚海海戰において、わが攻擊精神はかつと燃え立つて、あのすばらしい大戰果を擧げたのもそれである。また前にわが本土を空襲しようとして小癪にも敵機數臺が飛來したとき、それは却つてわれわれに防空の實地訓練をさせてくれたのに役立ち、しかも「なにくそ」で士氣を鼓舞するといふ大きな逆効果があつただけである。

もしわれわれが一歩退いたとじたら怖れて逃げるのではない、「なにくそ」をもつて勇躍その死地に飛び込んで、必ずやそれを摧く捨身の戰法に出るのである。卽ち皮を斬らして肉を斬り、肉を斬らせて骨を斬るといふ劍道の極意、そのまゝである。

百年戰爭　前に東條總理大臣は、南米に歸國するチリーの新聞記者團と會見のとき、この戰爭はいつまで續くかとの質問に對して、覺悟は百年、希望は米英を擊破して速に鉾ををさめたいと卽答された。

われわれは今日、大東亞戰爭の緒戰以來、陸の海の空のすばらしい勝報を聞くごとに、「戰はこれから」だと覺悟すべきである。早合點して、一段落ついたなどと、一息つくやうな油斷があつてはならない。戰爭しつゝ建設し、建設しつゝ戰爭を繼續するのである。

さきの「覺悟は百年」といふ言葉は、昭和聖代に生を享けたわれわれ國民として、米英を敵とする以上、寸時も忘れてはならない覺悟であり、決意である。從つて、そのまゝで職域奉公に盡すべきである。

今われわれが戰つてゐる大東亞戰爭は、總力戰體制の下に赫々たる戰果を收めつゝある武力戰を中軸として、外交戰、思想戰、經濟戰とあらゆる手段が動員され、獨伊と共に世界に新しき秩序を打ち立てるために鎬を削つてゐるのである。そしてその戰爭の規模において、その構想において、實に雄渾壯大なものであり、一方いろいろ複雜性も帶びてゐて、なかなか容易に片づくものではない、いはゆる長期戰であるが、しかし、われわれは大國米英が完全に屈服するまで、何十年、何百年かゝらうとも、これを戰ひ拔き、最後の決定的勝利を確保し、卽ち敵國をして城下の盟を結ばしめるまで、終始不退轉の決意を堅持すべきである。そしてこの長期戰のため一切のものを戰爭完遂に集中しなければならない。

米英がわれわれの時代に屈服しなかつたならば、われわれの子供が戰つてくれるであらう。子供の時代でも屈服しなかつたならば、われわれの孫が戰ふであらう。これが百年戰爭を勝ち拔くための大なる決心でなければならぬ。

それ故に、全國民は悉く國家總力戰の戰士として、一糸亂れざる團結を保ち、一人たりとも無協力者があつてはならないのである。

生けるしるし　千三百年の昔、既に萬葉の一歌人が詠んだところの、

御民吾れ生けるしるしあり
天地の
榮ゆる時に遇へらく念へば

この精神は、直ちに現代のわれらの心を端的に表現したものといへるであらう。われわれは何としても、いい時勢に生れ合せたことを喜ばねばならない。今日、わが國家の榮えを、われら自身の力をもつて實現するばかりでなく、數十年の長きに亘つて暴慢の限りを盡した米英の勢力を、東亜の天地から驅逐し得る光榮の大使命が、われらの双肩に擔はせられてゐるのである。全く「御民吾れ生けるしるしあり」の時代といはなければならぬ。

思想戰　大東亞戰爭が第二段階に入り、いよいよ前線と銃後の別がなくなり、總力戰の實力を發揮しなければならないときには、特に思想戰に對する重要性について、その認識を徹底的に深める必要がある。

それは米英思想、米英的イデオロギイによつて動かされることである。即ち、その言葉なる英語が、單なる符牒に過ぎないものもあれば、その言葉の持つ內容なり概念なりには米英的國民性なり、米英的思想の特徴なりを含んでゐるものもある。その國の文化においても、文化そのものの內容が全然無色のものもあれば、また米英的民族性、米英的思想によつて特色づけられたものもある。言葉も文化も、同時に「思想」である場合もある。

それ故に、暢氣に考へて寛大らしく「言葉ぐらゐいいではないか」とか、「文化ならいいではないか」では、折角、ここまで築き上げた皇軍の血と生命とによつて得た大戰果を、思想戰において蝕まれるやうなことがあつてはならない。いかなる末梢においても、これらの點をよくよく判別してかからねばならない。

ヒツトラーの「吾が鬪爭」を讀むと、ナチスがドイツの政權を掌握してから間もなく、非常な困難と忍びながらもユダヤ人を國外に追放するのに苦心したのは、ヒツトラー自身が第一次歐洲大戰

に際して、ドイツの敗因であるところの、思想戰謀略戰におけるユダヤ人の務めた役割を、瞻に銘じて知り盡してゐたからである。

これによつても、國家存亡の前には、米英の言葉といひ文化といひ、多くの知識階級の陷りやすい人道主義感傷や、愚かしい寛大さにのみ耽つてゐてはならないのである。

大東亞戰爭開戰の直後、南米において米洲外交官會議が開かれたときに、合衆國の國務次官ウエルズは、その席上で演說するに、

「緒戰の武力戰では〝アメリカは負けたけれども、日本の知識階級には、米英思想の理解者もあることだから、だんだん戰爭が進んで思想戰の段階になつたら、勝利は必ず聯合國の側に導くことが出來るであらう」

といふ意味のことをいつたさうである。

アメリカの指導者達の間には、こんな希望を持つてゐる者も多いのだから、油斷も隙もならない。

戰爭と資源　この大東亞戰爭は支那事變の如く、いやそれ以上に戰ひつゝ戰力を培養せねばならない。このことは、さきに「戰ひつゝ建設し、建設しつゝ戰ふ」といつたのと同じく、長期戰を

前提としたものである。

これがための第一の目標は、まづ南方地域の領有即ち大東亞の確保であるが、わが緒戰における大戰果により半年を出でずして、大東亞共榮圏の戡定を終り、ここに支那事變における日滿華の經濟ブロックは、大東亞共榮圏に進展し擴張された。しかも、その領有した共榮圏は、世界における資源の寶庫である。それをこれまで米英に供給して彼を「持てる國」たらしめたのを、今後は日本を指導國家とする東亞共榮圏に結びつけねばならない。

だが、この大なる資源地域を占據したといふだけでは、經濟戰的に何等の役立つものではない。これを開發し、輸送し、配給し、利用することによつて、はじめて効果があるのである。この事實は今後において果される大きな問題である。

ところが、世にはあわて者があつて、戰爭には勝ち、南方資源が手に入り、即ち「持てる國」になれたのだから、そろそろ消費節約だの、統制經濟だの、或は企業統合などといふことは解消してもよいではないかと、思つたりしたら大變な間違ひである。

南方の物資利用は、日本だけでなく東亞全體のためであることを忘れてはならない。その資源を、先づ戰爭完遂のために軍需を優先せしめ、民需は軍需に譲るべき心構へが大切である。されば

大東亞戰爭が永く續くに從つて國力が太るやうでなければならぬ。これがためには職域奉公を體して、産業の振興に邁進することが必要であることはいふまでもない。

三、日獨伊の立場

日獨伊の握手　そもそも東亞と歐洲の關係は、あだかも繩のやうに縒合つてゐる。東亞の事件はたとひそれが如何に小さなものでも直ちに歐洲の問題であり、歐洲の問題はまた東亞に直接響くのである。

大東亞戰爭は支那事變の必然の發展として起つたものであり、支那事變はまたその勃發の初めより内に深く大東亞戰爭の禍因を藏してゐたのである。これが眞因は、一九一九年一月十三日ヴエルサイユ條約調印のその瞬間に胚胎したといへる。當時、戰勝の餘勢をもつて聯合國がドイツの骨の髓までしやぶり盡さうとしたこと、そして日本及びイタリヤをして、東亞と地中海の番犬にするといふ屈辱的地位に押込んだ事實が、今次の宿命戰にまで發展させたのである。

日獨伊三國間の友好關係は、支那事變を契機として一段と緊密化した。即ち支那事變を通して、日本の敵は支那ではなくて、その背後からこれを操る米英であることを如實に示す一方、ドイツは

その失地回復運動を通じ、イタリヤは地中海、アフリカ問題を通じて、何れもその蔭にうごめく米英佛の飽くなき魂膽を見拔いたのである。

そこで米英勢力の擴大せんとするのを防衞する必要から、日獨伊防共協定といふ形で結ばれた。日本は滿洲事變を契機として昭和七年には斷乎、國際聯盟の脫退を敢行した。かねてこの機を狙つてゐたドイツは、ナチス政權確立直後のことでもあり、この好機を逸せず一九三三年十月十四日、國際聯盟に絕緣狀を叩きつけた。イタリヤもまたエチオピヤ戰役を通じてオーストリヤ、バルカン問題から傳統の地中海政策にかへり、ドイツとの長い確執を淸算して、ベルリンとローマとの樞軸結成へと急いだ。そしてドイツの親英政策が水泡に歸する一方、伊英協定がはかばかしく行かない矢先、ヴエルサイユ以來十五年、旣に實力を內に蓄へた日獨伊三國が日獨防共協定を强化するため、三國防共の旗幟を押し立てたのは當然の歸結であつた。

米英が音頭をとつて支那事變を裁かんとした一九三七年の九ケ國會議には、外交轉換をしたドイツが會議に出席を肯ぜず、更にイタリヤも日本援助の態度で會議が骨拔きにされたばかりか、同會議進行中の十一月六日、突如、日獨伊防共協定の調印が發表された。

この異常な事態の激變に、世界の外交界は未曾有の衝動を受けたが、この時初めて世界が二つの

國家群によつて對峙してゐることが表面に現はれたのである。

列國の對支權益擁護を續つて支那事變が各國の注視の的となつてゐるとき、ドイツの失地回復はオーストリヤを初めとして次々に進捗し、イタリヤもまたエチオピアを制し、アルバニヤを併合して、その威信は深められた。三八年チエツコ問題を繞るミユンヘンの獨伊英佛四國巨頭會議で、一時は小康を得たが、第二次世界大戰不可避と見た英佛は、その準備にかかつてゐた。そして戰機熟した三九年九月、ポーランド廻廊問題で歐洲戰の狼火はあげられた。

その後、數次にわたるヒツトラー總統の和平提案にイギリスは耳を藉さないで、フランス大敗後ソ聯と結び、アメリカの援助を恃んでいよいよ攻擊態勢を固め、バルカン、ソ聯からアメリカへと戰線を擴大して行つた。

一方、日本を恫喝すべくイギリスはアメリカと組んだが、チヤーチルの如きは「アメリカと日本が交戰すれば、イギリスは一時間以內に出動するであらう」などと見得を切つた。その實、イギリスは東亞において尨大なる自國の權益を失ふことを恐れ、對日戰備を進めつゝアメリカ抱込みにあらゆる手段を弄し、これを矢面は立たせたのである。

わが隱忍自重にも限度がある、遂に米英に宣戰布告を發し、直ちにハワイ急襲を敢行して、彼を

ちぢみ上がらせた。即ち昭和十五年九月二十七日に締結された日獨伊三國協定發動の日は遂に來たのである。

次いで、戰爭擴大を阻止したいばかりに忍んで來た獨伊は、直ちに樞軸の對米戰爭宣言を聲明し、越えて一月、三國軍事同盟が締結された。

即ち防共協定に始まつて、その後各自の途を自己の力で開拓して來た三國は、遂に世界新秩序のために來る所まで來てしまつたのである。

樞軸國側の勝利　最近、東條首相は國民總力結集大講演會で、日獨伊の赫々たる大戰果を擧げて後、

「かくの如く樞軸側に極めて有利に進んで參りたる現在の戰局は、今後日獨伊三國が正に手を繫いで、一大追擊戰に進むべき基礎をなすものである。敗戰に次ぐ敗戰をもつてする英國は、國民生活の窮乏日と共に、いよいよ深刻なるものがある。一方、戰爭目的のはつきりしない米國においては、國民は時機を失したる机上の大軍備擴張の聲に踊らされ、船舶喪失による海上輸送難と相俟つて、國內の情勢逐次惡化し、國民の苦しみが最近とみに加はつて來た今日、米英兩國は日一日と崩壞の過程を辿りつゝあり、わが帝國の勝利は有利なる戰局の推移と共に、いよいよ不動のものとな

つてゐる」

と强調されたのである。

この海上輸送力の觀點からだけでも、樞軸側があくまで押して行けば、イギリスの運命は知れたものである。第一次大戰當時でさへ、ドイツ軍がもう少し押す力を持つてゐたのなら、英本土は飢えたであらうことは、戰後、英國責任者の告白によつても明らかである。だから要は、ぎりぎりの最後まで敵を押しまくるのである。少しでも手を緩めれば、敵は息を吹返すばかりか、窮鼠却つて猫を嚙むことさへある。戰ひは最後の五分間で決するといふ定石は、古今東西を貫く眞理である。

この見方からすれば、アメリカにしても、大西洋と太平洋とを樞軸側が、あくまで彼の海上輸送力を失はしめれば、戰爭資源の缺乏と共に、イギリス、ソ聯、蔣政權への武器貸與が不可能になつて、國內の生活破綻と連れて崩壞に瀕することは必定である。

されば、嶋田海相談として、

「しかして更に力强く思はれることは、東亞における皇軍の赫々たる戰果に呼應して、歐洲においても盟邦獨伊が着々として、その驚異的戰果を擴大しつゝあることである。東亞における皇軍の戰勝が、歐洲の戰局に多大の影響を與ふるはもとよりのこと、また獨伊の活躍が東亞の情勢をいよい

よ帝國に有利ならしむることは必然にして、強く結ばれた日獨伊の米英撃滅の戰ひは、今や最後の勝利に向つて強力に押し進められてゐるのである」

とある。

最近の一例を擧げれば、北阿における樞軸軍の猛進擊は、聯合國側に非常な不安を與へるもので、ニューヨーク・タイムスは次の如く述べてゐる。

「今や、北阿の沙漠地帶には再び暗雲が蔽ひかぶさるに至つた。樞軸軍はいよいよ深くエジプト内に進擊してゐるが、このエジプトは英本土とインドとの間の唯一つの要塞であり、またコーカサス防衞のみならず、日本と獨伊との握手を防ぐ衝立でもある。聯合國側はあらゆる手段、あらゆる力をもつて、これを守らねばならない」

とて、日獨伊の連絡を恐れてゐるのである。

日獨伊三國條約締結に關する詔書に、

萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚タ遼遠ナリ

と仰せ給ふたのである。

見よ、東西樞軸軍の前には、獨立を叫んで蹶起を促し、反英運動がますます表面化してゐる、その雄々しい姿を。全アラビヤ人は立つ、エジプトは起きる、インドは目覺めるといふ情勢であり、一方、滿洲及び中華民國はいふまでもなく、タイ、佛領インド支那、ビルマが帝国に協力して東亞の新建設を踏み出すといふやうに、今や樞軸軍の聖戰を正しく認識したところの、これまでイギリスのために奴隷視されてゐた諸國は、奮起せざるを得なくなつたのである。

そこにこそ、世界新秩序が完成されるのであり、また詔書に仰せられた聖旨の極みなき有難さが體得されるのである。

かかる怒濤の如き、正しき大進軍の中に蔣政權のみ、ひとり頑迷にも恃むべからざる米英を恃みて、同胞を裏切り、アジヤに叛き、來るべき米英と運命を同じうせんとするを見て、われわれは眞に彼の愚さを憫むものである。

四、帝國海軍力

海軍記念日の戰果發表　大東亞戰爭勃發以來、昭和十七年五月二十七日の第三十七回海軍記念日を迎へるまでの五ケ月間における、帝國海軍の絶大なる綜合戰果を表示すれば左の如くである。

		戦艦	航空母艦（水母ヲ含ム）	甲級巡洋艦
撃沈	米	カリフォルニヤ型一 メリーランド型一 アリゾナ型一 オクラホマ型一 カリフォルニヤ型一 ユタ	ラングレー レキシントン サラトガ ヨークタウン型一 新式中型一	オーヴスタ ヒューストン マーブルヘッド型一
	英	プリンス・オブ・ウエールズ レパルス	パーミス	エクゼター コンウオール型一 ロンドン型一
	蘭			
大中破	米	メリーランド型一 ネバタ型一 ペンシルバニヤ型一 ノース・カロライナ型一		ルイスビル型一 甲巡または乙巡八
	英	ウオースパイト型一		
	蘭			
拿捕	米			
	英			
	蘭			

乙級巡洋艦	ポートランド型一 甲巡または乙巡二 ホバート型 二 デ・ロイテル ジャバ型二 トロンプ型 一	リアンダー型一 アレスーサ型一 トロンプ型 一	
驅逐艦	八 一二 四	六 五	
特務艦	二 一	三 二	一
潜水艦	五〇	二九	
砲艦	八	六	二
敷設艦	五	二	
掃海艇	六		二
魚雷艇	九	二	一 一
其他ノ小艦艇	一六	二四	二
特設艦艇	三	二	
船舶	一六九隻（約九三四、〇〇〇噸）	一二九隻（約四八五、〇〇〇噸）	五〇三隻（約二二一〇、〇〇〇噸）
飛行機	撃墜九八二（内不確實一三七）	撃破 一、二九二	合計二、二七四（内不確實一三七）

註 これは開戰以來、五月二十日までに判明せる帝國海軍の綜合戰果である。

珊瑚海海戰の戰果中、英甲巡キャンベラ型一隻を削除した。
わが方の喪失したものは、敵側に比較して甚だ少數なれば表では略しておいた。

既に述べた各海戰並びに隨所に展開せる洋上戰鬪において、撃沈破せる敵艦艇は發表されたものだけで、總數實に二百五十一隻の尨大な記錄を示してゐる。
これを內譯すれば、撃沈艦艇は、

戰艦	八隻
航空母艦	六隻
巡洋艦	十五隻
驅逐艦	卄四隻
潜水艦	五十隻

などで、計約五十八萬トンに上り、そのほか小艦艇五十隻を加へれば、實に百五十三隻に及ぶのである。
この中には、六隻の米戰艦と二隻の英戰艦を含み、更に四隻の米空母と一隻の米水母に、一隻の英空母を計上してゐる。

戦艦は移動する要塞であり、空母は動く飛行場であるから、即ち八隻の戦艦を撃沈させたことは、八つの頑強なる洋上要塞を攻略したことと同じである。また六つの航空機母艦の喪失は、敵にとつては有力なる反撃の移動基地を奪取されたことと同じである。

次に、撃破艦艇は、

戦艦	五隻
巡洋艦	十二隻
驅逐艦	十一隻
潜水艦	廿九隻

などで、計約三十三萬トンに及び、そのほか小艦艇四十一隻を加へれば、九十八隻を算するのである。

これらの撃沈破數によつても判るやうに、如何に敵の海上戦力が莫大なる低下となつて、今後における大艦隊進攻作戦に相當痛手を蒙つたことが充分に看取されるであらう。

潜水艦についてみても、戦前保有量はアメリカ約百隻、濠、蘭印それ〴〵十餘隻で、これを合計

しても百三十隻を超えないのに拘らず、その半數强の、七十九隻を喪失したのであり、しかもこの中には米海軍が自恃するところの、最鋭の航續力長き優秀艦の多數が含まれてゐるのであるから、この反擊兵力の失墜とその蠢動補給基地の漸落と相俟つて、敵の野望は逐次、今日より明日へと崩壞を急ぐより外に途はないのである。

かくの如く敵艦艇に與へたる損害の甚大なるに比べて、わが方の艦艇で尊き犧牲となつたのは、最近の珊瑚海海戰において、不幸にも敵潜水艦の魚雷をうけ沈沒せる水上機母艦一隻、敷設艦一隻を新しく追加するの損害に過ぎず、他は旣に發表された小型航空母艦一隻、驅逐艦六隻、潜水艦六隻と特殊攻擊隊の榮譽に薫る特殊潜航艇五隻を、主なる損害として數へるのみで、その餘りに隔絶せる彼我損害の差違は、わが海軍魂の卓絶さを物語るものである。

○

敵船舶で、われに擊沈されたるもの百六十九隻、約九十三萬四千トンに達し、擊碎されたるもの百二十九隻、約四十八萬五千トンに上る。そしてわが方により拿捕されたるもの五百三隻、約二十

二萬トンであるから、總計八百一隻、百六十三萬九千トンといふ、驚異の數字が敵商船隊が蒙れる今日までの全損害である。

この敵被害船舶の國籍を米、英、蘭、濠と明記せずとも、その大部分が太平洋における米船舶であり、またインド洋における英船舶であることはいふまでもない。

帝國海軍が開戰以來、撃沈せる敵船舶を假りに月平均にすると約十七萬トンとなり、撃破は九萬トンとなる。たゞし、これは對米船戰果のみではないが撃沈破を合せれば月二十六萬トンに上ることになり、それに獨伊が大西洋側において米商船隊に敢行しつゝある攻撃を加へれば、更にこの數字は飛躍して、米商船隊をます〳〵窮地に陷れつゝあることは明白である。

また英國が自活のため不可缺の寶庫とたのむインドは、帝國海軍の展開せるインド洋大作戰により、その本國との海路を不隨化され、そして同洋上の英船舶は東面においては全く航行不能となり、西面においても絶大なる不安なしでは移航し得ない狀態である。されば、世界一の商船隊を誇り、その存在ゆゑに保たれてゐた大英帝國は、今や次第に沒落の一途を辿るばかりである。

しかもわが方の拿捕船舶五百三隻、二十二萬トンは有効に活用され、わが海上輸送力に裨益しつゝあるを知るとき、彼我の相違は、けだし欣快の念を深くするものである。

○

帝國海軍航空部隊は開戰の劈頭、ホノルルの上空、或は地上において米機四百六十餘を撃墜破せるを最初として、マレー方面に、比島方面に、果敢なる攻撃を繰返し、更に全蘭印戡定作戰に出動し、反撃せる敵機を屠り、インド洋セイロン島方面にて大戰果をあげたるほか、最近では北濠並びにニューギニヤ東部に姿を現した敵機を索めて逐次これを撃碎してゐる。

從つて敵機の損害は莫大な數字に達し、わが方に撃墜されたるもの不確實百三十七機を含み合計九百八十二機であり、撃破せるものまた一千二百九十二機に及び、これらの總計は實に二千二百七十四機といふ驚くべき戰果である。

これで見ても、空より試みようとする敵兵力は、わが精鋭無比なる海鷲の前には單なる好餌に過ぎない。なほ濠洲方面に殘存するだけで、共榮圈内には有力なる敵機群は殆ど殘されてゐないことが、この綜合戰果によつて數字的に示されたわけである。各海戰に忽ち出動し、時には攻撃部隊の根幹となり、時にはわが艦艇部隊に協力しつゝ廣大なる哨戒を行ひながら、かくの如き大量の敵機を撃墜破したのに拘らず、わが方の喪失したる飛行機は僅かに二百四十八機に過ぎないのである。

わが潜水艦の偉力と獨伊戰

更に、わが海軍力の絶大なる戰果を掲げて、われわれは歡喜に浴

するとしよう。

七月十八日の大本營發表によれば、

西インド洋、南阿方面に作戰中の帝國潜水艦は、六月上旬より七月上旬に亘り、敵船二十五隻、一約二十萬トンを撃沈せり。

とある。

インド洋に活躍せる帝國海軍潜水艦部隊は、遠くアフリカの東岸に肉薄し、同沿岸一帶をも脅威しつゝあつたが、こゝに發表された戰果は、實にその逞しき不屈の敢闘精神を遺憾なく示してゐるのである。

しかしてこの戰果のあげられたる六月上旬より一ケ月間における獨伊の北阿作戰の進展を見るとき、自らそこに日獨伊連繋の協同作戰といふことに思ひを達する。卽ち大東亞戰爭の勃發と共に、固く結ばれたる日獨伊三國同盟は、米英徹底打倒に邁進することを誓ひ、世界新秩序樹立の大理想達成を目標としてゐることを、最も明快に具現されたのは、實にこの戰果をもつて嚆矢とするのである。

いひかへれば北阿における獨伊の赫々たる大戰勝の陰には、三國協同作戰の威力が響いてゐたの

である。帝國海軍がインド洋に出撃せる戰歴を拾へば、われらの知つてゐる最初のものは、シンガポール陷落直後にインド洋に展開されたる、わが潜水艦部隊の活潑な活動であつた。そして更にコロンボ攻擊、ツリンコマリー攻擊が華々しく行はれた後、マダガスカル島攻擊となり、ダーバン攻擊が行はれ、わが海軍が全インド洋を馳驅することによつて、印度、北阿にある英兵力に與へた威嚇は極めて甚大であつた。

試みに、わが方のこの戰歴と北阿戰線の動きとを、月日順に列記すれば、そこに瞭然たるものがあることを知る。

二月中旬　帝國海軍潜水艦部隊のインド洋出擊（日本）

二月十三、四、五日　地中海にて獨伊空軍による英大護送船團攻擊、戰果は英巡など八隻、商船約十隻擊沈破（獨、伊）

三月二日　東南インド洋にて帝國海軍が米巡、英驅、米砲艦らを擊沈（日本）

三月十六日　までに、東インド洋にて、わが潜水艦部隊は、敵商船十一隻、約八萬トンを擊沈（日本）

三月二十六日　獨機マルタ島猛爆（獨）

四月五、六、七日　帝國海軍部隊はコロンボその他を攻擊、更に同九日ツリンコマリー軍港を強襲し、これらの各戰鬪において英空母ハーミスはじめ英巡二隻、英驅一隻擊沈、英巡一隻大破、船舶三十五隻擊沈（日本）

四月七日　獨機アレキサンドリヤ猛擊（獨）
五月三十一日　わが特殊潜航艇隊がマダガスカル島北端デエゴ・スワレズを奇襲、英戰艦クイーン・エリザベス型一隻並びに英乙巡一隻擊破（日本）
六月十日　わが潜水艦南阿ダーバン港を砲擊（日本）
六月十四日　獨伊空軍は地中海にて英護送船團及び護衛艦隊を攻擊し、これを擊滅（獨伊）
六月二十一日　トブルク占領（獨伊）

となり、わがインド洋作戰と獨伊の地中海作戰の間に、自ら戰略的連絡のあることが判る。インド洋を西へ〳〵と後退した英海軍は、今やアラビヤ海と紅海の奥深く追ひつめられ、インド洋よりする西亞、北阿への輸血路は完封せられて、英帝國崩壞の兆はいよいよ決定的となつたのである。

敵船舶の擊沈破戰果　更にまた、七月十八日の大本營發表によれば、帝國海軍の開戰以來、七月十日までに擊沈破せる敵船舶累計左の如し。

飛行機に依るもの　百九十四隻、八十二萬九千トン
潜水艦に依るもの　九十九隻、七十二萬四千トン
艦艇その他に依るもの　七十三隻、三十八萬二千トン
合計　三百六十六隻、百九十三萬五千トン

とある。

帝國海軍は、その作戰使命の第一を敵海上兵力の撃滅におき、敵船舶攻撃の通商破壞戰は第二義的にとり上げてゐるやうである。今日、開戰以來はじめての海の記念日を迎へるに當り、この第二義的作戰對策である敵船舶撃沈の大なる綜合戰果を見るは、實に驚嘆すべきものである。

即ちハワイ海戰、マレー沖海戰、ジャバ沖海戰、インド洋作戰、珊瑚海海戰、東太平洋作戰などの歴史的大海戰のすべてに連勝する一方、帝國海軍各部隊はそのかたはら默々として通商破壞戰にも撓まず、赫々たる戰果を重ねてゐたことを、われわれは知り得たのである。

武力戰は勝敗の決定を斷ずるものではあるが、通商路破壞に伴ふ經濟封鎖によつて敵に致命的悲鳴をあげさせることも出來るのである。濠洲は既にこれがために孤立化し、インドの寶庫がイギリスの自由にならなくなつたのも、船腹不足によるものである。

開戰以來、米英の船腹喪失は既に千五百萬トン臺に上り、英帝國が前大戰において喪失せる船舶損害に比肩するの尨大な數字を示してゐる。しかもイギリスは、その食糧の七割六分を國外に依存し、兵器、石油その他の必需物資のため、年七千萬トン近い船舶を要するのである。そこで、この目的のために年七航海を行ふものとすれば、約千萬トンの船腹ですむわけであるが、現在イギリス

が保有してゐる船舶のうち、遠航可能のものは八百萬トン臺を割るに至つてゐる。もつとも、極端なる物資節約を行へば、どうにか間に合はないこともなからうが、これによつてもイギリスは崩壊直前に瀕してゐることを知ることが出來る。

とまれ、帝國海軍の作戰區域は、太平、インド兩洋の全水域に及んでゐる。それは二億四千萬平方キロの廣きにわたり、南北大西洋を合した面積の三倍に當つてゐる。しかも東西兩半球、赤道の南北に跨つてここに作戰するわが將兵の勞苦こそ、眞に謝し切れないものである。殊に、この廣い水域においての索敵が、如何に困難であるかは想像の限りでない。この勞苦と困難を克服して、二百萬トンに近い敵船を屠つたのである。その數量は昨年度の米國造船總量の二倍を占めるものであり、その損失が敵戰鬪力に與へる影響は測り得ないものがあらう。

帝國潜水艦の新戰果　更に瞠目すべき戰果が、七月二十八日に大本營から發表された。七月十八日敵船舶擊沈破綜合戰果の發表後、更に帝國潜水艦の擊沈せる新戰果左の如く判明せり

一、米本土西岸シヤトル方面　六千トン級一隻（六月八日）　七千トン級一隻（六月二十日）

二、濠洲東岸シドニー方面　二萬トン級一隻、一萬トン級二隻、七千トン級一隻、五千トン級一隻（自六月一日至六月十六日）

三、アリユーシヤン列島ダツチハーバー方面　六千トン級一隻（七月十六日）

と發表された。

このわが潜水艦部隊の戰績において、ダツチハーバーは太平洋の北の端、シヤトルはわが方より洋上八千キロの米西岸要衝、シドニーは遙か南太平洋の要害で、米英海軍は全太平洋のこの最北、最東、最南の各要港と同方面海域を死守せんとし、嚴重なる哨戒を怠らなかつたであらうが、わが潜艦部隊の前には慴伏するより外に途がなかつたことを知る。かうして敵側の海上不安が増大すれば、米英の破局はこの海上航路の不隨化によつて、より早く招來することは必定である。

今次戰果は小計八隻、七萬一千トンであるから、これを前の開戰以來の船舶撃沈戰果に加算すると、トン數においては堂々二百萬六千トンとなり、撃沈總計三百七十四隻となる。これに、ドイツ海軍が過去半ケ年の撃沈戰果六百十六隻、三百八十四萬三千トンを加算すれば、米英側はこゝ約半歳にて九百九十隻、五百八十四萬九千トンといふ巨大なる數字の船舶を喪失せることになる。伊海軍も活躍の熾烈さを加へ、地中海はもとより米東岸に出撃して大なる戰果をあげてゐる。こゝに米英の制海權は、たゞ聲のみで實のないことが充分に判明したものである。

敵潜水艦のゲリラ戰を完碎す　なほ、敵の潜水艦ゲリラ戰を完碎したことが、大本營より七月

十九日發表された。

帝國海軍の開戰以來、七月十日までに擊沈破せる敵潛水艦累計左の如し。

擊沈　五十九隻　擊破　三十八隻　合計　九十七隻

とある。

帝國海軍の緒戰以來、勇猛果敢なる進攻作戰により次々と潰滅された米英は、すべての戰略を失つたため、遂に潛水艦ゲリラ戰に終始するの止むなきに至つたが、廣袤果しなき大洋に、或は本土周邊の防衛に默々として縱橫の活躍をつゞける、わが海軍部隊、監視部隊、さては航空部隊、各鎭守府などの本土警備部隊の戰果の累積は、實に敵潛水艦擊沈破九十七隻の偉勳を奏した。まさに敵ゲリラ戰法の企圖を全面的に完封し、これを水泡に歸せしめたものといふべきである。

即ち戰前の情報によれば、アメリカは潛水艦保有量大型四十隻（そのうちマニラ方面三十隻）中型四十隻、沿岸防備用その他五十隻、その合計百三十隻を擁して、北はアリユーシヤンからハワイミツドウエー、グアム、フイリツピンなどに潛水艦根據地を持ち、かのジヤバ沖海戰の敗將、米アジヤ艦隊司令長官大將ハートも、潛水艦戰術の權威として東亞水域に潛水艦の增强に狂奔した。またイギリスはシンガポール、香港を根據地として約十數隻を保有し、オランダは蘭領ボルネオ方面

に約二十隻の新鋭潜水艦をもつて、われに空しき挑戦を試みんとしたものだが、既に英蘭潜水艦は全滅し去り、アメリカは開戦後更に二、三十隻の新潜水艦を建造したといふが、これとて悉く撃滅されたも同様である。

○

ソロモン海戦までの大戦果日誌　わが海軍の大なる偉勲を、日誌として左に掲げてみるとしよう。

ハワイ海戦（昭和十六年十二月八日）

撃沈　戦艦五　巡洋艦二

大破　戦艦三　空母一　軽巡二　駆逐艦二

中破　戦艦一　乙巡四――アメリカ

マレー沖海戦（昭和十六年十二月十日）

撃沈　戦艦二　駆逐艦一――イギリス

ジョンストン島沖（昭和十七年一月八日）

撃沈　水上機母艦――アメリカ

ハワイ沖（同年一月十二日）

撃沈　空母　一――アメリカ

タラカン（同年一月十三日）

撃沈　特務艦　一――オランダ

エンダウ沖（同年一月二十七日）

撃沈　驅逐艦　一

小破　驅逐艦　一――イギリス

マーシヤル群島沖（同年二月一日）

中破　甲巡　一――アメリカ

ジヤバ沖海戰（同年二月四日）

撃沈　甲巡　一――アメリカ

　　　輕巡　二――オランダ

大破　輕・巡　二――イギリス

ジヤバ海（同年二月五日）

撃　沈　驅逐艦　一――イギリス

シンガポール島南方（同年二月十日―十四日）

撃　沈　輕　巡　一――イギリス

特設巡　一――イギリス

潜　艦　一　敷　設　一　特務艦　一　砲　艦　二

小　破　巡洋艦　一――オランダ

驅逐艦　一　魚雷艇　一

ジャバスマトラ島（同年二月十八日）

撃　沈　特務艦　一

中小破　驅逐艦　五

バリー島沖海戰（同年二月二十日）

撃　沈　驅逐艦　四――アメリカ、オランダ

大　破　巡洋艦　二　驅逐艦　一――オランダ

ニューギニヤ島北東（同年二月二十一日）

擊沈　空　母　一――アメリカ

チモール島（同年二月二十二日）

擊沈　敷設艦　一――オランダ

大鳥島（同年二月二十四日）

中破　巡洋艦　二――アメリカ

驅逐艦　一――アメリカ

スラバヤバタビヤ沖海戰（同年二月二十七日―三月一日）

擊沈　甲　巡　二――アメリカ、イギリス

乙　巡　四　オーストラリア、オランダ

驅逐艦　八　潜　艦　七　砲艦、掃海艇　一

バリ島（同年二月二十七日）

大破　特設空母　一――アメリカ

チラチャップ沖（同年三月二日―三日）

擊沈　驅逐艦　一――イギリス

砲艦一――アメリカ

濠洲西方（同年三月二日）

撃沈　乙巡一――アメリカ

ジャバ海（同年三月五日）

撃沈　掃海艇一――イギリス

ロンボク水道（同年三月九日）

、撃沈　掃海艇一――オランダ

コロンボ沖（同年四月五日）

撃沈　甲巡二――イギリス

ツリンコマリ沖（同年四月九日）

撃沈　空母一――イギリス

驅逐艦一――イギリス

大破　乙巡一――イギリス

珊瑚海海戰（同年五月七日―八日）

撃沈　空母　二――アメリカ
　　　戦艦　一――アメリカ
　　　甲巡　一――アメリカ
　　　驅逐艦　一
大破　戰艦　一――イギリス
　　　甲巡　一――イギリス
　　　驅逐艦　一
大損害　甲巡　一――アメリカ

濠洲シドニー　（同年五月三十一日）

撃沈　軍艦　一

マダカスカル島デエゴ・スワレズ　（同年五月三十一日）

撃沈　戰艦　一――イギリス
　　　乙巡　一――イギリス

ミツドウエー强襲　（同年六月五日）

撃沈　空母　二――アメリカ
　　　甲巡　一――アメリカ
　　　潜艦　一――アメリカ

ソロモン海戰（同年八月七日）

撃沈　戰艦　一
　　　巡洋艦　七
　　　驅逐艦　四

撃沈　甲巡　二
　　　驅逐艦　二

五、帝國陸軍力

半歳の大戰果　次に帝國陸軍が大東亞戰爭開始以來六ケ月間（昭和十七年五月三十一日まで）に收めた絶大なる綜合戰果を表示すれば左の如くである。

一、支那作戰（香港攻略を含まず）において交戰せる敵兵力並に敵に與へたる損害

方面	交戰兵力	敵ニ與ヘタル損害		
		遺棄屍體	俘虜	計
北支	約九十萬	約五萬六千三百	約三萬三千	約八萬九千三百
中支	約五十八萬	約五萬三千六百	約一萬	約六萬三千六百
南支	約五萬	約二千五百	約一千	約三千五百
計	約百五十三萬	約十一萬二千四百	約四萬四千	約十五萬六千四百

二、南方作戰において交戰せる敵兵力並に敵に與へたる損害

方面	交戰兵力	撃滅セル兵力	
		兵團數	內譯
香港	約一萬五千	約一ケ師團	英、加、印軍
比島	約十萬	約十一ケ師團	米、比軍

マレー	約十二萬	約六ケ師團半	英、濠、印、マレー軍
蘭印	約十二萬	約四ケ師團	蘭、米、英、濠軍
ビルマ	約十五萬	約十三ケ師團	英、印、重慶、ビルマ軍
計	約五十萬五千	約卅五師團半	

三、俘虜

米軍	二萬五千	
英軍	六萬四千	内 カナダ兵一千六百 濠洲兵一萬七千 を含む
蘭軍	二萬四千	
重慶軍	四萬四千	
其他	十八萬五千	ビルマの重慶軍俘虜及び國籍未調査のものを含み内インドネシヤ兵約十萬は殆ど解放せり
合計	卅四萬二千	

四、鹵獲兵器その他

火砲	三千七百六十三門	重輕機	一萬一千五百四十八挺
戰車	一千四百四十輛	小銃	廿一萬六千七百十四挺
自動車	三萬一千五百八十九輛	機關車 客貨車	一萬二千二百輛
飛行機	二百四十機	船舶	四十八隻(十一萬七千トン)外ニ小舟艇二百九十九隻
撃墜破セル飛行機	一千六百卅六機 (内不確實二百四十一)	撃沈破セル船舶並ニ艦艇	撃沈　砲艦一潜水艦一魚雷艇一汽船四十一 大破　巡洋艦一砲艦三驅逐艦三潜水艦二魚雷艇五汽船四十六

五、陸軍部隊南方占領地の現況

地名	面積(方粁)	比較	人口(萬)
香港	一千	佐渡と壹岐とを合せたるものより稍大	百五萬

フイリッピン	三十萬	略本州、四國、九州を合せたるものに同じ	一千六百萬
マレー	十三萬二千	本州より奥羽、關東地方を除きたるものに略同じ	五百五十萬
ビルマ	六十七萬	略日本全土に同じ	一千五百萬
ジャバ島	十三萬二千	本州より奥羽、關東地方を除きたるものに略同じ	四千百七十一萬
スマトラ島	四十五萬六千	略本州と朝鮮を合せたるものに同じ	七百九十八萬
ボルネオ其他	八十三萬五百十	日本全土の一・二倍强	六百四十四萬
合計	二百五十二萬一千五百十	日本全土の三・七倍强	九千三百六十八萬

昭和十六年十二月八日、米英撃滅征戦の火蓋を切つてから半歳の間に、わが陸海空の精鋭は、東は米太平洋岸、南は濠州、西はインド洋へと出撃し、そして至るところで敵聯合軍を撃碎して、これらを東亞より總退却せしめ、敵側が戰前に宣傳した對日包圍陣は既に終焉を告げたのである。

そこで、陸軍の綜合戰果を見るに、俘虜の數は米、英、蘭、重慶、その他合せて實に三十四萬二千にも達してゐるが、これらの一部は現在、各地にありて土木工事、建設工事などに使役されてをり、そのうちインドネシヤ兵十萬などは共榮圈建設に積極的協力を誓つたので一部は解放されたの

である。

また陸鷲が撃墜破せる敵飛行機は一千六百三十六機に上つてゐるが、前記の海軍側二千二百七十四機を加へれば實に三千九百十機、これに陸軍側の鹵獲二百四十機を合計するならば、敵聯合軍が東亜地域で失つた飛行機は優に四千機を超過するわけである。

終りに、わが方の損害として、戰死九千百七十四、戰傷二萬七百二十、合計二萬九千八百九十四名といふ、その數にありては敵側と比較にならぬ僅少といへども、深甚なる敬意を表するものである。また飛行機三百四十八機、船舶三十一隻（約十六萬トン）である。

かくの如く開戰六ケ月における、わが陸海軍の赫々たる大戰果は、戰力、兵力、資源の各方面に亘つて長期戰完遂の基礎をうち建てたのである。

なほ末章で、この「日本の勝利」の續篇を記して、本書の結びとするものである。

第二章　盟邦ドイツの强味

一、ドイツが世界戰爭から再起するまで

世界戰爭　西紀一九一四年から一八年にかけて續けた戰爭は、文字通りの世界戰爭であつた。だから、この戰爭に局外中立を守つた國は、オランダ、デンマーク、スウエーデン、ノルウエー、スペイン、ペルシヤ、メキシコなどの第二流、第三流の小國だけであつた。そして、その領域においては世界陸地の七割を、その人口においては九割を占める二十八の國が戰線に見えたわけである。いふまでもなくオーストリヤとセルビヤの開戰に端を發し、前者に味方したのがドイツ、トルコ、ブルガリヤの同盟國軍であり、後者を援けたのがイギリス、フランス、ロシヤ、イタリヤ、ベルギー、日本、アメリカ、支那、ルーマニヤなどの聯合國であつて、この兩者間に戰爭が擴大されていつた。

聯合國側に對し最も頑强に抵抗したドイツは、一九一八年七月に至つて衰頽し始め、同年十一月休戰、翌年ヴエルサイユ條約その他によつて媾和が成立した。

そしてロシヤ、ドイツ、その他の諸國に革命が起り、ロシヤは共産主義の國家となつた。イタリ

ヤとドイツには全體主義國家が誕生した。代議制度は、これによつて代位されることになつた。

かくの如き規模の大なる戰爭は、實に有史以來曾て見ざるもので、その影響の深刻さを知る資料として、左に表を掲げるとしよう。

交戰七大國の人口と死者數、戰費概算比較

	人口	死者	戰費
英	四、五〇〇〇萬	九〇萬	七一九億圓
佛	四、〇〇〇	一三八	五七一
伊	三、五〇〇	四六	一六一
米	一一、〇〇〇	五	四六一
露	一六、〇〇〇	一七〇	五五五
獨	六、八〇〇	一六〇	六六六
墺	五、〇〇〇	八〇	三四三
人口に對する百分比		二・二	
聯合國計			二、七一三
同盟國計			一、〇五八
總計			三、七七二

この戰爭概算の總計三千七百七十億なる金額は、ナポレオン戰爭の六十億、南北戰爭の百四十億、普佛戰爭の六十億、日露戰爭の四十億に比べるとき、それがいかに桁違ひの大きさであることが知られるであらう。なほ世界戰爭における戰費の一日平均額を示せば、

交戰國戰費一日平均支出額

米	七二、二〇九千圓
英	四七、八三二
獨	三九、一八七
露	三八、九六四
佛	三五、八三二

である。この戰費を、一九一四年度におけるそれぞれの國の平時歳出豫算に比較すれば、英は十二倍、佛は十倍、米は二十七倍、伊は七倍、露は七倍半、獨は八倍半、墺は二十五倍に達したのである。

さて、この大戰爭の跡始末をつけるべく召集されたのが、パリの媾和會議（一九一九年一月）であり、その結果として示されたものがヴェルサイユ條約（一九二〇年一月）であつた。

ヴェルサイユ條約　會議はフランス首相クレマンソーを議長として開かれた。これはさきにアメリカのウイルソン大統領が世界の平和回復の大綱として十四箇條をあげたものを原則としたものであるが、わが國が提出したところの人種平等案の如きは一蹴されたやうに、各國の立場に利害があつたことはいふまでもない。

その當時、フランス政界の猛虎クレマンソーが、わざわざアメリカから出馬して來た人道主義者のウイルソン大統領の生温い態度に對し、烈火の如くに憤慨して、

「ウイルソンは怪しからん奴だ。フランスは徹底的に、敗戰國ドイツをたゝき潰すよりほかには何等考慮の餘地はない」

と絶叫して、ウイルソンと大喧嘩をした。

その大喧嘩の揚句、ヴエサルイユ宮殿の出口で、クレマンソーがウイルソンをなぐり飛ばしたために、ウイルソンはフランス病院に入院したといふ秘話さへ傳はつてゐる。

左にヴェルサイユ條約のうち、ドイツに對するものの要點を示せば、

一、アルサス、ローレンをフランスに割讓すること。
二、ザールの炭坑地方を十五年間フランスに委任統治させること。
三、ダンチヒを自由市として國際聯盟の管理に委託すること。
四、海外の領土と植民地を全部放棄すること。そして東アフリカはイギリスに、西南アフリカは南阿聯邦に、トーゴランドとカメルンは英佛の協同統治に、太平洋諸島は赤道以南はオーストラリヤ、以北は日本の委任統治とする。
五、陸軍を十萬人、海軍を十萬噸以下に制限し、潛水艦、航空機の所有を禁ずること。
六、ライン河東、バルト海沿岸などの軍事的施設を禁じ、キール運河を開放し、ヘリゴランド島の防備を撤廢すること。
七、聯合國に對して一千三百二十億金マルクの償金を支拂ふこと。

なほ、この條約によつて、いはゆる民族自決主義による群小國家が出現し、別に戰爭防止の機關として國際聯盟が設立され、また勞働問題のために國際勞働事務局が聯盟の一部として置かれることになつた。

ここで少しく當時のドイツの一般狀態を振り返つてみよう。

休戰條約成立後、革命騒ぎでしばらく政權の確定しなかつたドイツは、一九一九年二月、昔ルッソーの宗敎改革で名高い中獨の古都ワイマールで、形ばかりの國民投票を行つた結果、フリードリッヒ・エーベルトを大統領に選擧し、共和國ドイツの憲法を決定した。

これを待つてゐた戰捷聯合國は、平和條約をパリー郊外ヴエルサイユ宮殿においてドイツ政府代表に押し付けた。これが內容は前に記したが、ドイツ政府はこれを素直に受諾しないであらうと、骨の髓までドイツを憎んでゐた當時の佛大統領クレマンソーが、武力によつて威嚇することを忘れなかつた。だからドイツは悲憤の淚を呑んでといふよりか、やけ氣分で無條件に受諾したのである。勿論それを履行するだけの目當は全然なかつたが、それより外に方法が選べなかつたからである。

これを見た聯合國側、殊にフランスはこれでもう安心だ、ドイツは永久にわれらの奴隷同様にしたと北叟笑んだものだが、誰か二十年後にこの逆の事實が現はれようと想像したものがあらうか。

かくの如き屈辱的な無防備と、また負擔し切れない賠償金を含む條約を、國會において報告せられるや、悲憤の極に達し、むしろ死を擇ぶ方がましだと絶叫する議員もあつたといふ。しかし武力の前にはすべてが無意味であつた。ドイツ政府は如何ともする方法がなかつた。たゞ納まらないの

は陸海軍人で、慷慨のあまり暴れまはつたが、政府はこれらを押へる力もないため、姑息な妥協政策を用ひてゐたので、ますます右傾左傾の暴力團は跋扈して來るといふわけで、まるで國内は蜂の巣をつゝいたやうな狀態になつた。

聯合軍への賠償金は勿論約束通り拂へないため、聯合國は遂にルール地方へ進軍して武力占領を敢行し、ドイツ工業中心地はさんざんに蹂躙され、有名なクルップ工場はこの時殆どすべての工作機械はフランス軍によつて計劃的に破壞されたゞけでなく、ドイツ國内の目ぼしい物資は賠償の一部として遠慮なく持ち去られたのである。

航空機の禁止　當時のドイツ陸軍航空司令官フォン・ヘップネル中將は、かう述べてゐる。

「屈辱極まる休戰條件は、驅逐機及び爆擊機、計二、〇〇〇機を即時交附すべく規定された。これによる時、獨逸國民の抵抗の豫備條件たる空中戰爭の繼續力は、將來全く不可能とならねばならない」

このやうにヴエルサイユ條約は、ドイツから完全にその空軍を奪ひ取つたのである。

「私が媾和會議の航空會議に出席した後で、聯合國側の對獨航空監視委員の一人として、ドイツに行つた時、ドイツにはまだ十六隻のツェッペリン飛行船があり、ロールバッハの工場には、すば

らしい十八人乘りの飛行艇が半分ほど完成したものがあつた。

これは大した代物だ。こんなものが出來かかつてゐるとしたら、戰爭がおしまひになつたからいいが、もう少し長びけば何がもち上つてゐたか知れたものではない」

と、その長距離用飛行艇を見た時、最初に驚嘆したのはイギリスの監視委員、マスターマン少將であつた。

かくて、この飛行艇は完成され、試驗飛行まで行つて、その性能調査の優秀さが認められたから、監視委員會の命令で破壞されてしまつた。また十六隻もあつたツエッペリン飛行船は、前の飛行艇同樣な試驗の後に破壞されたり、敵國に引渡されると知つてドイツ自らの手で八隻を破壞してしまつたが、殘りはフランスかイギリスに持ち去られた。

アメリカでは、ドイツ人自ら八隻のツエッペリンを破壞した代償として、新式のものを作れと強要して製作させ、それを分捕つて行つた。

爆藥で破壞された格納庫、めちやめちやになつた殘骸の飛行機などを目擊したドイツ人ならば、ヘップネル將軍の航空隊解散の告示にあるやうに、

「顧みて戰死將兵の忠勇に想到する時、落涙潸々衣袂を濕すものあり」の感をいだかないものは

なかつであらう。

なほ彼は續けていふ。

「今やわれわれは存亡の淵に臨めり、けだし確信す、曾て欣然として戰場に赴き、その剛膽と奮鬪によつて戰場に偉功を顯したる諸士が、更に逡巡するところなく將來における獨逸の復興と福祉のために盡瘁するであらうことを！」

この告示を聞いた人に、今のウーデット少將や、また第十一驅逐中隊の指揮官であつた現大ドイツ元帥、當時のゲーリング中尉がゐた筈である。

ヴエルサイユ條約には、陸軍用及び海軍用航空隊設置の禁止、軍用機操縱士の教育は勿論、軍人及び軍屬の公的飛行禁止、軍用機の製造、軍用機材の輸入禁止、商業飛行に對しても軍用轉化を防止する性能その他を制限する規定などがあつた。これによつてドイツの翼を完全にもぎとつてしまつたかに見えた。

だが、ドイツ魂は決して屈服するものではなかつた。

あらゆる困難のうちに一九一九年、既に航空の再出發が「飛行郵便」によつて開始されたのである。しかし、それ以上に「レーンの翼」即ちレーン高原を帆走飛行した發動機なしのグライダーを

見逃してはならない。このドイツのグライダーは、ヴェルサイユ條約の結果として提出された産物であるかのやうに思はれるが、さうではなく大戰前から研究を進めてゐたのである。しかし、大戰後において數時間にわたる飛行の可能を實證して、ドイツ航空界に大きな光明を與へたほど發達したことは事實である。

空軍の再建　一九三二年、ローザンヌ會議で賠償債務の問題を片づけたフォン・パーペンの功績、チュネーヴにおいて軍備の平等權を獲得したフォン・シュライヘルの功績につゞいて、一九三三年一月三十一日、ヒツトラー總統のナチス內閣は成立した。それから三日目には「ドイツ聯邦航空長官に關する命令」なるものが發布され、その初代長官にヘルマン・ゲーリング元帥を任命したのである。彼こそ曾て若き中尉の頃、ヘツプネル將軍からドイツ空軍解散の訣別の辭を聞いた一人であつたことを思へば、さぞ無量の感に打たれたであらう。

翌年、軍縮に關する用務を帶びて、フランス、ドイツ、イタリヤの政府訪問の目的で、イギリスのイーデンがドイツに來た時、ヒツトラー總統から、

「ドイツは軍用飛行機の建造權を要求し、これはドイツにとつて緊急缺くべからざる問題である」

と宣言されて、イーデンを驚かしたのである。

それも道理、それから約四ケ月目に英國議會において、ボールドウイン首相は「ドイツ空軍は飛行機六百乃至一千臺を擁してゐる」と發表せざるを得なくなつた始末である。

イギリスではドイツの飛行機數について議論をしたり、フランスでは航空大臣が空軍に採用する飛行機の不正取引をしたり、人民戰線の騷ぎで航空工業の能率がガタ落し、しかも飛行機の先進國を誇りつゞけてゐる間に、ドイツではハインケル、メツサーシユミツトなどの如き、世界を驚異させる飛行機を製作してゐたのである。

このやうなすばらしい空軍再建を、ドイツはどんな方法で行つたかを知らねばならない。

青少年の航空訓練　ドイツの空軍組織は、丁度ピラミツド型の組織で、その頂點を空軍第一線とすれば、その底をなすものは模型飛行家の大群である。即ち小學生が十一歲になると、正科として模型飛行機の作り方を習はせる。そして特に興味をもつ少年達は、D・Jと略稱される幼年團の模型飛行機部に入つて、更にその研究をつゞけるのである。

十四歲になれば、これらの少年達は、ヒツトラー・ユーゲントの團員となる。そして飛行機の知識と初步の理論を學んだ少年達はF・H・J即ちヒツトラー少年航空團員として、模型飛行機につ

いて訓練をうけるほか、本物のグライダーについて訓練をもうける。
やがて十八歳になれば、N・S・F・K即ちナチス飛行團に入團し、グライダーの製作から輕飛行機の操縦、整備、訓練を受ける。十八歳六ケ月になれば、病人以外は半年程、勞働隊勤務(アルバイト・ディンスト)に服し、土木工事に從ひ、次いで射撃を訓練され、間もなく大部分の者は入營して空軍部隊の教育をうけ、除隊になれば再びナチス飛行團に戻つて來るといふわけである。
ドイツを强國にした大なる理由の一つとして、翼のドイツ魂を認めないものはなからう。その制空の合言葉として、
「ハルス、ウント、バイン、ブルッフ」
を盛に用ふ。つまり首の骨も足の骨も、折つてしまへ、といふことで、この體當り的精神のもとに、今日の世界無比の空軍を作り上げたのである。
空軍の强味　ドイツの空軍の威力については、世に定評のあることだから詳しく述べないが、これまで一切外部に見せなかつたメッサーシュミット飛行機は、今度の戰爭で初めて現はれたものだが、その性能の絶大なことは、英佛飛行機との實戰で充分に證明されてゐる。
そして今日の戰爭の起る直前のドイツの飛行機製造能力は、一ケ月、五百臺といはれてゐたが、

いざ戰爭となれば自動車工場を飛行機製造に參加させるから、一ケ月一千臺は可能であらうと推算されてゐた。ところが戰爭になつてみると、一ケ月二千臺近くを製作してゐるものと推定される理由がある。

といふのは、飛行機の製造能力と共に、航空士を大量に養成してゐたことを勘定に入れねばならない。なほ飛行機製造の資材に不足してゐるか否かは、ドイツ國内七ケ所のユンカー工場の外に、メッサーシユミツト、ハインケル、フオツケウルフなどの工場が、現に高度の馬力で製造してゐるといふ事實を計算に入れれば、その巨大な生産能力が知れるであらう。

一九一八年より一九年にかけて敗戰に次ぐ屈辱的平和條約、極度のインフレーション、革命とつゞく不幸は、ドイツを全く混亂狀態に陷れ、ドイツ民衆の經濟生活は根底から破壞されてしまつた。それを好餌とばかりにつけ入る左翼の勢力や社會惡などで、事態はどうにも收拾し難くなつたのを、どう治めたかを知ることにしよう。

國防軍の再建　かうした情勢のもとに、ドイツ國防軍は生れ出たのであつて、內外から憂患が迫つて來たが、ドイツといふ國はそんなことで歐洲から消え去るほど弱い存在ではなかつた。

先づ國內の秩序を維持すべく、舊ドイツ軍の殘存勢力を主體とする警察的軍隊が義勇軍の形式で

發生した。ナチス國防軍のスタートがこれである。

さて、この舊國防軍から新鋭大ドイツ國防軍までの發展過程の中に、大きな役割を果す二つの要素がある。一つはヴェルサイユ條約によつて課せられた軍備制限であり、いま一つはナチスの巧な國防軍吸收、いひかへれば國防軍のナチス政權への同化である。

ヴェルサイユ條約は敗戰國ドイツの國防軍を、歩兵七ケ師團、騎兵三ケ師團の僅か十萬に制限してしまつた。しかも軍用機、戰車は一切取上げ、大砲も口徑四インチを超える重砲は一門といへどもまかりならぬといふ苛酷なものであつた。これでは全く近代的意味の軍隊ではない、警察隊に毛の生えたやうなものでしかない。

かうしておけば大丈夫だらう、英佛はひそかに得意になつたに違ひない。ところが、それが大變な認識不足で、もともとだらしのない軍隊であつたなら、かうした制限の前にはそのまゝへたばつてしまふだらうが、ドイツ國防軍の内に藏する不屈の軍隊精神は、この外部からの桎梏に對して勇ましく反撥し、かへつてこの壓迫が逆に國防軍にいよいよ磨きをかける結果になつたのである。

そこで精神的に國防軍の士官達は、いよいよ結束を固くして研磨に努めることになつた。しかもこれら士官階級をしつかりと握つてゐた舊國防軍の生みの親である、參謀總長フォン・ゼークト將

軍の指導よろしきを得たので、それは更に拍車をかけられることになつた。飛行機も戰車も要らぬ、その代り彼らは戰勝國の名に醉ふ英佛の軍隊に比べて三倍も四倍もの猛訓練を積み、戰闘技術の研究を重ねたのであつた。

本當の戰車を持たない彼らは、普通の自動車に戰車の型をつけて、これを戰車として機械化部隊に對する戰闘訓練を行つた。民間の飛行機を上空に飛ばして對空射撃の練習を積んだ。近代的裝備を持たない彼らは、かうした精神力で不足を補ひながらあくまで頑張り通した。

三十萬の將校　ヴェルサイユ軍備條項は、なほ豫備兵員の增大をおそれて、ドイツ軍の兵役年限を十二年といふ無法な長さに定めてしまつた。しかしこれも制度の意圖したこととは全く反對の結果を生むことになつてしまつた。なるほど豫備兵は十二年目にしか出來ないから、その數は極めて少いことは明らかだ。ところが一方において十二年の間の訓練といふものは、充分に技術を習得した兵士といふよりか、むしろ立派な軍事エキスパートをつくることになる。しかも訓練が周到であるから、階級こそ一兵士でも他國の將校も及ばないほどの立派な軍人が出來上るわけである。ここに「肩章のない將校」が多數に作られたことになる。だから、ドイツの軍隊を十萬人に制限した軍備條項は、軍隊の核心を形成する將校十萬人をドイツ軍に與へたといふ逆な結果を生じてしまつ

たのである。

一九三三年一月をもつてドイツは、ヒツトラー總統のナチス・ドイツとなつた。ヒツトラー總統の目標はヴェルサイユ體制の打破にあつたことはいふまでもない。そして一九三五年三月には遂に軍備條項の一方的廢棄を宣言し、ドイツの常備軍は一躍して八倍となつた。この「肩章のない將校」十萬人が、この急激な再軍備にどんな役割を演じたか、そして如何に圓滑に、且つ敏速に行ひ得たかは改めて說明するまでもなからう。この點さすがにフオン・ゼークト將軍の先見を偉とするものである。

されば、ナチスの國防軍吸收によつて黨と軍とは一體となり、國防軍自體は大衆化され、ここにナチス、國民、軍隊が三位一體となつたのである。國防軍の兵士は直にヒツトラー總統と結ばれる。それ故に命令は中間の將校がつくるのではない、ヒツトラー總統が直接に下すのだといふわけになる。これは何でもないやうだが、力の入れ方に大きな相違があることを知らねばならない。

ドイツ機械化兵團の活躍を見ても分るやうに、兵器の發達は戰爭における物質の役割を增大させたことは事實である、しかし物的要素を驅使して勝利にまで導くものは結局人間であることはいつの世にも變らないのである。即ち技術の背後にあつて技術を生み出す精神力こそ、一國の軍隊に最

も要求されるものである。

極端なインフレーション　前に述べた如く、一九一八年より一九年にかけて敗戰に次ぐ屈辱的平和條約によつて、さすがに辛抱強い國民性のドイツ民衆も、全く自暴自棄に陥り、物資の不足と政府の無方針な財政政策のために、極端なインフレーションがドイツ全土を襲つたのである。

これを體驗された松波仁一郎博士の文を引用するとしよう。

「獨逸の金融信用なくなりて、馬克(マーク)下落の急激なること、實にコレラ病の下痢より烈しく、拙者が九月一日即ち東京大地震の朝、丁抹のコツプンヘーゲンよりベルリンに着いて、カイザーホーフといふ獨逸一流のホテルで朝食した時の代價は百萬馬克であつた。

人間が一食百萬馬克の飯を喰ふなどとは、夢にも思へないことで自身體驗した者の外は信じられないことだが、これは嘘のやうな眞である。

しかし拙者共は、それほどの價にはビクともしない。けだし百萬馬克といふも、その實日本の二圓位なればなり。それからまた同じカイザーホーフで晝のランチを喰つたが、それは百二十萬馬克であつた。これまた二圓位だ。朝晝とも同じ二圓だが、馬克にすれば朝の百萬は晝の百二十萬にして、數時間の間に馬克は二十萬下落したのだから大金を一度に替へると損なるは明瞭であらう。

それで獨逸政府は、澤山な紙幣を製造する暇がないから一馬克札に千と押捺し、それで一馬克は千馬克となるやうな手極の良い、そして悲慘な事をして一時凌いだ。こんなことで馬克は益々下落し、遂に日本の一圓で獨逸の十億萬馬克以上を得られ、數字は所謂天文數字となつて獨逸政府は行詰り、遂に破產せんとするに至つた。そのとき或る財政家の名案によつてゴールド馬克、卽ち金貨馬克なるものを創造し、その馬克は信用を得て五十錢となつた」

とある。

左翼の跳梁　かうした社會の混亂狀態に乘じ、共產黨の勢力は急に擴大し、テロ團は百人部隊と稱して政府の默認の下に、白晝公然と市民から物資を掠奪するといふ、實に正視するに忍びない不安な狀態に陷つた。これを鎭壓すべく生れたのが、前に述べた國防軍であつた。

一方、中央政府は次ぎから次ぎへと替へたが、いくら內閣を造つても無駄であつた。國民の生活は極度の困窮に追ひ込まれ、聯合軍の占領地となつたルール地方の如きは、フランス軍がばら撒く僅かな金に動かされ、無力の中央政府をいいことにしてドイツ民族であることを忘れ、フランスの保護國としての獨立共和國を作り、そしてドイツの國籍から脫れようとする運動さへも起つたのである。かかるうちに、ヒツトラーの熱辯はつゞけられ、ナチス黨員はますます增加して行つたのだ

が、このことは後で述べるとしよう。

二、ナチス・ドイツの闘志精神

ヒットラー總統の獨裁權　昭和十七年四月二十六日、ドイツ國會で行つたヒットラー總統の演說中で、最も重要なものは左の一節である。

「こゝで余は特に諸君に期待したいことがある。即ち諸君は余に對して將來の問題の解決に關する權限を附與することを希望する。前線と銃後とを問はず、輸送、國家奉仕、政治の運用及び秩序の維持は單一の思想、即ち「完勝」といふ決意の中に包含されねばならぬ。故に各人にその任務を遂行せしめ得る法的權利を余が保持してゐるといふ事實を、國會が確認することを望む。義務の遂行を怠る人は、その人が如何なる大きな權力を有するとも、その地位から退けるだけの權利を、余が保有してゐることを確認されたい。前線における將士は、數ケ月も休暇を與へられなかつたことがあるが、この際、將士は休暇の權利を有してゐなかつたのである。余自身も一九三三年以來は僅か三日しか休暇を取らなかつた。

更に余はドイツの法官に對して一言する。即ちこれらの人々は、國家といふものは法官のために存在してゐるものではなく、逆に法官が國家の福祉のために存在してゐることを自覺せねばならぬ。勇敢な獨將兵が前線においてボリシエヴィキ打倒のために勇戰敢闘して、その屍を戰野に曝してゐるのに、これら法官は或る場合には國内の犯罪者に對しては信じられぬほどの輕い判決を下した例がある。現在の事態を自覺せずして舊體制維持に汲々たる法官は、今後斷乎辭職せしむる方針である」

これに對し、ゲーリング大ドイツ元帥は「總統がもし必要とみなすならばドイツの法令、規則を無視し、また如何なる軍人、官吏、裁判官、黨役員でも、現在の戰爭が要求する義務に適應しない者は、これを處罰または免職する權限を總統に與へんとする」旨の動議を提出し「總統の欲するものは總て總統に與へねばならぬ」と提案理由を説明すれば、滿場一致でこれを可決した。

即ちヒツトラー總統は、ドイツ國民の最高裁判官の權限を得て、獨裁制を一層强固にしたのであつて、いはゆる法令を超越する絶對獨裁、無制限裁判執行權を掌握したわけである。

ヒツトラー總統は一九三三年執政以來、今日まで事實上ドイツの獨裁者として國民を指導して來たが、大戰第四年に入つた現在、國民と銃後の團結を益々强化し、また軍事的、經濟的の兩方面か

ら强力無比な工作を講じて、絕對不敗の地歩を固めておく必要があるので、國政全般に亘つて無條件獨裁權を一身に把握することになつたのである。

イギリスが自己の軍力だけでは、絕對に勝利を得る自信がないのに拘らず、依然ドイツに對し戰爭を挑んでゐるのは、ソ聯の反擊と戰線擴大によるドイツの戰力消耗と歐洲の內部崩壞に希望をつないでゐるためである。また一方アメリカの援助を恃みしにしてゐるからでもある。

しかし、このヒツトラー總統の演說によれば、ソ聯の脅威は本年中には殆ど除かれる見込みだから、殘るのは歐洲の內部團結の問題だけである。そして占領地の開發により、歐州の食糧資源は充分に自給自足が出來るから、この際ドイツ國民は團結を固め、更に國內の全機構を戰時目的のために有効に動員して行けば、ドイツは絕對に戰爭に敗れることはないので、即ち對ソ大攻勢開始を前にして、この斷乎强力な措置を講じたものである。

これによつてヒツトラー總統は、一面においては自ら成功に對しても、また失敗に就いても、全責任を負ふことになつたわけで、その決意は眞に悲壯なものである。

ヒツトラー總統の戰線生活　さて、前線の大本營におけるヒツトラー總統の生活ぶりだが、全身これ鐵壁といふもまだ形容しきれないほど緊張さを示してゐる。

彼は睡眠四時間、休憩と食事に二時間、あとの十八時間は働き通しである。モレル博士といふ、以前ベルリンで開業してゐた醫者がヒットラー總統の侍醫であるが、この人が助手のプラント博士を連れて今度も大本營についてゐるが、手持ち無沙汰で困つてゐるらしい。

といふのは、酒や煙草は勿論、コーヒーも飲まない總統が、前線となれば食事はもつと簡單で、野戰精進料理一皿に、持參の果汁一杯といふのだが、それさへ忘れ勝ちで、時には林檎一個にトーストを二つ三つ嚙つて、そゝくさとお終ひにしてしまふことがあるといふ。

大本營といへば、名前こそ立派だが、大抵は適當な家を急造して間に合せの假の宿である。そして彼は、戰線の地圖をひろげ、右手に鉛筆、左に擴大鏡を握つて、幕僚と作戰を練つてゐる時間が一番長い。身につけてゐるのは、前大戰のときの一兵卒といふ心持で作つた青灰色の飾りのない制服だが、彼は戰線にありてもベルリンにありても、この服で押し通してゐる。その軍服に金糸で縁をとつた總統章がなかつたら、一兵卒と更に變りがない。

かうして作戰を議するとき、彼の口からほとばしる言葉、或は地圖の上に書きつける天才的な、そして大膽な戰術には、ゲーリング大ドイツ元帥、ブラウヒッツ總司令、カイテル國軍司令部長官をはじめ、さしも百戰錬磨の古强者連も驚嘆しない者はないといふ。もつとも最初は、將軍達の說

明をじつと聞いてゐて、最後に口數少く斷を下すといふやり方である。

櫻井忠溫氏の說によれば「ヒツトラーはあながち大戰略家といふのではなからうが、やることはズバ〳〵として、人の意表外に出る。人が甲と考へることが、定規の上ではさうあるべきだと思ふものでも、ヒツトラーは乙と出る。それがいつでも敵の裏をかくことになる。といふのが、ヒツトラーは、決してものを大まかに扱ふのではない。すべて細かい計畫のもとに運ぶたちである。ヒツトラーが宣言をする前には、チヤンとそれだけの準備が出來てゐる。宣言をやつて後に、支度に取りかかるのではない。宣言をすると、その日からでも實行が出來るのである」といふが、事實、彼は作戰を練る前には、自動車または飛行機で重要地點を驅け廻るのである。

この大本營の所在地は秘密にされてをり、また前進するものだから不定だが、幕僚達が間斷なく戰況を報告してくることはいふまでもないが、ベルリンから要務を帶びた大物が絕えず往來してゐる。主要な外交關係があれば、リツペントロツプ外相が飛んで來る。

一昨年、總統が西部戰線から凱旋したときには、ベルリンは破れるやうな騷ぎだつたが、今度反共十字軍の總帥としての使命を全うしてベルリンに歸るのは何日であらうか。しかも、その次には英本土攻略といふ、もつと大きな宿題が待つてゐる。

ナチス青少年團の義務訓練

ヒツトラーの國民に示した目標は、光輝あるドイツ民族大帝國の建設であつた。從つて次代の國民である青少年運動に着目したことは當然だが、それはアルバイト・ディーンスト（AD）と、ヒツトラー・ユーゲント（HJ）の二つである。

アルバイト・ディーンストを設けたのは、ナチスが政權を獲得した翌年即ち一九三四年で、當時はまだ志願制度であつたが、一九三六年六月から義務制となつた。ドイツのすべての青年は滿十八歳で半年間、この訓練を受けねばならないのである。即ちヒツトラー・ユーゲントの訓練が十八歳でもつて終了し、更にアルバイト・ディーンストの半年間訓練を終へ、やがて入營するといふ順序となる。

この仕事は、築堤工事をして沼澤地を耕地に改變するとか、森林を伐採するとか、ドイツ國道局管理以外の道路の建設とか、集團農村住宅や市街地郊外の住宅群新設運動の準備工作などをさせるそして粗末な宿營を各地に建てゝ、工事進捗と共に移動して行くのである。

即ち銃の代りに、晝はシャベルを持つて肉體的勞働をさせ、夕刻その宿舍に歸ればナチスの精神を吹き込み、手工、音樂、演劇などを樂しませるといふやうに、勞働と娛樂とを併行させながら、軍隊式の起居によつて團體訓練を施すのである。

そこで、一九三九年のポーランド戰爭の始まる前、このアルバイト・デイーンスト、ヒツトラー・ユーゲントを動員して、東方國境に近い地帶に宿營させて、本格的な軍隊敎錬を注ぎ込み、いよいよ九月に開戰となるや、ドイツ兵の進入した後を追つて占領地帶に入り、ヒツトラー・ユーゲントの少年達は銃器なしで占領地の雜用に働き、アルバイト・デイーンストの靑年達は、黄色地に黑色で「ドイツ國防軍」と書いた布を左腕に卷き、銃を持つて占領地の整備に當つたり、破壞された橋梁や燒失せる街を修理するなど、その活躍はめざましいものであつた。

ヒツトラー・ユーゲントは、前に日本に來たこともあるが、これが成立は前記アルバイト・デイーンストよりも古く、ナチスが政權を獲得した年には既に組織されてゐた。勿論、當時は志願制度であつたが、一九三六年十二月に義務制度となり、十五歳から十八歳までであり、この幼年部といふべきユングフオルクは、十歳から十四歳までといふことになつてゐる。

これはカーキー色の黨服を、ユングフオルクは黑色の黨服を着るのだが、これらの少年は槪して兩親の許に寢起きさせることを原則とし、一週間のうち日を定め、ナチスの指導精神を吹き込みながら團體訓練を行ひ、スポーツや音樂を主とする娛樂を與へながら、身心の鍛錬を行ふのである。いひかへれば學校敎育と家庭敎育の中間に位して、國家敎育を施すのである。

このヒツトラー・ユーゲントは勞働奉仕を第一の目標としてはゐないが、その一部には消防を實習させたり、油の原料であるブナの實を採取したり、麥の刈入れ、畑の耕作に從事したり、古新聞や古金屬の廢品蒐集を行つたりして、實質的な産業戰線から銃後の奉仕にまで進出し、遂には前に述べたやうに占領地における活動にまで及んだのである。

かくて、これらの少年をしてドイツの總力發揮の一部面と見るとき、今後十年、二十年後のナチス・ドイツは世界無比の强い軍隊を持つであらうことが想像される。なほ、このヒツトラー青少年隊には、少女團、女子青年團もあるが、これらの團員總數は九百萬餘に達するといふ。

ナチス黨の直屬部隊　前記のほかに、ナチス黨首ヒツトラー總統の直屬として、突撃隊と親衛隊の二つがある。

突撃隊（S・A）といふのは、ナチス黨獨特の軍隊と警察隊の中間を行く防衛團體である。黨の外部を形成するもので、平時は治安維持に當り、戰時は補充隊の役目を果すのである。隊員は六十萬あつて、褐色の制服を着る。

親衛隊（S・S）といふのは、ヒツトラー總統以下ナチス黨幹部の護衛團體である。隊長ヒムラー氏は秘密警察隊長を兼ね、秘密警察とは不可分の關係にある。戰時は正規軍の別働隊となる。隊

員は二十萬あつて、黑色の制服を着る。

自動車道路の計畫　次は、廣義における軍備擴充の第一歩として、ヒツトラーが天下をとると直ぐに着手したのが、自動車專用道路網計畫である。これが目的を擧げてみれば、

（一）當時のドイツの重大問題は、六百五十萬人の失業處理であつたが、ヒツトラーはこの自動車道路建設のために、一九三九年夏において直接間接の從業員二百二十萬人を使つた。即ち失業救濟の目的は、その一部分を立派に達したのである。

（二）自動車の普及と、その製造事業を奬勵し、その數二百十萬臺にまで發展させた。これがためには國民自動車（フォルクワーゲン）といふ小型自動車を造つて、勞働戰線に加入してゐるものだけが月賦で購入し得られる價格九百マルク餘り（約四百圓位）のもので、一ケ月二十マルク位（一マルクは約四十錢）で、車を持つことが出來るといつた方法まで考へて、盛にひろめたのである。

（三）邊鄙な地方の產業を開發することになる。

（四）前記の內容は、いはゆる表向きといつたやうなものであるが、一旦有事の際には、この道路でもつて敏速に大軍を移動されることを狙つたのである。それと相俟つて陸軍の機械化は、ヒツトラー總統の念願の一つであつたことはいふまでもない。

現に、對ポーランド軍事行動において、殆ど全軍が動力化された高速度交通機關によつて整備されたのであり、またポーランド征服後、暫時の休息と機械の修理の上、百五十萬の大軍が敏速に西部戰線に移動させた事實は、この（四）の目的が眞のヒツトラーの狙ひであつたことと、またそれが大なる功を奏したことを雄辯に物語るものである。

（五）ドイツが最悪の場合、例へばドイツ空軍基地が悉く叩き潰されたとき、なほ國內の至る所から自由に飛び上り、また歸着できるやうに軍用飛行機の發着場として役立てるやう考慮されてゐるといふことである。

（六）この鏡の如き平坦な道路に、百メートルおきに、深さ二メートル位の厚い鐵板をはめこみ、鐵板と鐵板との間をコンクリートでかためるので、つまり百メートルの間のコンクリートは、これがため一つの岩石になるわけで、假に爆彈が落ちても百メートルのコンクリート全體で耐へるから、なかなか壞れないことになる。

道路の幅は、六臺の自動車がすれ違ひ得る位であり、それに眞直な道だと運轉手が眠つたりするので、或る程度走ると殊更にカーヴが作つてある。

これが完成延長は約七〇〇〇粁で、この國費が約八十億マークである。

（七）さきに記した自動車政策は、戰爭となれば飛行機政策と編成替へするやうに早くから計畫されてゐたのである。卽ち民間の自動車を軍用に徵發することである。そして自動車製造會社を飛行機の部分品生産工場に振替へるのである。

電擊戰と立體戰　そこで、ドイツが一つの作戰を遂行する場合、必ずあらゆる兵種を動員して電擊的に戰果を收めるといふ特長がある。

「電擊戰」といふ言葉は、ドイツ語のブリッツ（電光または稻妻）クリーク（戰爭）の新合成語であつて、英語では電光戰（ライトニング・ウオア）と譯してゐるが、もはや大戰以來「ブリッツ・クリーク」のままで、世界各國の新流行語になつてしまつた。

卽ち、これは敵軍の意表を衝き、空軍と機械化學部隊との空陸作戰をもつて、電光の如く一擧に敵軍を擊滅する新作戰である。

この戰法は、ヒツトラー總統の獨創にかかるものであらうかといふに、さうではなく、その淵源は遠く前回の世界大戰に遡るので、一九一五年から一六年に亘る西部戰線の血みどろな攻防戰が、徒らに彼我兩軍の大殺戮を重ねるばかりで、容易に勝敗が決しなかつたときに、ドイツ軍參謀本部で思ひついたものである。その後、秘かに作戰技術を練つた結果、スペイン內亂の際、フランコ軍

が初めて獨伊兩軍の援助指導で、この新戰術の偉力を發揮したのである。

今回のドイツの電撃戰について、米國軍事評論家ライリー少將は、次の諸點をあげてゐる。

(一) 先づ敵軍のあらゆる飛行場及び飛行部隊を空襲する。

(二) 次いで鐵道の要點、停車場、兵營、火藥庫、橋梁、路上の輸送自動車、その他軍事動員のあらゆるものを空爆する。大空軍を擁する場合には(一)と(二)を同時に實施する。

(三) 前記の空爆實施中に、國境附近に配置せるあるゆる口徑の大小大砲をもつて、敵軍の砲兵陣地、塹壕、その他の軍事施設を攻擊する一方、步兵部隊が空軍の掩護爆擊の下に突擊する。かうして侵入路を作つた所へ、その突擊部隊が一齊に進擊する。

(四) 先頭にはオートバイの步兵に機關銃隊、裝甲自動車、輕戰車、野砲隊から編成された輕武裝師團が進擊する。

(五) その後から四百臺の中量戰車と、すべて機動化した步兵隊、野砲隊、戰車砲隊、高射砲隊及び多數の機械技士の一團から編成された重武裝師團が進擊する。いづれも空軍の密接する掩護を受ける。

(六) 次にトラックに分乘した正規の步兵及び砲兵師團が後續する。殊にドイツ軍には完全に武

裝した步兵一箇聯隊と、その全員を輸送するに足りる飛行機とをもつて、特別に編成された飛行隊が四箇聯隊以上常備されてゐて、これは敵軍の後方に步兵部隊を一擧に着陸させたり、或は落下傘をもつて奇襲着陸させたりするためである。その外に敵軍の度膽を拔く斬新な兵器も必要であることはいふまでもない。

しかし、この電擊隊を成功させるためには、これだけでは足りない。

卽ち數においては、ドイツ軍に及ばないとはいへ、世界一流の裝備をした百萬以上の軍隊を持つポーランドが、ドイツ軍の電擊戰の前には、まるで無裝備のエチオピアの土人軍よりも、はかなく潰滅した最大原因は、ドイツ軍當局がポーランド國內に豫め二萬のドイツ人スパイ、或は第五列を潛入せしめて、ポーランド軍の動員計畫を盜み、ポーランド軍の最高首腦部だけしか知らない軍の移動集結地點や、軍用列車の秘密時間表、秘密軍用飛行場の所在地など、すべてが判つてゐたから、開戰と同時にポーランド軍はドイツ軍のために一擧に殲滅されてしまつたのである。

そして折角準備した精銳飛行部隊の七十五パーセント以上は、ドイツ軍のために戰はずして無殘にも粉碎されてしまつたので、ポーランド國民の唯一の望みだつたベルリン空襲は夢に終つたのである。

なほ、オランダ、ベルギー、フランスなどを敗北せしめたのには、その主要都市に多くのドイツ人スパイが諜諜活動をしたがためによるといはれるが、特に注目すべきはドイツ軍の落下傘部隊が各地に降下し、その土地のドイツの便衣隊と呼應して、ゲリラ的戰鬪を展開したといふことである。

かうしたやうに常に航空部隊と地上部隊とが緊密なる連携を保つて進むのである。このことは海上作戰になつても同樣である。その地上部隊と航空部隊、または海上艦艇と航空部隊とが常に連繋のもとに、一つの作戰目標に向つて互に援護しつゝ戰ひを進めるといふ戰法が即ち立體戰である。

今日の戰法は、その性格において國家總力の形勢をとると同時に、戰鬪の形勢は必ず立體戰の樣相をもつてする。

この立體戰といふ軍用語は、前大戰以前には用ひられなかつた言葉である。前大戰で初めて航空機が戰場が用ひられ、また潜水艦が敵艦艇襲擊、或は通商破壞に活躍しはじめてから戰鬪の形態は、從來の平面戰鬪から立體戰鬪に進化したのである。しかし前大戰當時にも飛行機が活躍したとはいへ、今日から想へば幼稚なものであつた。だから、第一次歐洲大戰では嚴密な意味において、まだ立體戰とはいへないのであつた。

ところが科學兵器は、その後二十年間の驚異的發達を遂げ、そして近代作戰なる立體戰の特徴は

陸海空軍が渾然一體をなし、海底までも呼應して一擧に戰果を收めようとするのである。

若い元氣　それに、ドイツの指揮官が一般に若いといふ特長がある。北歐作戰スカパフローのドイツ潛水艦の指揮官プリン大尉は、僅かに二十一歲の青年だ。これらの若い指揮官が、第一線の先頭に立つて士氣を鼓舞してゐるのである。

この年齡のことだが、これはナチスが苦難の在野時代において、主として青年層に働きかけたので、在野當時からの鬪士として目下ナチスの指導階級にある人達は、大體に年齡が若いのである。例へばヒツトラーの片腕となつて活躍してゐる人の年齡を見るに、ヒツトラー總統が五十三歲、ゲーリング元帥が四十九歲、外交方面のリツベントロツプが同じく四十九歲、政治方面のゲツベルスが四十五歲、經濟方面のフンクが五十二歲、黨と警察方面のヒムラーが四十二歲、宣傳方面のディートリヒが四十五歲、青年指導のシーラツハが三十五歲である。

陸軍と海軍の比較　信ずべき情報によると、今度のドイツ空軍は急降下爆擊機、戰鬪機及び裝甲驅逐機の三種を組合せた新編制で、急降下爆擊機をソ聯の重砲隊、戰鬪機をソ聯の步兵隊とすれば、裝甲驅逐機は對戰車砲隊に匹敵するもので飛ぶ對戰車砲と呼ばれてゐる。そして空から敵戰車を狙ひ射ちにするのだが、その威力はすばらしく五十トン以上の大戰車も手もなく破壞されてしま

ふといふ。

ドイツ陸軍の超優秀さについても、また空軍の强味についても、既に定評ある事實だから今更述べないが、ここで海軍力について少しく評してみたいと思ふ。

海と陸との關係、卽ちドイツは大陸の一部であり、海で圍まれてゐない國だから、海軍力よりかも陸軍力の方が重要だともいへるが、イギリスやアメリカを相手に海を隔てゝ攻略するには、何よりも海軍力の充實が第一の條件でなければならない。

ヒットラー總統はドイツ國會で、

「ドイツ潜水艦は對英戰に成功を收めてをり、その數は增加し、既に前大戰當時の數を凌いでゐる」

と演說したが、前大戰當時の獨潜水艦數は三百四十三であつた。

ドイツが海軍において、立ちおくれてゐることは否定できない、チルピッツ號、ビスマルク號の三萬五千トンの二主力艦が、一九三九年八月には殆ど艤裝してゐたことは事實だが、かうした大きな主力艦を久し振りで持つたドイツ海軍が、これを思ふがまゝに動かすまでには、相當の時日を要したに違ひない。

この主力艦ビスマルク號は、昭和十六年五月二十四日、アイスランド沖で、英主力艦フッド號（四萬二千トン）を見事沈沒させたが、忽ちイギリスの追撃戰により、英艦十六隻の重圍裡に死鬪をつゞけたけれども、遂に「本艦は行動の自由を失へり、しかれども最後の一發を發射するまで戰はんとす、ヒットラー總統萬歲」といふ悲壯なる無電を打つて、雄々しい最後を遂げねばならなかつた。

ドイツ海軍の主なるものは潛水艦であつて、今次戰爭の直後スカパフローで英國軍艦に大損害を與へたのも潛水艦であるが、三ケ年間といふものは艇長も乘組員も變へないで練習したのであるといふ。

鐵資材の關係か、建造日數の關係かで主に潛水艦を用ひるやうであり、また第七章の三で述べる如く相當な成績を擧げてゐることも事實だが、しかしドイツに軍艦の數の少いのは、一つの短所ではなからうか。

前のビスマルク號の沈沒したのは、空軍と連絡の切れたことが大なる原因と考へられるが、だからといつて空軍と潛水艦だけを擴充したとて、それでもつて制海權を獲得されるものではない。

これに就いて、佐藤市郎中將の說を引用することにしよう。

「海軍の任務は制海であつて、制海權獲得のため使用する道具が艦隊である。今日の大艦隊は主力艦部隊を基幹とし、これにそれぞれ巡洋艦、驅逐艦、潜水艦、航空母艦を主として編組せられた部隊及び基地航空部隊を適當に配合して編成せられる。海上作戰のためには右の外なほ驅逐艇、敷設艦、掃海艇、及び諸種の特設艦艇を必要とする。

軍艦は極めて高度の機械化部隊ともいふべきもので、現代科學技術の粹を集めた材料、兵器、機械を使用するから、その建造費は高く、五萬トンと稱せられる米英の建造中の戰艦などは恐らく二億圓もかゝるであらう。

然るに今次の海戰では、ハワイでもマレーでも、この高價な戰艦が一見苦もなく飛行機に擊沈せられたので、飛行機萬能の時代が愈々到來したとして、戰艦無用論を說く人があるかも知れぬ。しかし、ハワイ海戰において、あの大戰果を擧げたわが飛行機は、周知の如く航空母艦から出發したものであり、そして航空母艦には種々の軍艦より成る警戒護衛の部隊が隨從してゐたのであり、またマレー沖ではわが潜水艦の敵發見並に報告が空襲部隊の手引きをしたのであつて、直接攻擊に當つたものは勿論飛行機であるけれども、あの大戰果は畢竟するに諸部隊の緊密適切な協同の結果に他ならないのである。

海上作戰の種類は多種多樣であつて、能率、經濟的軍備などの要求から專門化、分化が行はれ、その結果として前記各種の軍艦が生れた次第で、これらを適當に組合はせて、いはゞ頭部、胴體、手足が揃つて一有機體の如く作戰し得るものが、いはゆる均衡よき艦隊であり、その艦隊の中心は攻擊力、防禦力と共に風浪などの自然力に對する抵抗力もまた最大である主力艦で編成せられた部隊である。

主力艦部隊はこれを譬へれば、家の土臺石に相當し、滅多に表面に現れぬが、主力艦部隊が嚴然と控へてゐてこそ各部隊は遺憾なくその威力を發揮し得、その任務を遂行し得るのである」とあるやうに、本格的に海軍力を發揮するには、主力艦部隊が必要であることはいふまでもない。

ところが、ドイツにはこれがない。しかしドイツの立場としてUボートで米英に對し通商破壞戰に出るのも一方法ではあるが、もしドイツにして主力艦部隊があれば、より以上の英本土攻略の可能性が加はり、またその時期を早めるに違ひないことは明白だ。

即ちドイツにおいて、前大戰ではカイゼルが「ドイツの將來は海にあり」と唱へ、海相フォン・テイルピッツ提督の下に、新たに海軍の建設に着手したのだが、たまたま一九一四年の世界大戰と

なつてしまつた。しかし當時ドイツ陸軍首腦部は「英軍の大陸輸送はドイツ海軍を以て阻止する必要はない。他の陸軍と同時に、わが陸軍を以て潰滅すべきである」といふモルトケ流の思想が支配的であつたから、自國海軍の行動については、殆ど顧みられなかつたのである。

當時の海相テイルピッツ提督は、ドイツ艦隊戰死者の碑に「ドイツ民族は海を諒解しなかつた」といふ意味深長な、しかも悲痛な一句を書き記したほどである。

そこで、今次大戰において擧げつゝある大なる戰果は、前大戰における苦い經驗に教へられた賜物であることはいふまでもないが、その陸軍と同樣に、海軍にも主力艦部隊を有してゐたのであつたなら、より大なる陸海兩方面の戰果を急速に收め得たであらうことは想像に難くない。

しかし、さすがにドイツ軍の戰績は甚大なるものである。この六月二十二日は獨ソ開戰の一周年に當るが、北はフインランドの凍土地帶から、豐穰なウクライナの穀倉を經て、南は黒海、コーカサス方面にまで及び、その蜿蜒三千キロに亘つて、今獨ソ兩軍は凄絶極まる死鬪を續けてゐる。一方、北阿にありてもすばらしい戰果をあげてゐるといふ、その戰域は實に廣大なものである。これは主に陸軍力(航空力のことは省いて)によるものといへる。

また最近のドイツ側の發表によれば、昭和十七年一月二十四日より七月二十四日に至る六ケ月間

に、ドイツ軍は聯合國船舶六百十六隻を擊沈し、その總トン數は三百八十四萬三千トンに上り、廿四時間每に平均三隻を擊沈してゐることになる。これら擊沈船舶のうち貨物輸送船四百五十三隻、二百五十一萬七千トンであり、油槽船百六十三隻、百三十二萬五千五百トンに上つてゐる。

これはいふまでもなく海軍力によるものであるが、もし主力艦部隊であつたなら、これ以上に迅速に且つ大なる戰果を收め得たであらうといふは慾目か、それにしても潛水艦の威力の絕大さには全く驚異すべきものがある。

科學的と精神的の勝利　ドイツの戰法によれば、ポーランドは一週間、デンマークは一日、ノルウエーは二週間、オランダは一週間、ギリシヤは二週間、クレタ島の敵前上陸攻略は二週間といふやうに、スピード化されてしまつたのである。つまり、小國の滅亡は最大期間が二週間といふ標準が作られたわけである。

このドイツが勝利する基因を分析すれば、一は科學的の勝利であり、他は精神的の勝利である。この科學的の勝利については、英佛側でも認めてゐる。當時フランスのレイノー首相は「敵は新式の武器を持つてゐる。われらは古典的である。この懸隔は、根本的の相違がある」と述懷した通りである。

それ以外に、いやそれ以上にドイツの勝利を請合せたのは、ドイツ將兵の滿々たる闘志を計算に入れなければならない。そして闘志そのものを最大有効ならしめるものは、必ず勝つといふ自覺的信念である。もつとも英、佛、ソ聯にしろ、決して闘志がないわけではなからうが、ヒツトラー總統の必勝的闘志が、ドッツ將兵のすべてに充たされてゐる特長がある。この闘志があつてこそ、はじめて新式兵器、新式戰術が百パーセントの効果を擧げ得られるのである。フランスは、この國民の闘志を恃まないで、たゞマジノ線だけを恃んだかために慘敗を滿喫したのである。

一口に、ドイツは何故强いかの理由として、誰しも「電擊戰」をあげるが、この電擊作戰といふのは、日本古來の戰法からいへば武田信玄が「靜かなること林の如し、疾きこと風の如し」といつた兵法の思想の表はれである。いはゆるドイツのこの作戰の要素は、第一に兵の精强、第二は機密の保持である。

その第一の、兵が精强である主因は、ドイツ軍の落下傘部隊が決死の敵地乘り込みや、戰車隊の猛進ぶりにおける、その頑强な闘志である。それには、精巧なる兵器の高度機械化の技術が力を俟つことはいふまでもない。

次にその第二の、機密の保持とは、統帥の簡明なることである。ヒツトラー總統の三羽烏といは

れる空相のゲーリング元帥、陸軍のブラウヒッツ大將、海軍のレーダー元帥があり、それにヒットラー總統の幕僚長としてカイテル大將があつて、大體これだけの極めて少ない人々で一切をやつてのけるといふ、大きな强味がある。ところが聯合軍では寄合世帶であるから作戰がしつくりいかう道理がない。それに政略などのため掣肘を受けることがあつたりして弱められることが多い。

三、ドイツの物資計畫

物資の擴充　ドイツは前世界大戰における如く、食糧難に苦しむことはない。オランダ、ベルギー、ルクサンブルグを支配下に置き、ドイツ全國民の食糧の八五パーセントは自給可能であり殘り一五パーセントはバルカン、近東より得れば足りる狀態である。その上に對ソ戰において、世界の穀物の倉庫といはれるほどのウクライナを完全占領すれば、その豐富さが確保されることになる。

また石油にしても、ルーマニヤより輸入するのと、石炭液化とで、毎年の石油所要量を充たすことが出來る。これも對ソ戰において、さきに述べた石油資源地を確保すれば、充分な補給が得られ

ることになる。
多數の飛行機と機械化部隊とを持つドイツの心配が石油にあることは勿論だが、ドイツは一九三五年頃人造石油を使つてゐたが、これは天然石油へ二割位混合するもので、人造石油だけでは發火が充分でなかつた。ところが一九三九年の發明によつて、非常によい人造石油（石炭液化）を廉價に造ることに成功したのである。
この例として、持たざる國のドイツが、二十有餘年の苦境から立ち上つて、歐洲新秩序建設のために戰爭をする電撃作戰の陰には、人造ゴムと人造石油の完成に大きな力がある。この人造石油事業に專念し、フヰツシヤー法、イー・チー法の如き、いづれもドイツ科學の發明であるが、それでもヒツトラー政權成立直前の人造石油年產額は僅かに三十萬トンに過ぎなかつた。それがヒツトラー政權の徹底せる科學政策の賜として、今日では年產額三百六十萬トンに達し、戰時石油消費量の約二分の一を賄ひ得られるやうになつたのである。
即ち油田においては、わが國の四十分の一にも足らぬ資源しか持たないのに拘らず、日本の一倍半の石油を產出してゐるといふのは、新發明の坑道掘りに負ふところがあるによる。坑道掘りといふのは、地下の液體原油を汲ひ上げるだけでは滿足せず、ポンプでは汲ひ上げられない油の浸みた

土砂を掘り上げて油をしぼる技術である。この技術は、メタン、エタン、ガソリン瓦斯などといふ極く危險な爆發ガスの作業であるが、ドイツの技術家はこれに成功して、坑道掘りの術語を世界に知らしめたのである。最少の天然資源を科學の力によつて最大の能率に活用すると同時に、人造石油の發明においても、ドイツはパイオニアである。觸媒の化學作用によつて炭粉に水素を添加し、石炭を變じて石油となす技術は、ドイツの名と共に全世界に知られてゐる。これは高壓高溫下の操作で、技術としては至難であつて、同じく危險な作業である。これがためにかつては實驗中に、一瞬にして六百名の犧牲者を出したことさへあつたといふ。

また、ドイツでは燃料不足のため、都市の汚物を全部一ケ所に集めてメタンガスを醱酵させて、これを自動車燃料として用ひ、その殘りは肥料として農村に送つてゐるのだが、この施設は各都市に設けられてある。しかも汚物を濾過した水は、一般に飮むことが出來るほどであるといふ。

また貴金屬や若干の非鐵金屬を除いて、ドイツの鑛物は豐富多量に產出される。現今の鐵鑛の不足は從來使用されなかつたり、或は不充分であつた鑛脈の利用によつて、完全に補はれてをり、また占領地の工作によつてもこの缺陷は補足される可能性が充分にある。

一九三八年の初め、ベルリンの公園の鐵物が取り拂はれ、その年の夏頃から一般の人家の鐵柵が

取りはづされ始め、一九四〇年に入つてからヒツトラー總統の新宰相官邸の鐵扉が取りはづされて木扉となつたこと、また二マルク、五マルクのバラ錢の回收によつても、如何にドイツが鐵について用意したかが判る。

戰前スエーデンの輸出する鐵鑛の三分の二はドイツに入つたものだが、ノルウエー占領により英國へ行くスエーデス鐵鑛を食ひとめ、ルクセンブルクの占領によりその地の鐵を確保することによつて安全に近づいてをるのである。

かうした點から見ても、ドイツは戰爭をすると同時に建設を行つて、資源獲得に奔命してゐることが知られる。もつとも、主要資源や武器については、優秀なる科學の力をもつて充分にその足らざるを補ふて餘りあるであらうが、そこに一糸亂れざる政策を行つて、あくまでも勝ち拔かうとする熱烈さが、ドイツ精神の基礎を强固にする所以である。

ドイツでは物資統制が、いかに圓滑に行はれてゐるかの實例をいくつも擧げることが出來る。その一つとして、一九三九年八月二十八日、フリツク內相の放送によつて、突然に生活必需品の切符統制を宣言し、翌二十九日から配給された切符には一九三七年印刷と記してあつたといふ。一九三七年といへば、ヒツトラー總統が外交手段によつて、オーストリヤを併合した年である。さうする

と當時英佛がこれに對し邪魔をすれば戰爭に入る覺悟で、切符を印刷して區役所まで配給しておいたに違ひない。それを今回初めて使用することになつたわけだが、ナチス政府は何事についても用意周到であるかを知る證左といへよう。

フランスへの經濟工作　ペタン元帥がフランス政府の首班となり、ドイツ及びイタリヤに對して休戰提議を申入れ、一九四〇年（昭和十五年）六月二十二日、ドイツにとつては忘れることの出來ないコムピエーニュの森において、獨佛休戰協定が成立した。これによつてドイツは一九三八年の屈辱を雪ぐことが出來たのである。

かういつたからとて、ドイツはフランスを敵視して苛酷な報復的方法をとるやうな、そんなケチな量見は少しもない。あくまで友邦としての親睦さをもつて、手を握り合つて進まうとするのである。

一國が他國の軍隊に占領された場合、被征服國の經濟はいろいろな異なつた方法で取扱はれるものである。その第一の方法は、歴史上でしばしば見られるところの、征服者が被征服者の國内に現存するものを悉く破壞してしまつて、その國民がどんなに困らうと關係がないといふ、いはば冷酷な態度をとる場合である。

第二の場合は、敵國の經濟を全部自國の手に收めてしまつて、自國のために徹底的に搾取に出ようとするやり方である。これも歴史上しばしば見られることで、特にイギリスの侵略的發展はこの方法によるものである。

第三の場合は、被征服國の經濟を最初から少しも傷つけないといふ建前で、極力破壞を避けるやうにするやり方である。軍事上やむを得ない所は別として、その他の所には戰鬪行動が及ばないやうにするのである。ドイツがポーランド、フランスなどに對して行つてゐるのがこれで、いはゞ極く寛大過ぎるやり方である。

そこで、フランスの經濟を如何に利用して自國の陣營を强化すべきであるかが問題であるが、ドイツによつて善用された結果、數十萬のフランス人勞働者や會社工場の事務員らが、自づとパンにありつけることになり、そして生活の安定が保たれるやうになつたのである。

大體、一九四〇年におけるフランスの崩壞は、單なる軍事的な敗北のみで起つたものではなく、その經濟が既に崩壞してゐたのであつて、數十年來赤字つゞきといふ劣弱なものであつた。その遠因は世界大戰で、ドイツからアルサス、ローレンを奪取したために、不均衡なほど重工業に力を入れ、經濟の基礎を無計畫に陷らしめることになつた。即ち、フランスは農業を閑却すべきではな

く、これこそ全フランス經濟の健全な基礎となるべきものであつて、農業に力を入れてこそ全國民の食糧を確保することが出來た筈である。ところが、實際はフランスの經濟政策が農業を無視したやり方であつたのだ。

かくの如く食糧確保の基礎を外國に置いてゐたといふことが、今次戰爭の結果に重大な影響を與へたことを知る必要がある。

また工業部門の方面を檢討すれば、そこにいくつもの均衡の破壞による惡結果が見られる。卽ち輸出を目的とした精巧品を製作するところのフランス傳統の產業部門が、重工業に押されて少しも振はなくなつてしまつた。しかも自國內では重工業に必要な資材は、鑛石を除いて他に何もないといふ有樣である。その石炭をはじめ、すべての重要な非鐵金屬や大部分の纖維工業用原料その他は、悉く外國依存によりて輸入しなければならなかつた。

しかもフランスは、巨大な植民地を持つてゐるのであるから、これを充分に利用さへすれば、原料に困るといふことはなかつた筈だが、そこに意を用ひなかつた。

だから、フランス人から見れば、ドイツが食糧及び原料の自給自足に苦心してゐるのを嘲笑してゐたものであつた。そしてフランス人自身はイギリスの海上支配の保護に安心しきつてゐたのであ

つた。

また、その工業方面においても、第一に工場の技術上の施設なるものが非常に劣悪なものであつた。工場主はフランス人通有の安全確實をモットーとして、新らしい様式のものを採用するより か、昔の確實な方法でやつた方が安全だといふ頭でやつて來た。

それ故に、フランスの工業者に注文を發すれば、原料はドイツ側から提供しても、工場主はドイツの工場でなら直ぐにも引受けさうなものについて、まづ用心深く熟慮するといふやうなやり方である。例へばパリには注文取引所が設けられて、ドイツ側からフランスの工場に製作させようと思ふ品物の見本が陳列される。そこで工場主らは充分に見て、自工場の技術や機械で出來るか否かを見極めなければ、その仕事にかからうとはしない始末である。

だが、ともかくこのやうにして今日までに數億マークの注文がフランスの民間工場で製作され、それだけドイツ國内の工場は注文が減つたわけである。機械、精密機械、光學製品、電機具、鋼製品、鐵製品、鉱力製品、金屬製品、車輛、纖維、製紙など、專門の分野にそれぞれ勞働委員會を作つてドイツ人側がそれに參加して、勞働力を廣汎に且つ合理的に使用するやうに努力してゐる。

このやうに獨佛兩國の協力が各方面で行はれると、フランスではドイツが發見したいろいろの近代

技術が流入して、その遲れた工業技術は一段と進歩することにならう。

一例をあげれば、今までフランスでは野菜や肉類の保存に、低溫冷凍法といふものを知らなかつたが、この方法によつて一九四一年以後にとれる野菜が盛に應用されることになつたのでもその一半が判斷されるであらう。

また從來フランスでは、木綿、羊毛、黄麻、絹などは殆ど全部輸入に依存してゐながら、人造纖維の製造を輕蔑して少しも研究を進めようとはしなかつた。これに就いてドイツでは原料の材木の調査から、工場の改造、技術の改良に協力して、生産計畫が出來上るまでのドイツ側の技術家は並大抵の苦心ではなかつた。その結果、今ではドイツ技術により優秀なる人造纖維が續々と生産されるやうになつたのである。

かうしたやうにドイツ人の苦心によつて、フランスと協力して、その新經濟復興に努力を拂つてゐるが、なかなか急速には行はれるものでないにしても、それが完成は遠い將來のことではなからう。ペタン政府が新鑄貨に、昔のスローガン「自由、平等、博愛」の代りに刻みつけた合言葉「勞働、家庭、祖國」が、本當にフランス人によつて高唱されることが出來るのは、ドイツの熱心な協力による以外には到底望めないであらう。

かくしてドイツ軍指導の下で復興に急ぐフランス經濟は、近くは對英最後の攻擊に、ドイツ軍の重要な兵站基地たるのみならず、また世界新秩序建設の上にも大きな役割を果すことにならう。さればフランスの香水工場や婦人帽工場が軍需工場へと轉換されるとき、海峽を一つ越えたイギリスでは憂色深く垂れこめて、ドイツ軍の上陸作戰に怯えてゐることを思へば、そこに大なる相違のあることが知られるのである。

第三章　イタリヤの偉力

一、イタリヤの軍備

盟邦イタリヤは、これも盟邦ドイツにおけるナチス黨首たるヒツトラー總統と同様に、イタリヤにおけるムツソリーニ首相はフアツシヨ黨首であり、これまで度々ヒツトラー總統と會談を重ねて、共同作戰における緊密さを示してゐる。そしてソ聯においても北阿においても、ドイツ軍と力を協せて大なる戰果を擧げてゐることは世に周く知られてゐる。

參戰二周年の戰果　昭和十七年六月十日が今次世界大戰に、イタリヤが參戰した二周年の記念日に當り、またその日が海軍記念日にも當るので、伊海軍二ケ年の大戰果が發表されたのを、ここに掲げるとしよう。

（一）　海軍の活躍

（イ）水上艦艇の會戰二十三回

（ロ）昭和十六年三月二十六日に巡洋艦一、二萬トン給油船一、一萬二千トン汽船一を擊沈

（ハ）昭和十六年七月二十日に商船四擊沈

（ニ）昭和十六年十二月十九日に戰艦クヰーン・エリザベス、ヴアヤントを雷擊し戰鬪不能ならしむ。

（二）敵商船擊沈數（五月末日まで）

（イ）軍艦によるもの、大西洋で九十三隻、地中海で二十五隻、その他十一隻

（ロ）飛行機によるもの、地中海で六十三隻、その他

總計一九三隻、（一、三一三、七九〇トン）

（三）擊沈または破損せしめた敵艦船（五月末日まで）

合計、擊沈二三五、損傷四八、總トン數一、一九〇、六三八トン

（四）伊海軍將兵損害

戰死、行方不明、負傷、俘虜など總計二四、六六五

この海軍力のほかには、陸軍、空軍の綜合戰果はまだ發表されないから詳しいことは判らないが、イタリヤ國民の熱烈なる愛國心と士氣旺盛なる軍人精神をもつて、專ら歐洲の新秩序に奮鬪しつゝあるは同慶に堪へないものである。

しかもイタリヤは後に述べる如く地形の安全保障のためにも、あくまでドイツ軍と强力なる緊密

のもとに、聯合軍を向ふにまはしてエジプトに、ソ聯に交戰をつゞけてゐるのである。

對英の大海戰　イギリスは昭和十七年六月十一日夜半、闇に紛れてジブラルタル軍港を出港した十三隻の輸送船を、ネルソン級戰艦二隻、空母二隻、巡洋艦四隻、驅逐艦十隻で護衛し、堂々三重陣をもつて、シチリヤ海峽を强行突破の後、マルタ島もしくはトブルクに赴かうと企てたのであつた。しかるにイタリヤ偵察機が、これを發見したのは十三日未明、直ちに空軍は密かに、これを監視しつゝサルデイニヤ、シチリヤ兩島空軍基地より形成するイタリヤ空軍鐵壁陣の中に引入れる戰法をとり、十四日未明より兩島の基地から飛出した三百機の荒鷲の反復爆擊で、これを木端微塵に粉碎し、かくて十五日早朝、空軍の徹底的攻擊を行つた後、輕巡洋艦二隻、驅逐艦五隻からなるイタリヤ第七艦隊は、シチリヤ海峽上のパンテラリヤ島南方において、殘存英艦船に對し再び猛攻を開始したのであつた。

このやうにイギリス側は數的には優勢でありながら、イタリヤ軍の熾烈を極めた攻擊に耐へかね、擊沈されるもの、または人工霧にかくれて敗走するの餘儀なきに至つた。

この海戰において、伊巡洋艦エウジエニオ・デイ・サヴオイヤ（七、二八三トン）と他の一艦は英巡洋艦一隻に集中砲火を浴びせて擊沈させ、他の伊驅逐艦は敵巡洋艦、驅逐艦各一隻に魚雷を命

中させた。次いで英側は空中攻撃を開始したが、伊海軍はなほも猛攻を繼續し、他の英驅逐艦一隻に巨彈を浴びせてこれを撃沈した。

この結果、英護送船隊はチュニス岬を眼の前に見ながらあわてて隊列を崩し、ちりぢりに分れてジブラルタルに引返すといふ慘々な目にあつた。

かくしてイタリヤ空海軍は、今次大戰において最大の勝利を博したが、この海戰においてメコツツイ將軍の指導下に訓練されたデイスペラート（決死爆撃隊）の本領を發揮し、またわが荒鷲の體當り戰法を加味した猛烈な爆撃、雷撃を敢行したのである。

一方、アレキサンドリヤから出航した英護送船團は、北アフリカ及びエーゲ海から飛來した獨伊空軍の攻撃に見舞はれ、英驅逐艦一隻は撃沈され、他の六艦船は命中彈を受けた。この地中海海戰において英側は飛行機四十八機を喪失した。かくして、この伊英大海空戰は全く英國側の敗北に終つたのである。

このイギリスの大敗北は、マルタ島及び北アフリカ戰線の英側情勢に甚大な影響を與へたことは勿論、これによつて樞軸側殊にイタリヤ海空軍の地中海制覇も、今や完全なものになつたと見るべきである。しかも西インド洋が日本海軍の制壓下におかれてゐるとき、いかに樞軸側にとつて有利

に導くか測り知れないものがある。

この獨伊の綜合戰果を、ドイツ大本營の公表によれば、左の如くである。

撃沈　巡洋艦六、驅逐艦五、輸送船二十、哨戒艇二、その他三、計三十六

大破　戰艦一、空母一、巡洋艦五、驅逐艦八、輸送船二十二、油槽船一、爆撃により火災を起しその後の運命不明なるもの六、計四十四

撃墜機　九十一

ファッショ青少年隊

ナポレオンは「その國の青年を示せ、しからばその國の將來をトせん」といつたやうに、その國を脊負つて立つ青年の力、次代を擔ふ第二國民の熱が、新鮮であるか、强健であるかによつて、國勢の進展を計量することが出來る。この意味において、ドイツと共に新歐洲建設のために戰ふところの、イタリヤの組織的な青少年運動をさぐることにしよう。

ファッショ黨はイタリヤ唯一の政黨で、世界大戰後の混亂と無秩序に喘ぐ一九一九年三月二十三日、ミラノで創立されたものである。最初ボルシエヴイズムに對する鬪爭、愛國心の鼓吹をその使命としたが、一九二二年十月ローマ進軍による政權獲得後、黨首ムッソリーニ氏は內閣を組織して首相及び陸海空軍、內務の各相を兼攝することになつて强化し組織立てられた。

ムッソリーニ黨首は、首相としての初演說で、

「余の政府は、國民の良心に立脚し、老大なる基礎の上に立ち、しかして最も清新なる若き第二の世代により支持される」

と獅子吼したやうに、ファッショ・イタリヤの前途が靑少年の双肩にかかることを呼びかけたのである。

ここに新らしき國民のファッシズム敎育機關として、

一、フイリ・デッラ・ルパ——幼兒隊で、四歲乃至六歲の男子(「狼の子」といふ意味である)

二、パリッラ——ファッショ少年隊で、六歲乃至十四歲の男子

三、アヴァンガルディスティ——ファッショ前衞隊で、十四歲乃至十八歲の男子

四、ジョウアンニ・ファッシスティ——ファッショ靑年隊で、十八歲乃至二十一歲の男子

などの種類を設け、これら各隊はそれぞれ數隊に區分され、女子もこれと同樣に組織されてゐる。

最上級のファッスト靑年隊は特別軍事敎練が施され、軍務に召集される。滿二十一歲に達したとき「市民兵」たる資格を有する旨の證明を了して、ファシスト黨に入黨するのである。

それまでは、少年隊や前衛隊にあつて、航空、騎兵、歩兵、スキー、自動車、自動自轉車などの訓練を行ふ。

女子の方面では、女子ファシスト青年隊員は婦人の使命に副ふあらゆる養成が行はれ、その活動範圍によつてスポーツ隊、文化藝術娯樂隊、家庭經濟隊、職業指導隊、農村青年隊、青年女工隊、植民地婦人隊などに分れ、結婚と同時に女子ファシスト團に編入される。

一九三八年四月二十八日公布の命令により、ファッショ黨の首領の地位がイタリヤ憲法に編入され、同第四條にはファッショ黨員の義務として「信じ、從ひ、そして戰ふ」ことを命じてゐる。このモットーをいひかへれば、信義、服從、鬪爭の三つである。

ファッショ黨員　一九三九年十月現在のファッショ黨員並びに准黨員數は左の通りである。

成年男子黨員	二、六三三、五七四
大學ファッショ黨員	一〇五、八三三
青少年男女隊員	七、八九一、五四七
婦人黨員	七七四、一八一
地方主婦黨員	一、四八一、三二一

勞働婦人黨員　　　　　五〇一、四一五

計　　　　　一三、三八七、八七一

これによつて見れば、千三百三十八萬餘人がフアツシヨ黨に屬してゐるのである。

そして護國義勇軍といふのがある。これは一九一九年三月ミラノで組織された黑シャツ隊であつて、一九二三年二月の緊急勅令で合法化され、更に擴大し强化されたのである。陸海軍と結んで平時は國内治安維持に、戰時は國防に當る國家機關である。

總司令部はローマにあり、司令官はガリレピアテイ中將で、士官二萬五千、兵五十四萬に達してゐる。

フアシスト大評議會　さきにフアシスト大評議會といつたが、これはローマ進軍直後に生れ、現在イタリヤ全政治活動を統合する最高機關である。

その構成分子は左の如くである。

一、終身會員――ムツソリーニ氏のローマ進軍に參加して、フアツシヨ革命に功勞のあつた黨の元勳である。

二、職能會員――政府閣員及びフアツシヨ黨の高官で、在任中は會員たる資格を有するのであ

る。

三、特別會員——國及び黨に對し特に功勞のあつたものゝ中から政府が任命するものであつて、任期は三年となつてゐる。

ファシスト政權成立以來、昭和十七年は滿二十年に當るのだが、その間イタリヤ王國の示した伸展ぶりは實に驚異すべきものがある。

ムツソリーニ首相の活躍　そのムツソリーニ首相の活動振りは、全く精力絶倫そのものであつて、安東義良氏（伊日本大使館參事官）の話によれば、

「今自ら飛行機を驅つて兵隊の檢閲をするかと思へば、次には自動車を驅つて視察に赴くといふわけで、私はよく大使館の前をムツソリーニ首相がたつた一人で、メタン瓦斯の小さい自動車に乘つて、朝早くから出勤するのを目撃したり、夜遲く歸つて來るのを見ましたが、その度毎に如何にも元氣さうな樣子で、心強く感じたのであります。

ムツソリーニ首相には、大使と一緒に二度會ひましたが、その度に彼の强い性格を感ずることが出來、また同時に彼が人間的な要素を多分に持つてゐる、つまり人間的英雄だといふ印象を深く受けました。從つてムツソリーニ首相に對する、國民の指導者としての信頼は絶對であつて、戰爭と

共にますますその光を發揮してゐるやうに感ぜられた」

とある。

もう一つ、渡邊光氏（東日外國通信部員）のムツソリーニ首相との會見談を引用したい。

「昭和十五年五月二十四日、即ちイタリヤの參戰する二週間前、ローマのヴエネチア宮殿でムツソリーニ首相と會見したのである。

この日、ムツソリーニ首相は非常な上機嫌で、四千七百萬のイタリヤ人の運命を双肩に擔つてゐる人とは思はれない程の好々爺振りであつた。

ムツソリーニ首相自身の口から、直接に彼が如何に深く日本を研究し、且つ日本を尊敬してゐるかといふことを聞いた時、私は大きな感激を覺えざるを得なかつた。ムツソリーニ首相が爛々と射るやうな大きな目玉で、私をじつと見つめながら「日伊兩國は過去において常に友邦であつた如くまた將來においても變らぬ友情を續けるであらう。自分は一度友人として手を握つた以上、どこまでも友人である」と力強く語つた聲は、未だはつきりと耳底に殘つてゐる。

ムツソリーニ首相の話し振りは實に穩かである。祖國イタリヤが第一次歐洲大戰直後、將に赤化せんとしてゐた危局を、フアシスト革命によつて救つた烈々たる闘士などとは、どこにもうかがは

れない程もの和かであつた。彼はラテン系統の國民に共通な大げさなジエスユヤーも餘り用ひない（しかし演説の時には大きな身振りを盛にやるが）。靜かに語るムツソリー＝首相と向ひ合つてゐた私は、何故か彼の風貌からわが西郷南洲に一脈相通ずるものを見出した。實際ムツソリー＝首相から受ける印象は、日本の古武士といつた風格があり、東洋的なものを多分に含んでゐる。

東亞新秩序確立のために大東亞戰を完遂しつゝある我國と呼應協力して、歐洲の新秩序建設に向つてゐる盟邦獨伊の兩巨頭ヒツトラー總統とムツソリー＝首相との心情にも頗る東洋的な香りの高いのは、實に私の愉快とするところである。兩者の關係は全く利害關係を超越していはゆる「丈夫意氣に感ず」といつた相手の長所も短所も互ひに許し合ひ認め合ひ、その上で大きく手を携へて行かうといふ行き方である。この點だけから見ても、獨伊兩國の紐帶の强力さは、單なる物質的利害關係から成立つてゐる米英聯合國間の繋りとは到底比較にならないものがある。

會見を終り、案外、女の手のやうに柔かなムツソリー＝首相の手を固く握り返して退出しようとした時、ふと同首相の大きな事務テーブルの上を眺めると、ドイツ西部戰線の地圖の上に、當時崩れ行くフランス軍を破竹の勢ひでパリー近郊まで追ひまくつてゐたドイツ軍の進擊路が、赤鉛筆でくつきりと記されてあつた」

ドイツ對英佛開戰後九ケ月間、滿を持してゐたイタリヤは、遂に昭和十五年六月十日を期して蹶然參戰したのである。
その實況を、再び渡邊光氏の文から引くことにしよう。
「私は訪伊經濟使節の一員として一行と共に同日午後六時、南歐の初夏の夕陽を浴びながら、有名なサンマルコ廣場で、ラジオを通じてムツソリーニ首相の歴史的な參戰演說を聞くことが出來た。私は演說の始まる數分前、偶然群集の中に前駐日イタリヤ大使モチエニゴ伯の姿を四年振りに見出し、お互に久濶を敍しつゝ二人肩を竝べて、廣場を埋め盡した數萬の人波にもまれてゐた。ムツソリーニ首相の演說がイタリヤの參戰を告げるものであるか否かは、事前には絕對に祕せられてゐたが、モチエニゴ伯は私に向つて「イタリヤが立ち上る日は遂に來たのです。今日の演說はもう間違ひなく參戰演說ですよ」と確信を以て斷言し、また使節團に同行してゐたイタリヤ外務省の連中も、「エチオピア戰爭の宣戰布告演說も同じ午後六時だつたから、今日の演說も宣戰布告に相違ない」といつてゐた。
國民も亦、この演說でイタリヤが參戰するといふことは充分に期待してゐたかの如く、ムツソリーニ首相が演說の冐頭「イタリヤ政府は英佛兩國大使に對し、イタリヤは今夜午前零時を期して、

英佛兩國と戰爭狀態に入る旨通達を行つた」と叫ぶや、熱狂的の歡呼と拍手をこれに送るのであつた。

演說が終り、三々五々廣場を立ち去つて行く群集の顏色には、いよいよ參戰したといふ興奮はかくし切れないものがあつたが、待ち切れなかつたものが遂に來たといふ風で、男子はもとより、婦人までも顏に明るい微笑を浮べてゐたのは、たのもしい風景であつた」

といふのである。

イタリヤは自己解放のたために戰ふのであつて、自己解放とは地中海帝國の建設でなければならない。思つても見よ、イタリヤ人の先祖ローマ人がローマ帝國を建てゝから今日に至るまで二十六世紀、歐洲を統一して君臨したものはイタリヤ人とドイツ人ではないか。神聖ローマ帝國を築いたものはドイツ人シャーレマンであり、十八世紀に歐洲を統一したものはコルシカに生れたイタリヤ人ナポレオンである。今世紀に入つて統一に乘り出し中途で挫折したのはカイゼル・ウイルヘルム二世であつた。

そして今、六十ケ年大計畫の名のもとに地中海帝國を建設せんとするムツソリーニ首相は、ヒツトラー總統と共に稀世の天才である。この兩人が各國民の絕大なる信服の力をひきさげて、當面の

敵を屠らずにはおかないことはいふだけやぼである。

二、資源を生かす力

それでは日を遡つて、イタリヤは何故に、急いでドイツ側に參戰しようとしなかつたか。その間ムツソリーニ首相は英佛の反省を促して和平斡旋をつゞけたが、遂にその努力は水泡に歸して、筋書通り獨伊が共同戰線に立たざるを得なくなつたのである。

世界の注視の的であつたその參戰の逡巡には、いろいろの理由もあげられるであらうが、ムツソリーニ首相もいふ如く、イタリヤは地形的に地中海の囚人であつて、そこに輕擧を許さないからである。

三水道に扼されたイタリヤ　即ち天惠に豐かでないこの國は、多量の必需品を國外から仰がねばならないが、それは大部分イギリスに扼された二水道と、トルコに扼された一水道を經なければならぬ。この輸入は量的に見て年に二千六百萬トンに達するのであるが、そのうち、

一、ジブラルタル海峽を經なければならないもの――北部歐洲からの鐵、石炭の千二百萬トンと、

北米からの穀類、棉花、銅、亞鉛、石油などの三百萬トンと、南米からの穀類、コーヒー、砂糖、羊毛、冷肉などの二百萬トンがある。

二、スエズ運河を經なければならないもの――インド、濠洲、極東よりの穀類、脂肪、麻、棉花、羊毛、錫の百三十萬トンがある。

三、ダーダネルス海峽を經なければならないもの――黑海からの小麥、石油などの數百萬トンがある。

しかもイタリヤでは、外國につなぐ鐵道はフランスの分を除いては九線あるうち、たゞ一線だけが複線になつてゐるのである。

かうした點から、ムツソリーニ首相のいへる如く、イタリヤは半島ではなく島なのである。それ故に、これらの事情の下に參戰すれば、右の三水道が閉鎖されることを覺悟の上でなければならない。そこにムツソリーニ首相としては大英斷を要したものであるから、その前の一ケ月ほどといふものは、非常に愼重な手續を經て物的に參戰用意をなすと共に、イタリヤ國民をして精神的に開戰へと前進させたのである。

そして遂に劍を拔いてドイツを助けると共に、自らの運命を切り開いて行かねばならぬ時機が到

來した。イギリス、フランスはイタリヤのこの決意を見て驚いた。イギリスではかゝる場合に臨んでも、なほ且つ商賣で釣れるものと考へて貿易使節をイタリヤに送つたりした。フランスのレイノー首相は〝第三國の正當なる要求に應ぜんとす〟と放送し、またイタリヤ政府に參戰前の狀態を續けるであらうと申し送つたが、何れもそれらは遲かつた。もはや區々たる二國間の交涉などは許されない、ムッソリーニ首相は盟つた友と最後まで戰ひ拔き、同時に地中海の鐵鎖を斷つためにも戰はねばならぬといふ覺悟は充分に練れてゐた。

「持たざる國」といつては、世界で屈指のイタリヤではあるが、それは軍事資源の上でのことで一九二八年來の食糧政策により今日でははゞ自給自足の域に達したのであり、また全歐洲市場に對する果物野菜補給地としてフランスに代つて首位を占めるやうになつたのである。だから、ドイツの石炭、スエーデンの磁鐵鑛と交換する多量の輸出や、またイタリヤ軍の占領地域であるダルマチヤ、モンテネグロ、アルバニヤ、ギリシヤなど一千五百萬人近くの賄ひに對する尨大な輸出さへなければ、イタリヤは樂に自力で食つて行けるのである。

そこでイタリヤの戰時下の國民生活をさぐらうとするのであるが、前にも述べた如く、ドイツが英佛と戰端を開始してから九ケ月餘の間、イタリヤは非交戰國としてやがてかくべきことを覺悟し

て、充分に物資を貯藏してゐたのである。

食糧統制　しかし、初めは一般に物資が豐富であつたが、次第に强化されて窮屈になつたことは何處の戰時下の國民でも同樣である。まづ電氣、瓦斯、その他のものは價格統制を行つて物價の騰貴を防ぐ程度であつたが、その後パン、バター、オリーブ油、肉などに切符制度が採用され、更に進んでは衣類、皮革などが點數制度になり、消費面は相當嚴格になつたのである。

大體イタリヤでは肉食が少くて、ドイツやイギリスと比較すると平時から三分の一乃至四分の一の消費量で足りる。それで配給制となつてからは六割五分を減らして一週に四回買へることになつた。

食糧切符で風變りなのは、主食の穀物は一ケ月五百二十匁で、その主要食糧のミユストラ（スープに入れる材料）、パン粉、玉蜀黍、マカロニなど、何でも選んで混ぜて買へる便利があるので、これは國民に評判がよい。

バタ、ベーコン、獸油が七十八匁であつて、これは油といイタリヤ料理としては少量だが、生產高の世界第二を誇るオリーヴ油が十四匁追加されてゐる。

イタリヤ人の大好物のコーヒーは、戰地の將兵と病院以外には絕對に配給されないで、販賣禁止

といふ强硬手段をとつてゐる。だから國民は豌豆や燕麥などから作つた代用コーヒーで我慢してゐる。

また砂糖は節約の目的で、洋菓子、アイスクリームの製造は一週三日に限られてゐる。

勿論、品によつては筋肉勞働者、農民には別に特配を認めてゐる。

しかし、さすがに葡萄酒の國だけあつて、酒類が統制から除外されてゐる點は、わが國の左利きの連中にとつては垂涎三尺であらう。

一般にイタリヤ人は、美食を頹廢主義として愼んでゐるから、食事は極めて簡素で麵類と葡萄酒だけあればやつて行ける。牛肉が不足すれば兎、羊、鹿、雞で充分に間に合ひ、それに豐富な果物があり、なほこれまではアメリカへ輸出してゐたオレンヂ、林檎の一等品が大衆の食膳に安價で振向けられてゐるのでますます潤澤である。

石油と石炭の統制　石油資源に乏しいイタリヤにおけるガソリン統制は頗る嚴重である。特別許可を持たない自家用車は全部使用を禁止されたので、メタンガス自動車が急にその數が增加した。ローマ、ミラノなどの大都市のバスは殆ど木炭車と無軌道電車に變つてしまつた。

石炭はドイツから一ケ月約百萬トンづゝ鐵道輸送されてゐるから、冬の燃料には不自由はしな

いが、石炭を殆ど產出しないイタリヤでは、特に水力電氣が高度の發達を遂げてゐることは注目すべきであらう。

右のやうに、參戰當初に比較して現在では消費面が相當に嚴重になり、白いマカロニが混合物の加減で黑くならうと、パンの上等品の製造が禁止されようが、戰時體制として當然のこととして、イタリヤ國民は意氣軒昂なるフアッショ魂を發揮してゐる。

政府の方針　政府は長期戰に對處するため、あり剩る人的資源を動員して、閑地利用による農產物の增產奬勵を實施し、それと並行して嚴重な切符制で消費の制限を行つてゐるが、物資の不足が感じられるのは都會だけで、田舍では物が豐富である。

物價は戰前に比して平均三倍に騰貴してゐるが、その主なる原因はガソリン統制による輸送力の萎縮から、出廻りの停滯に基づくものである。これがため政府では、鐵道輸送の新編成を行つて國內物資輸送に客車を使用するほか、各驛停車の列車を增發したりして、これが滯貨を緩和したので、物價も漸次下向きはじめて健全な狀態に復歸する傾向を示して來たのである。

そこで、田舍に物が充分にあるといふ豐かな氣持と、ムッソリーニ首相に對する絕對的信賴と、戰勝確實の見透しと、傳統的な樂天的氣質とから市民生活は戰時下とはいへ、決して殺氣立つた氣

配がない。

これが證據として、春の日が長くなるにつれて燈火管制は午後九時からとなり、映畫も劇場も十一時半まで延長されたのであり、なほ夏には更に一時間延長されるから、市民は娯樂機關に滿喫するであらう。

官吏や會社員の俸給は、昨年三月に三割增しで停止されたが、勤勞階級は八割から十割の臨時手當が增加された。これは直ちにインフレへの一歩前進の原因になる危險があるが、政府は物價統制、商品統制、貯蓄の奬勵とで、インフレを抑へる方針を採つたため經濟界は平靜さを維持してゐる。

戰爭の原動力は勤勞大衆にありとするムツソリーニ首相の政策に對し、國民大多數の感謝となり、そして戰鬪力の强化をもたらしたのである。

それ故に政府では去る四月十五日、次の冬季戰の準備のために、全國各家庭から羊毛（蒲團、枕の芯など）を獻納させたが、五月一日までに約二千八百トン集まつたといふ。しかもその大部分は勤勞大衆層であつたことから見れば、戰時下の市民の生活、殊に大衆の生活に餘裕のあることが窺はれる。

流行の中心　おもしろいことには大戰開始後、歐洲流行の中心はパリからトリノに移つたため、今ではイタリヤの婦人が歐洲大陸での流行の尖端を走つてゐる狀態である。昨年十一月一日の服飾品點數制で大なる打擊を受けたのは毛織物と皮類で、絹や人絹織物の購入は點數が低いために不自由はしない。それ故に生產者はこれを狙つて、織方と銘柄において短時日の間に非常な進歩を見せた。ここにいひ添へたいことは、イタリヤが先年エチオピアとの戰爭で、國際聯盟からの經濟封鎖を受け、これを機會にステープル・フアイバーの一大生產國となつたのは、つまり困りぬいた揚句の收穫である。

綠の風がローマの七つの丘を周つて初夏の氣配が感じられると、美しい南歐の婦人達が斬新な柄の薄物を裝つて、道に面したカフエのテラスで甘い音樂を聽きながら、さゞめいてゐる風景を見れば、イタリヤ戰鬪力はまだまだ底知れぬものがあるといふ印象を受けるのである。

附記するに、その生れながらに南歐人特有の熱し易く感じ易い血潮を多分に持つてゐるイタリヤ人は、美しい紺碧の地中海に圍まれてゐるのと溫和な氣候に惠まれてゐる關係から、古來より音樂、演劇、繪畫、彫刻、文學など、あらゆる藝術と文化に輝かしい多くの天才が輩出してゐる。殊にイタリヤ人は音樂を愛好し、その中でも聲樂を好むことは他國民の想像に絕するものがある。か

うした陽氣さが、どんなに苦しい戰爭に役立つか知れないのである。

第四章　蔣介石軍の實體

一、滅亡に瀕する重慶

二つの敗戰　大東亞戰爭勃發後における重慶軍は、相ついで二つの大きな黑星をとつた。それはビルマ敗戰と第三戰區の全面的敗北である。

ビルマ敗戰では、重慶が命の綱とたのんだ米英援蔣ルートが、あつけなく切斷されてしまつた。おまけに重慶が世界に誇示してゐたところの、とつておきの機械化二個師團が、ひとたび支那領土外に遠征するや、忽ち日本軍のために粉碎される憂目を見なければならなかつた。それといふのは近代的戰爭としては落第もので、いかに無能力であることが白日に曝されてしまつた。

次に、第三戰區といふのは、對日長期抗戰を保證した最上の支那式作戰であり、且つ米英をして長きに亙つて惹きつけた重慶軍の唯一の魅力たる支那遊擊戰法が、日本軍の前には何の威力も發揮し得ないといふことが、ここに實證されたものである。

されど今日の重慶軍は、大東亞戰爭に處する新發展の途もなく、いよいよ雪隱詰めの土壇場にありながら、未だに餘喘を保つてゐるのである。だが、つい昨年秋頃までは米英の軍事使節團や經濟

顧問連が、花やかに往來した重慶政界のことを思へば、全くひどい落ちぶれ方ではある。

わが事變五年間の大戰果　現在、わが支那派遣軍の占領地の面積は約百六十萬平方キロ（浙贛作戰地區を含まず）で支那本土の約半分、人口は約二億の廣大なる地邊に及び、しかもなほ皇軍將兵は月平均二千回以上、卽ち累計實に一萬二千回以上にのぼる交戰をつゞけたのである。

昭和十七年七月六日の大本營發表によれば、事變五周年に當る、支那事變勃發以降の五ケ年間における、支那方面の帝國陸海軍部隊の綜合戰果と、わが損害は左の如くである。

綜合戰果（十七年六月中旬まで）

(1) **敵の遺棄死體**　約二百三十二萬八千

(2) **擊沈破艦船**　巡洋艦七隻、驅逐艦一隻、砲艦十二隻、その他約百三十隻

(3) **擊墜破飛行機**　約二千八百機

(4) **主要なる鹵獲品**　各種大砲五千門、重輕機關銃二萬四千二百挺、小銃六十萬三千四百挺、自動車（戰車、裝甲車を含む）三千輛、鐵道車輛二千七百六十輛

(5) **拿捕船舶舟艇**　約千四百八十隻

(6) **處分せる機雷數**　約七千五百個

我方の損害

戰死（本年五月以降の戰死者を含まず）十一萬一千百十一名

喪失飛行機　二百四十機

支那南方綜合戰果　支那事變勃發以來五ケ年間の支那方面戰果と、大東亞戰爭以來の南方地域陸軍側戰果（五月末日まで）と海軍側戰果（五月二十日まで）を綜合すると、次の如き驚異すべき數字を示すのである。

擊沈擊碎艦船　約七百六十

拿捕船舶舟艇　約二千二百七十

擊墜破飛行機　約六千五十

主要なる鹵獲品

大砲　約八千六百門

重輕機　約三萬四千五百挺

小銃　約八十萬挺

鐵道車輛　約一萬四千五百輛

わが海軍は支那事變勃發以來、敗殘首都の重慶を初め、南京、南昌、漢口、徐州、九江、漢陽、紹興など敵空軍基地を粉砕し、なほその重慶を爆撃すること實に九十二回、成都を二十回、蘭州を十二回、昆明を二十八回、滇緬路を十八回といふ奥地基地を反復猛襲したのである。

そして各地の航空戰において、わが海鷲の撃墜破せるものは大本營發表の二千八百機のうち實に二千百五十四機の多數を算するといふ偉勲さである。この間、わが海鷲は長驅、青海省西寧の空襲を敢行して世界空戰史に最初の長距離爆撃行の記錄をとどめてゐる。

かくて、わが海鷲は全支那大陸の敵空軍基地と目されるものを悉く粉砕し去り、近代戰に缺くべからざる全支制空權を掌握し、引續き米英軍基地化により空軍再建に狂奔した重慶周邊の基地をはじめ、各地の再建空軍基地は一つも餘さず畫餅に歸せしめたのである。

蔣介石へのわが親心　「事變五周年を迎へて」と題する、大本營陸軍報道部長、谷萩那華雄大佐の講演の中に、左の如き親心を示した一節がある。

「日本は蔣介石軍閥を撃滅せんと欲せば、極めて容易に出來るのである。今日までこれを敢てなさざりしは、支那事變はとことんまで敵を撃滅せずんば已まぬといふものでなかつたからである。これは東亞の兄弟喧嘩であつて、他人の誘惑により邪道に引き入れられた可愛い弟に、愛の鞭を加

へ泪の折檻をしたのであつて、何時かは迷夢より醒めて兄の下に還るであらうと、それを待つてゐたのである。五年間も待つてゐたのである。いはゆる暴支膺懲である。從つて宣戰布告もないのである。日本の希望するところは、支那の滅亡ではなく、支那の興隆である。支那の征服にあらずして、支那との協力である。帝國の冀求するところは、東亞永遠の平和を確保すべき新秩序の建設であつて、支那事變征戰の目的もこゝにあつたのである。事變當初即ち昭和十二年十一月三日發表の帝國聲明は、わが不動の國策を說き盡して餘蘊なしである。

、日本は奥地へ進攻し得る戰力を有しながら、敢てこれをなさざる所以はこゝにあつたのである。しかもこの東亞の二國の抗爭に乘じて、漁夫の利を占めんとする英米あるを思ふ時、わが軍は必然的に來るべき英米戰爭に對する準備を絕對必要とし、これがため蔣軍に對し不必要の武力の行使を抑制し、戰力を蓄積したのである。

東條總理大臣閣下が過般の臨時議會で「重慶に對しては最後の膺懲の鐵槌を下さん」旨を宣言された。この鐵槌と申すのは、軍事的には兵を進めて彼等の最後の根據地を蹂躙することである。政治的には汪精衞氏の指導する國民政府を强化することである。經濟的には現在の封鎖を益々嚴密にし、且つ國民政府治下における經濟建設を活潑にすることである。思想的には日本の八紘爲宇の大

精神を顯揚し、支那の孫中山先生の大アジヤ主義乃至汪主席の和平反共建國の思想を徹底することとである。そして重慶をして反省させ、以て大アジヤに還らしめることである」

とある、眞に玩味すべき所論である。

民衆の兵役忌避　しかし一方、執拗な重慶政府では、重なる敗戰を挽回しようと焦つて、これまでの苛歛な兵役徵發のほかに、徵兵制實施に出たが、高級官吏や土豪の壯丁は、裏面の策動によつて兵役を忌避する者が多くて、一般民衆の多大の不滿を買つてゐる。この制度は甘肅、靑海、寧夏、西康などの如き邊境地區にも一齊に實施され、兵力補充に汲々たる重慶のあがきを現してゐるが、これらの地區の壯丁はこれに應ずるものが少くて、寺院に逃避剃髮して僧となるものが續出する有樣なので、さすがの重慶軍當局も狼狽してゐるといふ。

重慶政府ではこれまで日本側物資の流入を禁遏する法令を發布して、表面上これが實施を見てゐたが、最近になつては同法令を廢止して無差別に日本物資の入手に乘出すことになつたといふ。これは大東亞戰爭以來、重慶治下の物資が極度に不足して、その民衆生活が根本的に脅威を受けることとなつたがための窮餘の措置で、大戰が重慶に及ぼす重大な影響の一つの現れである。

援蔣路の喪失　重慶軍は反樞軸聯合軍の勢力を盛り返へさうとして、無謀にも大軍をビルマ戰

線に繰出したのは、ビルマ・ルートの喪失が重慶の抗戰前途に重大な影響を與へるからである。しかしわが精鋭なる皇軍の前にはビルマ・ルートは全く消滅したのみならず、逆に打倒蔣介石ルートと一變して、雲南、四川の防衛が愈々危機に直面することになつた。抗戰五年、彼等がひたすら續けて來た米英依存の夢も、文字通り殆ど孤立無援の狀況に陷り、今後の抗戰力は專ら重慶内部に依存しなければならなくなつたわけである。

そこで最近、重慶ではイラン經由のルート及び西北新ルートの開通を計畫すると共に、西北ルートの門戶より重慶を結ぶ公路の再建設を行つてゐるとか傳へられてゐる。このイラン、西北ルートの如きも、既に開通したと重慶で宣傳する西藏經由の中印公路（インド・ルート）と同じやうに、五千メートルの峻峰を違ひ、車も通れぬ難路であつて、殆ど實現不可能の夢物語に過ぎない。よしこれが實現したとしても、輸送効果は極めて微々たるものである。

だが、あくまで米英に依存する以上、ソ聯からでも航空輸送でなりと、或は千里を遠しとせず苦力に背負はせてなりと、蟻が餌を運ぶやうに戰爭資材を得て、われに應戰するであらう。

蔣政權の四つの惱み　けれども、蔣政權の内部崩壞に瀕せる苦窮を隱すことは出來ない。堀情報局第三部長も指摘されたが、その第一の惱みは、國共兩黨の絕えざる軋轢である。國民黨は共產

させようと努めてゐるのである。

第二の惱みは、財政權逼迫である。一九四一年度の赤字は八十億元といふ數字を示し、その大部分は紙幣增發によつて賄はれ、法幣發行額は一九四二年には實に百六十億元に達する有樣で、政府はその財政破綻を豫防するために、あらゆる苛酷な徵稅に出でて民衆の一滴の血さへも搾りとらうとしてゐる。

一方、今年二月、重慶は米英兩國から五億ドルと五千萬ポンドの借款を受けることになつたが、到底それでもつて財政改善を行ふことなど出來よう筈がない。

第三の惱みは、物價暴騰の問題である。その狀態は借地料、借家料、食品價格など三十三倍になり、衣類の如きは六十倍になり、勞働賃銀は十三倍であるのに反し、生活費は二十六倍といふのであるから、重慶產業部門の勞働者の平均實收は支那事變勃發當時の僅か半分に過ぎないのである。

第四の惱みは、重慶の武力、抗戰力が急激に衰退を來したことである。そして武器やその資材などを輸入する途が絕對に失はれた以上、ゲリラ戰術さへ間斷なき日本軍の攻擊により、戰力は急速に失はれつゝある始末である。從つて重慶側の諸都市の黨、政、軍の高級幹部の厭戰熱はますます

昂まり、過般浙江作戰を契機として行はれた西南各省におけるこの種の公務員の檢擧は、その數二百餘名に上つたといふ。その後に至りても反戰の秘密組織が發覺したり、將校がわれに投降したりして、その喰止めに苦心してゐる始末である。

なほ重慶における一般民衆の生地獄同様な生活ぶりは述べるまでもなく、いろいろな報道によつて周知の事實だから省くことにするが、かくまでに蔣介石が痩我慢をして萬に一つ得るところがあらうか。命の綱と賴む聯合軍の援助さへも、いつ絶ち切られるか知れない立場におかれてゐる。やがては外は日本軍のために潰滅し、内は崩壞の餘儀なきに至り、せめては首都を更に奥地へ移してなりと行くところまで行きたいのであらう。それまでなりと餘喘を保たうとするねばり强さ、その圖々しさには少々あきれざるを得ないものである。

二、蔣介石は何故あくまで抗戰するか

何故、蔣政權がわが軍門に降らうとしないで、あくまで抗戰するのであらうかを、歷史的に檢討してみる必要がある。

國民運動　最近十數年、殊に滿洲事變後の數年間において支那に國民運動が起つて來た。これは大衆に民族意識を作興し、國家觀念を鼓吹して、近代的統一國家を作らうとする運動である。運動の中心は蔣介石を繞る國民黨の政客並に少壯學者、學生、外人顧問などである。この運動が大成すれば、日本、ドイツ、イギリスなどと同じ近代國家になる筈であつた。

この國民運動なるものは、統一救國運動（政治的）新生活運動（社會的）經濟建設運動（經濟的）の三つに分けることが出來るが、このうちで抗日運動と關聯して、最も問題となるのは統一救國運動である。

卽ち統一救國運動とは、簡單にいへば支那における外國勢力を排し、半植民地狀態の支那を名實ともに、統一ある獨立國家にしようとする運動である。そして最初にその運動の槍玉に上つたのがイギリスであつた。

イギリスの財力　イギリスは不平等條約撤廢に關聯して、國民政府と爭ふべく二萬の兵を上海に集中したのだつたが、間もなく蔣介石もイギリスとの間に妥協が成立した。それは上海財界を支配するものは浙江財閥であり、その資本的背景は主としてイギリスであつたからである。蔣介石と宋美齡（浙江財閥の柱石たる宋家の女）との結婚が、その頃行はれたのも見逃せない事實である。

これが一九二七年十二月である。

イギリスは、その財力をもつて支那の排外氣勢を日本に轉じさせたともいへる。排日は抗日となり、侮日となり、南京事件、濟南事件となつた。遂には滿洲事變ともなつて、支那は國際聯盟の援助を求めたが得るところがなかつた。ここにおいて更に長期抗日の策を建て、今日に至らしめたのである。

ゼエクト將軍の進言　これには一つの挿話が傳へられてゐる。それは、蔣介石が國内を統一して近代國家を建てようとするのに、支那には國體觀念といふものがない。國體觀念がなければ國民を率ゐて行くことが出來ず、また國民を率ゐることが出來なければ國家が成立たない。ところが日本は世界に冠絕する國體で持ち、これによつて日本躍進の原動力とも指導力ともなつてゐることを、蔣介石はよく知つてゐた。しかし支那には古往今來、この國體觀念に當る思想がない。孫逸仙が三民主義を唱へたが、これは徒らに煩瑣で大衆の心をつかむだけの力がない。これに惱んでゐた蔣介石に向ひ、當時ドイツから軍事顧問として來てゐたフオン・ゼエクト將軍が、それは國體觀念に代へるに抗日觀念をもつてせよと進言した。蔣介石は成程と肯いて、この案を採用することにしたといふ。もつともこれが眞僞のほどは保證の限りでないが、ゼエクト將軍は南京の防備を築いた

人物である。當時の日獨關係は現在のやうな盟邦ではなく、第一次大戰後まだ日の淺かつた時代であるから、無理からぬことと思ふ。

抗日思想を吹込む　とにかく蔣介石は國體に代るべく抗日を採用し、學童の教育から兵士の訓練に至るまで、抗日思想で一貫させた。學校の教科書にはどの頁にも抗日が謳はれ、兵隊は一、二、三、四の步調の代りに打倒日本と訓練された。今日でも戰線で鹵獲された青龍刀の鍔には、抗日の二字を刻んだものが多數に見受けられるといふことである。

しかし、この蔣介石が腹の底から抗日觀念に傾倒してゐたとすれば、それは餘りにも淺慮過ぎたといはざるを得ない。何故なれば、日本が支那より弱ければ抗日を徹底することによつて、統一國家を建設し得るであらうが、日本は支那より强い以上、抗日を徹底することによつて支那自身が亡びなければならないことは自明の理である。それ故に米英に依存するのであらうし、また支那より弱い國に對して抗するのでは迫力がないからともいつていへないこともなからう。

蔣介石はその青年時代をわが士官學校に學び、また窮地に立つたときにも日本に亡命して來たのだから、彼は日本の强さを知らない筈はない。それを承知で抗日を行つたのを見れば、國內統一の方便として抗日を唱へたものであらう。だから、抗日が行き過ぎて方便の埒を越えさうになると、

抗日の手を緩めた實例が何度もある。しかしそれは最初のことであつて、そのうちに昭和十一年十二月の西安事件に至つて、遂に抗日熱を抑へることが出來なくなつてしまつた。

ソ聯と國民黨 ソ聯は國民黨における政治建設の師範役であつた。一九二三年秋、ミハエル・ボロディンはガレンス將軍（後のソ聯極東軍司令官ヴアッシリ・ブリユウヘル元帥）以下の軍事顧問を從へて着任した。國民黨の新憲法はボロディンによつて起草され、孫逸仙によつて裁可されたものである。國民黨の政治機構は全くソ聯に倣つて組立てられたのであるから、いひかへれば國民黨は共產主義の溫床に孵化したわけである。

しかし初めは國民黨が共產主義を排斥して、一九二七年七月ボロディン以下のソ聯顧問は、遂はれてモスクワへ歸つたほどである。ところがモスクワでコミンテルンの第七次大會が開かれて、支那を赤化するやう指令し、これによつて中國共產黨が、抗日思想をもつて赤化戰線に拍車をかけることになつた。

この時、昭和十一年十二月十二日、蔣介石は西安府にゐる張學良に共匪掃蕩の督促に出掛けたが、却つてその部下に監禁され、西安八個條を調印させられる結果になつた。

この蔣介石が監禁されてゐる間に、容共抗日は支那の國是となつてしまつた。それから半歲を經

た昭和十二年七月七日に蘆溝橋事件が勃發して、今日の狀態になつたのである。

即ちソ聯は戰爭の心的動力を送り、米英はその物的動力を供したのであるから、支那はソ聯並に米英の傀儡となつて、好むと好まざるとに拘らず、日本に立ち向はねばならぬ運命を擔ふたのである。

ここに至り、蔣介石は支那人の抗戰心理を利用して、さかんに抗日へと無知な民衆を驅り立てたのである。

されば、日本は支那と戰つてゐるのではなく、實は支那を舞臺として米、英、ソ聯と戰つてゐるのである

三、重慶軍が手を擧げない抗戰心理

自惚根性　こんなにまで日本に擊滅された重慶軍が、なほ抗戰を繼續するところの、その心理を解剖する必要がある。

これに就いて第一に擧げなければならぬことは、支那民族特有の一種の自大的性格と優越的自負

心とである。
即ち大東亞戰爭勃發以來、日本軍が百日足らずで米英東亞軍を壞滅したすばらしい戰果を見て、支那人が先づ感じたことは、日本が蓄積してゐた軍事力の偉大さや、また日本海軍の威力に驚異する前に、これほど強い日本軍に五年間に亙り抵抗し得たといふ自力に對する滿々たる自負心であつた。敗けても勝つたといふ厄介な自惚根性である。
こんな實例がある。わが在支部隊の或る參謀が、或る方面の主だつた相當見識のある支那人に、マレー作戰の話を聞かせた。そこで、米英軍と戰へば鹵獲品が山積するが、支那軍と戰つても何一つ殘してくれないではないか、と暗に支那軍の原始的裝備のことを揶揄したところが、當の支那人はそれが通じないばかりか、さすが支那軍は退却するときも武器はすてない、確に米英軍より強いですよ、と自信たつぷりな樣子に、參謀も苦笑するよりほかになかつたといふ話がある。
蔣介石が去る元旦、恒例の「全國軍民に告ぐるの書」の放送で、自主抗戰、自力更生のスローガンをさかんに呼びかけた。また去る三月四日、重慶で開催された各戰區司令、各省政府主席を網羅した軍政會議の席上でも、
「支那軍の責任と任務は愈々重大化した。われわれは支那及び支那の領土を防衛するのみなら

ず、アジヤ全體を防衛する任務を支那軍は引受けねばならない」と大見得を切つてゐる有樣である。

こんな調子で、巧みに支那人の心理をつかんで、米英蔣聯合軍の敗戰を糊塗しつゝ、人心を抗戰に引きずらうとかかるのである。

だから、大東亞戰後の重慶の新聞宣傳を見るに、米英の經濟力を最大限に誇示して、日本は長期戰で敗北するだらうといひながら、米英軍に關する戰況は必ずしもデマばかりではなく、ハワイ空襲、マレー沖海戰、マニラ陷落などの事實に對しては、或る程度の眞實をトツプ記事として、報道してゐるのは、一つには米英牽制の手段ではあらうが、いつもの重慶紙とは變つた宣傳方針であつたといふ。

大東亞戰爭以後、援蔣路は完全に遮斷されたため、軍事的にも經濟的にも孤立した重慶は、いや應なしに獨力で日本の壓力に對抗せねばならなくなつた。この新段階に處する自力抗戰の體制としては、これまで重慶が行つてきた奥地開發、抗戰地區政治、經濟全般の中央集權工作の强化に、その基礎を置くことはいふまでもない。

糧食の管理　この中でも糧食管理網の强化が重要視される。この目的のために中央財政の補强

と軍糧食の確保であるが、同時に土着資本の糧食投機を防止し、地方軍閥の財政基礎を弱化せしめるといふ方針である。これが例として、今回のわが第三戰區作戰地からの現地報告によれば、米産地で有名な浙江省内には三百餘の米の公倉が建てられて、田賦の實物納入が着々行はれてゐたといふ。かういふやうに糧食を豊富に所有する點においても、自力抗戰力の自大思想と自負心理が存する一つの理由として取り上げることが出來る。

輸送の苦勞　各省で生産される糧食または軍需、民需物資が各省相互に、或は抗戰力の中心地重慶及びその周邊地區の四川省へ運輸される場合には、嚴重なる軍政權の管理の下に行はれる。物資によつては輸送の際、兵隊で組織した物資移動班といふものに護られることもある。

鐵道のない所はトラックで、トラックのない所は手押車或は民船ジャンクで、これもなければいはゆる臂力、つまり土地の住民が僅かな勞銀で、袋に物を入れて一人づつで運ぶのである。例へば浙江省金華から重慶まで二千キロを遠しとせず、かうして運ぶのである。昨年十二月下旬から去る五月二十八日金華が陷落するまで、上海から金華へこの方法でかつぎ出した物資が約五千トンに達したといふのだから馬鹿にはならないものである。

ここに面白いのは、物資移動班の兵隊のなかには、悪性商人と結託して、自動車が顚覆したとか

日本の飛行機に襲はれたので物資が行方不明になつたとか稱して、物資の拔き取りをやつて甘い汁を吸ふものが往々にあると見える。これに對し軍事委員會では、物資を拔き取る軍人や官吏は死刑に處することになつたのである。

ゲリラ戰の執拗性　一口にゲリラ戰といふが、重慶軍が展開するゲリラ戰の方式は獨特なもので、これ一つでも抗戰の執拗性を見ることが出來る。

その第一線には四川、雲南、廣西などの雜軍を立て、中央正規軍は第二線にゐる。皇軍が進擊すれば、中央軍はいちはやく逃げて、狙擊や後方遮斷、橋梁破壞に出るのが彼等の常套手段である。殊に日本軍占領地區に隣接する戰區内の道路は、重慶ゲリラの特徵を見せてゐる。それは一メートル置きに道路の幅一杯に、戰車濠ぐらゐの大きさの堀を眞四角に深く堀つてある。それがその道路の續くかぎり、數里、數十里と續いてゐる。この勞働力の提供者は、附近部落の無數の農民であつて、しかも强制勞働である。その道路は破壞のために馬一匹が走れないほどの徹底ぶりで、ここを進擊する皇軍部隊は一列縱隊でないと通れない場合が多くて、部隊長も時々馬を降りねばならないといふ。だから、重慶との戰爭は道路との戰ひであるといふはこのことである。

そして重慶軍がいかに皇軍の機動力を恐れてゐるかは、この道路や橋梁の徹底した破壞ぶりで知

れるし、またここに支那大陸の持つ面積が、重慶にとつては最大の武器であることも分る。

裝備の低下　遊擊隊の武器としては、手榴彈、小銃、チエツコ機銃であるが、たまには迫擊砲も持つてゐる。しかし最近の裝備は甚だしく低下して、小銃の臺床が粗末なありあはせの木片で造られてあつたり、照準も出來ないやうなものがある。

武器の修理工場、彈藥の製造工場は各戰區の主要都邑にそれぞれ設置してあるが、皇軍が進攻すれば、工場はいつでも移動し得るやうになつてゐる。それに最近ではソ聯製の機銃彈の鑵詰も影をひそめ、得意のチエツコ機銃も大分古くなつて照準も狂つて來たのであり、迫擊砲の砲身も磨滅して來たのである。

重慶には現在約三百師、三百萬、共產軍二十五萬、遊擊隊數十萬を擁してゐるといはれてゐるが、兵の素質、幹部の指揮能力が低下してゐる。そして火砲、戰車、裝用車、自動車、飛行機、通信器材などの近代兵器は、わが軍によつて覆滅されたが再びこれを補給するにも援蔣路を失つたがために困難となり、米英に哀訴嘆願してゐるが、實現は非常にむづかしい。この武力の低下が政治情勢、經濟事情と相關聯して、今や分裂崩壞の前觸の樣相を示してゐるのである。

かくの如く重慶軍の戰力は次第に低下したが、それだからといつてゲリラ戰を停止するものでは

ない。

重慶軍の無知　重慶戰區內人口の九十パーセントを占めるといはれる農民を主とする下層階級の殆どが、大東亞戰爭の世界情勢の變化についても、或は重慶軍のビルマ敗戰についても知らないのである。嘘のやうな話だが本當なので、かうした無知な文字のない大衆だけに重慶側のデマに踊るのであり、また自大思想と偏執性に強いわけである。

かりに軍艦の威力を說明したとしても、恐らく彼等はジャンク以外に、舟といふものの觀念は持ち得ないのは當然だともいへる。昨年の長沙作戰で、湖南の奥地農村を實際に見て、その餘りにも平時と變らぬ悠暢な農民生活に驚いたといふことである。また日本軍に揚子江の漢口上流まで占領されても、ひとごとのやうで別に痛痒も感じないといふ始末である。農民にとつて不足を來してゐたものは蠟燭の蠟だけで、それ以外の日用品雜貨などは、彼等には緣のないものだつた。

重慶軍の下層兵士もこれと同じ無知であつて、その上に彼等には被壓迫民族特有の殘忍性と強い反抗心が異常なまでに旺盛である。これが重慶側の政治訓練で畸形的な偏執的な愛國心にまで轉化されてゐる始末である。これら兵士のなかには、いまなほ東京攻略を上官から聞かされてこれを信じこんでゐるものもある。

急に降參しない　かうした點から見ても、米英の軍隊がすぐホールドアップするのとは違つた、盲目的な暗さ、蛇のやうな執拗さが支那の戰線を覆うてゐるのである。

これらの事實を綜合すれば、重慶はまだ急には降參しないだらうといふのが一般の觀測である。これは一應本當であらうと思はれる。即ち重慶と援蔣國の米英との關係が斷絶したとしても、これで蔣介石軍の抗戰が直ちに停止すると考へるのは、ちと早計でしかあり得ない。だからといつて重慶が、その國土と民族とを全く掌握してゐる以上、それが不死身であるかのやうに前提することも錯覺である。

ではどうなるかと結論づけるに、米英の援蔣關係が薄弱になり、それから幾月か過ぎれば内部抗爭が當然生じて來て、民族の自惚が失はれて來れば、そこに和平論者と戰爭繼續者とが對立し、それを蔣介石がどう裁くかによつて、初めて崩壞の片鱗を示すことにならう。それでもなほ意見の容れられなかつた一派は、ゲリラ戰をあくまで續けてなりと面目を保たうとするであらう。

とにかく複雜にして尨大な支那のことであるから、一朝一夕のことでは片附かないことだけは確かである。

第五章　ソ聯の軍備と資源

一、ソ聯の軍備

ソ聯軍とドイツ軍との比較　一般にはソ聯の抗戰力はドイツに比べて、見劣りがすると思はれ、また軍備の點にありてもドイツの方が一日の長ありと見られてゐるやうである。それは一應尤もだともいへるが、しかし遡つて考へるに、赤軍の編成されたのは一九一八年二月であり、ドイツが公然と軍の編成に乘り出したのは、一九三五年の軍備再宣言以後のことである。だから、この年月においては赤軍の存在が遙かに長いわけである。

ソ聯は一九三四年、徴兵年齡の引下げに手をつけ、一九三九年八月歐州大戰勃發の直前に國民皆兵法を制定し、兵役義務を五十歲までに延長するなど、大衆軍の編成に着眼したのである。そして一九三四年の總兵力は八十五萬であつたのが、最近五十年間に二倍以上に增加したことを、ウオロシーロフ元帥が演說で聲明したのだから、一九三九年當時には既に百八十萬以上の常備軍を擁してゐたことになる。今次歐洲大戰の展開につれて、ソ聯も赤軍の膨脹につとめたので、獨ソ開戰の直前においては步兵部隊だけでも二百萬近くを準備してゐたものと推定される。

ソ聯が獨ソ戰において、どの位の兵力を動員したかは確かな數字を知ることは出來ないが、赤軍の死傷七百萬と前にドイツで發表したのを見ると、少くも一千萬近くも動員したのであらう。殊にソ聯の人口が一億八千萬を超えてゐることを考慮に入れるとき、これ位はさして難事ではない。この點ドイツの人口八千五百五十萬に比較すれば、ソ聯に有利なやうに思へる。

また赤軍の飛行機、戰車數については、一八三九年末の現在は裝甲旅團五十、戰車聯隊二十、戰車約八千といはれてゐたが、昨秋の戰爭で一萬臺以上の戰車が擱坐したと報ぜられてゐるのを見れば、戰車數も開戰直前には二萬近くに達してゐたのであらう。また飛行機も開戰前一萬機といはれてゐたから、これも二萬機位はあつただらうと思はれる。しかもソ聯は國防思想に努め、國防飛行化學協會の如き千八百萬の會員を持つ大きな團體があつて、高度國防國家の完成に後押しをしてゐたことは注目すべき事實である。

獨ソ軍の兵力數を比較すると、ほゞ匹敵してゐるやうであるが、その質においてはドイツ軍が遙かに勝つてゐると斷言することが出來る。それは、赤軍にありては大衆軍の組織を目指してゐるだけに、質が弱いといへる。また機甲部隊、飛行部隊などには精銳なる兵士を要するものだが、この點においても赤軍は遙かに獨軍に劣つてゐる。勿論、赤軍にも飛行機、戰車などの優秀なものが

相當にあるが、これは武器が優秀といふことに止まつて、これを使用する人間の質が劣ることも前に述べた理由によるものである。

これを結論づけるに、獨ソ兩軍の兵力、裝備などを比較すれば、ドイツ軍は赤軍より優勢であるといふことになる。

ドイツの立場　ところが、ドイツでは赤軍にのみ兵力を傾けてゐるわけにはゆかない。眼前のイギリスが虎視眈眈としてその虚勢を張つてゐる。しかもフランスを侵略してまで、ドイツに對し攻勢に出ようとするから、それば物の數でないまでも、ドイツはその方の防備にも陸軍の一部を割かねばならない。

また、遠くアメリカがソ聯援助に大童になつてゐるから、その軍需品を送らせないためにも、意を用ひねばならない立場にある。

ドイツではソ聯に對し短期戰に出るつもりであつたに相違なからうが、米英がソ聯に援助する以上、局面は轉回して長期戰にならざるを得ないことになつた。イギリスでは自國を有利に導くために獨ソ戰を永びかせて、卽ち消耗戰によつてドイツを困らせようとするのであらうが、前大戰とは違つてドイツは諸資源に不自由をしないだけの用意と計畫を實行してゐるから、この點ドイツの大

きな強味がある。

アメリカの對ソ援助がものをいつて、赤軍の勢ひが盛り返したことは事實だが、獨ソ戰長期化になる場合、この援助が果してソ聯の要求を滿足させることが出來るか、どうかが問題である。

ソ聯は米英をあやつる　中立にあつたアメリカならば、横車を押してでもソ聯に對し相當量の物資輸送が可能かも知れないが、今日ではアメリカが太平洋でわが日本のために大きな痛手を受けまた大西洋ではドイツ、イタリヤのために魚雷攻撃を受けるのでは、たとへ英ソ軍のイラン侵入で物資輸送路が有效に利用されることになつたとしても、その援助の積極化は到底望めるものではない。

しかし、アメリカがこれを中斷することになれば、米英が最も恐れてゐるところのソ聯とドイツとが單獨講和に出ないとも限らない。もつとも英米ソの三國協定で、この點に重心をおいてはゐるが、ソ聯のモロトフ外相の怪腕ぶりで、それはあだかも開戰前の獨ソ關係の如く、いつ背に肚はかへられぬために打つ手かも知れない。しかし、そこまでには多少の時間を要するであらうが、この觀點からいへばソ聯は、英米に對してキヤスチング・ヴオートをつかんでゐるやうな位置になる。英米がソ聯を牽引したことが、却つて牽引される立場に置き換へられるといふ、かなりデリケート

な關係にあるわけである。

ソ聯のねばり　だが、ソ聯は大國の矜持を保つ體面上、ドイツに對し降伏の立場から講和に出ることは至難であるのかも知れないから、ある點まで戰へるだけは戰ふであらう。

數字的に見て、ソ聯の抗戰力はドイツに劣ることは勿論だが、また質的に見ても、決してドイツに優るものではないが、ロシヤ人の民族性のねばりから、この抗戰力の弱さを補ふことは不可能ではない。それに、ロシヤ人は革命後の幾年かを耐えて來た經驗を持つてゐる。恐らくソ聯は、普通の判斷では割り切れぬ何かの力によつて、今後も相當の抗戰力を發揮するであらう。現に、そのねばりの强さを、昨秋のモスクワ、レニングラードにおけるドイツの攻略に對し、死守しをへた力を見ても、その一端がうかゞはれるのである。

このねばりの一例として、スターリン首相の超軍事第一主義の下に、一週間も飯が食へなくても我慢してゐるソ聯人民の精神力の强さを、建川前大使も認めてゐるほどである。

だが、こゝにねばりと矛盾するやうな一つの傳統的精神をあげなければならぬ。それは赤軍が精神的にドイツ軍に壓倒されてゐるといふことである。これは帝政ロシヤ以來、盲目的にスラヴ民族が、ドイツ崇拜熱に傾いてゐるといふ事實は見逃せないことである。

今年のソ聯軍の裝備　ソ聯軍の裝備については、全體から見てやはり昨年の夏の戰鬪で、ドイツ軍のために相當の痛手を蒙つた影響が、今年のソ聯軍に現れてゐることは否定出來ないものがある。しかし今度のハリコフ戰線に攻勢を開始したチモシエンコ軍の遺棄した兵器の量より推算すれば、ソ聯軍はうらぶれた敗殘兵の群とは決していへない。恐らくスターリンとしてはドイツ軍の機先を制せんとした重大な本年最初の攻勢であつただけに、今度のハリコフ戰線には、赤軍の精鋭部隊の一部をそれに當て、そして再建赤軍の最も充實した機械化部隊を差向けたことが知られる。

それが證據としてドイツ軍發表の最終戰果によつても、ハリコフ戰線だけで戰車千二百四十九臺、大砲二千二十六門、飛行機五百三十八機をチモシエンコ軍は喪つてゐる狀態である。

そのドイツ軍によつて鹵獲された中には、TWOと稱する型の三十六トンの重戰車があるが、それには「一九四二年一月」といふ日附製造が英語で記されてゐる點から見て、本年になつて製造された最も新らしいイギリス武器が、早くも獨ソ戰線に登場してゐるのである。これらの戰車はムルマンスクより輸入され、ハリコフ戰線の後方ウオロシロフグラードで英人技師によつて組立てられ直ちに前線へ配置されたもので、ソ聯軍がハリコフ戰線に使用した戰車の二十パーセントは、このイギリス製の戰車であつたといふ。

これを逆に見れば、ソ聯軍では米英からの援助武器を待ちかねて、直ちに前線に送らねばならないほど、ソ聯自體の軍需工業力が減退したことを示してゐるともいへるのである。

ソ聯自體の生産による戰車の中で、主力として活動してゐるのはT三四型二十六トンといふ中型戰車で、七・七六センチ砲一門と機關銃二挺を備へてゐる。この戰車もアメリカのパテントによつてソ聯で作られたもので、それに改良を加へて非常に手強いものとなつたのである。これが動機となつてドイツ軍では對戰車砲に工夫が加へられて、新武器を生んだといふことである。

またソ聯の兵站用のトラックや大砲の牽引車、その他、アメリカのパテントであるソ聯製のフォードのエンジン、フォードの車輛が夥しく使用されてゐるのである。

空軍の弱劣　ソ聯の空軍についていへば、ハリコフ戰線でもケルチ戰線でも、攻撃開始第一日、第二日の初めだけ、ソ聯軍は多數の爆撃機と戰鬪機を戰場に飛ばしたが、その量が遙かに優れてゐるドイツ空軍のために、或は高射砲のために忽ち撃破されたので、第三日目頃からソ聯空軍の攻撃は目立つて減少した。だから、ハリコフ包圍殲滅戰の終る頃には、ドイツ軍の大部隊が列をして行進しつゝある絶好の目標に對しても、ソ聯空軍は何ら手が出せないといふ狀態であつた。

米英飛行機の對ソ援助の實際について、マーチン重爆撃機が一機ドイツ軍に鹵獲された位で、戰

車ほどには援助の効果が擧つてゐないと思はれる。そして注目されることはソ聯の飛行機工業が、輕金屬材料の不足に惱んでゐることが判るのである。といふのは、地上でドイツ軍に鹵獲されたソ聯用機を見るに、その胴體はすべてベニヤ板の如き木で貼り、その上を麻の布で蔽つて草色のペンキを塗り、赤い星を描いてゐる。

だから、ドイツ兵の話では、最近のソ聯機、殊に「ラタ」の如き戰鬪機は高射砲彈が命中すると忽ち火に包まれ、百メートルも落ちないうちに空中で丸燒けになつてしまひ、地上に落ちた時には完全に灰になつてゐるといふ。事實、エンジンだけのソ聯機の殘骸が、戰跡の至るところに轉がつてゐるのである。

ソ聯兵の雜多な服裝　次にソ聯兵の服裝は、昨年とは餘り違つてゐないが、しかし軍服といふにはまちまちで、例へばその捕虜を見るに、ゲートルを卷いてゐるものもあれば、立派な皮の長靴をはいてゐるものもあり、毛皮の帽子を冠つてゐるものもあれば、歐洲式に普通の軍帽を冠つてゐるものもあり、また支那兵のやうに綿入れの上衣とズボンを着てゐる（これは蒙古系、タタール系のアジヤ民族）といふ有樣である。これは各種の兵科で混成されてゐるためでもあらうが、しかしソ聯の民族は主なものだけで六十餘に上り、細別すれば二百種以上にも達するといふ、この各種民族から

編成された混合軍隊なのである。

このやうに世界最多數の異民族を包含する國家としてのソ聯民族は、却つて戰爭における統一は成功であるといはれてゐるが、しかし一つの祖先を持ち、一つの血を繼いだ强力な民族よりか、いろいろの點で弱いと見なければならない。

しかしソ聯兵の頑强な抵抗は、赤軍が持つ獨特のコミツサール制度、即ち督戰隊制度によるものであらうといはれるが、必ずしもこれのみに限つたものではない。結局は、このソ聯兵の抵抗こそスラヴ民族としてのロシヤ人の國民性、いひかへればスラヴ人の血の中に流れる北歐的な要素と、更にアジヤ系諸民族のアジヤ的性格から生れたものであるといへよう。

ソ聯軍首腦部でも、この異民族の混合軍の編成についてはは相當苦心するところがあつて、今年の戰線では大別して、次のやうな方法をとつてゐる。

即ち戰車部隊と空軍は純粹のロシヤ人の赤軍直系の精鋭をもつて編成し、歩兵部隊、兵站部隊などにはジョルジヤ人、アルメニア人などのコーカサス出身兵、或は中央アジヤ出身兵、更に蒙古人などを當てゝゐる。別に長刀をさげたコサツク騎兵師團がコサツク人によつて編成されてゐる。ただし、このコサツク騎兵は今年の戰線では失敗したやうである。

獨ソ開戰一周年の計算　昭和十七年六月二十二日が、早くも獨ソ開戰一周年を經たのであるが、こゝに大場彌平陸軍少將の所說を加へて獨ソ軍を批判することにしよう。

思へば昨年六月二十二日、二千キロの間に展開し近代的精鋭を盡したドイツの大軍が、一度攻勢の火蓋を切るや、電擊の威力は物凄く、さすがの强豪の赤軍も至るところで殲滅の厄に遭ひ、早ければ一、二ケ月、遲くも三ケ月位で參つてしまふか、或は內部崩壞の端をさへ開くのではないかと見られたのに、何ぞ圖らん、開戰劈頭一日數十キロの快速調を示したドイツ軍は、スモクワを指呼の間に望見するまでに殺到しながら、嚴寒のため決定的痛打を與へ得なかつたのである。

しかし獨ソ開戰前、ソ聯統帥の人達はドイツ軍の電擊戰を揶揄して、その戰略は一擧にして勝ちを求めようとするため、すべてを初めに賭けるものだ。つまり、戰爭の頂點を開戰の劈頭にあるとして、速戰卽決に向ひ全力を集中するものであると評した。

だから、ドイツ軍の電擊戰は、或は一時有利な戰略的地步を占めるかも知れないが、しかしこれだけでは戰爭そのものゝ終結を決するには足りないとした。

これに對し赤軍は、敵の電光的鋭鋒を漸次弱める一方、おのが戰爭能力を强める方法に出ようと、いふかをくつてゐたが、その豫想通りに行かないで、事實はドイツ軍をして消耗戰の困憊疲勞に導

くどころか、ドイツ軍を進入せしめること八百キロ、ソ聯が戰爭遂行上の心臓とたのむ生産主要地帶は、その大半を擧げて敵手に任せ、しかも今年五月開始されたドイツ軍の攻勢に、ケルチ半島乃至はハリコフ戰闘において慘憺たる大敗を喫してゐるではないか。

殊にソ聯が難攻不落とし、數ケ月の長きに亙り近代的要塞をそのまゝに頑強に抵抗して來たセバストポールも、ドイツ軍の總攻擊開始以來、僅か十餘日にしてその死命を制せられ、遂に陷落の憂目を見なければならなかつた。また諸方面でもソ聯は敗戰をつゞけてゐる狀態である。

この獨ソ戰一周年において、ドイツ側のその損失を發表したのによれば、東部戰線で名譽の戰死を遂げた將兵は二十七萬千六百十二名、行方不明は六萬五千七百三十名である。ただしこれら行方不明者の多くは、既に戰死したものであらうといはれる。

勿論、これ以上の損害を蒙つたであらうところのソ聯側の發表はないが、いづれにせよ龍虎相搏つ大陸の近代戰なれば、飛行機の消耗、空軍兵力の損害が甚大であらうことが推算される。

しかも最近、地中海におけるイタリヤ空戰の快勝、並にリビヤにおける獨伊兩軍の戰果を考へるとき、また太平洋及び大西洋で制海權を失つた以上、一體、米英はどんなことをする餘裕があるだらう。それ故に、米英が勝利のため唯一のたのみとするソ聯は敗北するのみである。こゝに米英陣

營の影薄きに反し、樞軸陣營の勝算歴然たるを見ることが出來るのである。

われわれはドイツの敵たる米英を、共同の敵として戰ひつゝあるが、しかし日ソ間には中立條約の規定が嚴存してゐる。わが政府は北方の安定を確保するために、萬全の策を講じてはゐるが、ソ聯を脅威するが如き行動は些かもないのである。

われわれは今、複雜な環境に立つてゐるのであるから、更に愼重な態度と細心な注意とをもつて、その推移を見守ることとしよう。

二、コサック兵と雪將軍

ソ聯兵の强味は、寒さに馴れてゐることと、コサック騎兵のあることだ。まるで飛行機のやうな速さで驅けるコサック騎兵は、地上に伏してゐる人間を馬のスピードを少しも緩めないで拾ひ上げて行く程の技能がある。日露戰爭のとき、わが軍がこのコサック騎兵のために隨分惱まされたものである。これが冬の到來を待つて活躍しはじめるのだから手にをへない。コサック騎兵は生れ落ちるから零下何度に鍛へられてゐるため、寒さには平氣である。

パルチザン戦法　このコサック騎兵を主に用ひて戦闘に役立てるのが、いはゆるパルチザン戦法である。

スターリンは昨年七月三日のラジオ放送で、パルチザン戦法のことについて言及した。

「敵占領地方では歩騎兵によるパルチザン部隊を組織し、そして敵軍と戦闘のために牽制部隊が組織されねばならない。到るところでパルチザン戦を醸成し、橋梁、道路、電信、電話線を破壊し、森林、倉庫、運輸機關を燒却せねばならない……」

これは赤軍が得意とするパルチザン戦法の要領を述べたものである。

このパルチザン戦法といふのは、往昔フランスで蜂起した暴動團の首領パルチザンの名に因んだもので、實際にこれを戦術にとり入れたのは、ロシヤ革命當時の過激派であつた。この戦法は人類愛も文明も全く無視した捨身の戦法で、かつてわがシベリヤ出兵當時、ニコライエフスク（尼港）を占領したパルチザンの首領トリヤビーツインが、皇軍の攻撃迫ると知るや、わが同胞六百を鏖殺し、同市を文字通りの灰燼に歸せしめて逃亡した尼港事件こそ、その殘虐性を物語つてゐる。

このパルチザン戦はゲリラ戦と同意語で、できる限り多く敵に物質的損害を與へ、後法の輸送を斷絶するために交通路を破壊したりして、敵の本隊との連絡を絶たうとするもので、敵前線部隊の

背後または側面にまはつて活動する、獨立部隊の戰鬪行爲である。それ故に、その部隊は輕快なる歩兵、または騎兵の如きで組織されるのであり、そして敵の主力と眞正面からぶつかるのではなく、敵の虚を衝いて神出鬼沒の行動に出るのを任務とするわけである。それで、パルチザン戰は味方の勢力が弱くて、敵の主力と互格で戰ひ得ないときに、赤軍が專ら用ひる戰法であるから、したがつて焦土戰術が伴ふことになる。

だから、スターリンはさきのラジオ放送のとき、

「すべての貨車はこれを撤去し、一輛の機關車車輛はもとより、一ポンドの小麥、一ガロンの燃料といへども、これを敵軍の手に殘してはならない。コルホース（集團農場）からはすべての家畜、すべての穀物を安全な場所に運び、後方に通ずる輸送機關、重要な財產を始め、撤去することの不可能な非鐵金屬、穀物、燃料の如きものは遲滯なく、安全にこれを破棄する必要がある」

とまで、具體的に說明してゐる。

野獸の如き執拗性　この赤軍の野獸の如き執拗さには、さすがのドイツ軍も驚いたといふことである。この東部戰線のトーチカは、赤軍にとつては文字通りの墓場であつた。西部戰線では少し攻擊するとすぐ手を擧げたのに、このソ聯では破壞されても這ひ出して來る者さへない。子供の母

親がピストルを手に握つて、退却する赤軍のしんがりをつとめたといふ話もあれば、全滅した友軍の死骸の間に挾まれたまゝ死を裝ひ、終日うつ伏して夜になるのを待つて、ドイツ軍の後方連絡を脅かす赤軍勇士もあつたといふことである。

この赤軍の頑固さは、昨年のミンスク東方の戰爭で、コサック部隊の全滅を目撃した、從軍記者の手記でうかがはれる。

「われわれの後續部隊は、ミンスクを突破した急進部隊の後を、赤軍のゲリラ戰を用心しながら東へと進んだ。いよいよ夜が明けて危險なので、斥候を出すと、彼方の森の中に物の動きが感じられる。途端に斥候から、コサックの襲撃だとの報告だ。

わが部隊は、戰車の砲門を開いて待ち構へた。すると、忽ち森の中から砂塵をあげて、或は劍を振りあげ、或は小銃を撃ちながら、コサックの一隊が飛び出した。五百メートルまで引寄せて、われわれは一齊射撃だ。見るまに人も馬も、最後の一人も最後の一頭も倒れて、その遺骸は小山を築いたのであつた」

といふ凄慘な場面を現出したのであつた。

スターリンが、このパルチザン戰法に出ることをすゝめたのは、赤軍がいよいよ切羽詰つて最後

の捨鉢戰法に出たことを意味するわけである。卽ちロシヤ獨得の、開戰初期においては決戰を避け、敵を國內深く誘致して、パルチザン戰で敵を疲勞させ、兵力の均衡を待つて反擊に出ようとする手法である。

學生の戰時教育　現在、ソ聯の男女學生達は、祖國防衞のため戰線に、或は銃後に、必死の活動をつゞけてゐる。だが、ソ聯では各國に見られるやうな學生義勇軍結成といふやうな華々しいことはやらない。何故なら、その必要を認めないので、初等教育と中等教育とを合せた十年制の學校を卒業した健全な男子は、上級學校へ進まない限り、いづれも赤軍に入隊する。また徵兵檢査に不合格となり上の學校へ進んだ男子も、祖國存亡の際だから各都市、各町村に結成された國家的な民軍に加入したのである。民軍の規定は十七歲以上の男子なら誰でも志願することができる。

一方、女學生もモスクワ、レニングラードなどの大都市では、市民防衞團に加はり、防空班醫療班を組織して、避難市民の指導から防火、負傷者の應急手當など、男子に劣らぬ活躍ぶりである。以上は勿論、獨ソ戰線の後方地帶の風景であるが、しかし直接戰火にさらされてゐるレニングラード、モスクワの如きは、既に銃を持てる男女學生は一市民として民軍に參加し、この中心となつて最後まで戰ふ抗戰意識を煽つてゐる。

こゝに注目すべきことは、初等學校の全課目が全く戰時體制に生れ代つたことである。それは從來の全科目主義を縮小して、戰爭遂行に必要なる地形學、パルチザン訓練などを行つて、子供といへども戰爭の圏外者であつてはならないことを敎へてゐる。例へば、パルチザン訓練課目は、人の判別法、スパイ警戒、外國語習得などを內容とする。初等學校で外國語を必須課目とするのはソ聯敎育上の一轉期であるが、ドイツ語、英語をはじめ、外國語を子供達に敎へこんで、パルチザン戰の効果を狙ふといふわけである。

次にソ聯の雪將軍だが、これこそ資本いらずのトーチカ陣地に役立つもので、さすがのドイツ軍も昨秋は一時攻略を中止するのやむを得ない破目になつたのである。

ナポレオンの失敗　ソ聯では今を去る約百三十年前の一八一二年におけるナポレオンの慘敗を、ドイツ軍が二の舞を演ずるであらうとて、雪將軍を當てにしてゐた。この絕世の英傑ナポレオン一世が、モスクワ進擊のため六十萬の大軍をもつて威風堂々とその年の五月に出發したが、途中天候は惡く、雨季が過ぎた七月の炎天と砂塵のために夥しき兵力を失ひ、殘つた十萬の兵を從へて九月十四日、二百五十里の行程を苦しみ通して目的の首都モスクワへと進入したが、そこには求むる何物もなかつた。毎日諸方に起る大火と、寒さと飢えとに惱まされた末、萬策盡きて滯留五週間

で、萬斛の恨を呑んで退却するの餘儀なきに至つた。
その退却にあたつて、慓悍なコサック兵と復讐に燃える土民のために虐殺されるなど、言語に絶する苦酸をなめて殆ど壊滅し、ナポレオン蓋世の壯圖も一朝の夢と化したのである。
これが敗因は、戰ひに破れたのではなくて、ナポレオンが無計畫に深入りしたために、兵站が續かなかつたのであるが、雪將軍に苦しめられたのも大きな一つの原因である。
それ故に、モロトフ・ソ聯外相は、
「ナポレオンのロシヤ侵略に際して、わが國民は祖國防衞のために應戰し、ナポレオンは遂に敗北、沒落の運命を辿つた。そして傲慢の餘り、わが國に對して新たな十字軍を宣したヒツトラー總統の落ち行く運命も、またこれと同じであらう」
と放送したのである。
ところで、ヒツトラー總統が昨年は夏季を選び、即決即戰をもつて臨んだが、ソ聯では冬を期待し、遂に永びいて中止するの餘儀なきに至つた。

雪のために戰鬪中止　このことは、本年四月廿六日のドイツ國會においてヒツトラー總統が演說の中に言及してゐる。

「前回、余が諸君に語つたときには歐洲には百四十年來といふ酷寒が迫つてゐた。その後數日ならずして例年よりも四週間早く氣溫は零下四十七度に下り、それ以上の作戰は全然中止されてしまつた。

一八一二年、ナポレオン軍がモスクワから敗退し、最後に粉碎されたときの溫度は、零下二十五度に過ぎなかつたが、今次戰鬪では零下五十二度にも下つた。

一軍人として余は戰爭の遂行には非常なる責任を感じてをり、困難に際し自ら前線に出で、われわれ總ての運命に關し、挺身して遂行せざるを得なかつたのである」

といふやうに、嚴寒大雪のために兵器も汽車もすべて役に立たなくなり、兵士が戰鬪不可能になつたがため、昨年十二月七日、ドイツ軍は一時中止のやむなきに至つたのである。

その冬季間における双方の損害は、ドイツ側の發表によれば、

ソ聯軍の損害

俘虜	十一萬
破壞または鹵獲戰車	二千七百
火砲	二千六百

飛行機　　　　　　　四千

ドイツ軍の損害

戰　死　　　　　　七萬五千

負　傷　　　　　　十三萬

とある。

この雪將軍のために、ソ聯はドイツ軍が占領した個所を奪還し、またこの間に軍需生產力の損失を回復したことはいふまでもない。それ故に、ヒツトラー總統は本年の冬季戰には最善を盡し、從つて戰ひは續けらるべきことを言明したのである。

ソ聯にとつては、雪こそ威大な武器であり、しかもソ聯のねばりと共に、好一對をなすものであらう。

そこで昨秋以來六ケ月の永きに亘り、雌伏したドイツ軍は、用兵の好時季到來と見るや、本年五月、戰鬪は最南方のケルチに向ひ火蓋を切つた。ソ聯の戰場は雪解けのため河が氾濫し、一面泥濘と化して去り、所によつては殘雪斑々の有樣であるから、ドイツ軍重要の攻勢兵器ともいふべき機械化軍隊の活動には支障が少くなかつた。

即ちドイツ軍は、昨夏以來の對ソ戰に今や全く創痍癒え、全軍氣も新たに、しかもその空軍、その機械化軍隊に至つては、赤軍に二倍すると傳へられる。これに就いてはヒツトラー總統自らが演説の中で、昨年夏に對ソ攻擊を始めた際、ソ聯軍の頑固な防禦力と驚くべき武器の量とは、ドイツ側の計算外であつたことを殘念ながら認めないわけにはいかないと、言明してゐる。

これに對する赤軍は、豐富なる人的資源と秘藏最後の資材と火砲を繰出し、殊にモスクワの攻防戰に勇名を轟かしたチモシエンコ元帥を南部方面の指揮官としたのである。

三、ソ聯の資源

資源の豐富　資源の點では、ソ聯はドイツよりか充分に惠まれた特長がある。けだし、資源に惠まれてゐるところの天產的には豐富であつても、その生產力が充分でないから、對獨長期戰を遂行するには、かなりの弱味を帶びてゐるわけである。

これは例の世界を震撼させた血の肅淸工作を敢行した際、一時經濟力が衰へたことも一つの原因である。そして第三次五ケ年計畫についた以後も槪して振はないから、生產力は英米獨佛の何れにも劣つてゐる。

しかし産業資源に富む國だから、國防計畫に必要な資源に一二の不足はあつても、全部國内で補給される强味がある。だがこの資源は、モスクワを中心とする中央ソ領には存在しないで、穀物はウクライナとドンに、石炭と金屬はドネツ河流域に、棉はトルキスタンに、石油はバクーに、砂糖はウクライナ、木材はシベリヤといふやうに、地方に分散してゐる。

それで、もしドイツがソ聯の周邊を占領し、その地に經濟的支配を確立すれば、ソ聯は重要資源を切斷されることになつて、抗戰力は著しく減ずることになる。

獨ソ戰は長期か短期か

この點からいつて、獨ソ開戰の最大要因は、ドイツがソ聯における穀物、石油などの資源獲得にあつたと見る向きもある。これによつて獨ソ戰の見透しが、短期戰と長期戰の二つの分れることになる。

即ちドイツ軍がウクライナ、コーカサス地方を押へ、そして北方レニングラードを屠れば、その中間のモスクワを突くだけになつて、ヒットラー總統の言の如く、獨ソ戰は短期間をもつて終ることにならう。

長期戰になる要因は、アメリカの對ソ援助である。これが相當量を繼續せられる限り、獨ソ戰は長期に亘ることになる可能性がある。

今年の戰況 昭和十七年五月、再び獨ソ戰は最南方のケルチ方面から開始された。卽ちクリミア半島においては、ドイツ軍は昨秋セバストポリを殘して、クリミア半島の大部を攻略したが、その後ソ聯軍はケルチ附近を奪回して、兩軍相對峙して冬を越したのである。しかし今回ドイツ軍は、ケルチ作戰終了するや、セバストポリ要塞に猛烈な砲撃爆撃を加へ、逐次攻略の歩武を進め、七月一日遂に攻略した。

一方、ソ聯軍は冬季間、ハリコフを奪回しようと非常な努力を拂つてゐたが、成功しなかつたため、今年五月十二日、再び大攻勢に出たので、ヒツトラー總統は南方正面軍司令官ボツク元帥に反撃を命じた。同元帥はクライスト將軍の指揮する裝甲機械化部隊をして南方より、ソ聯軍の背後を突いて逆包圍することを企圖し、五月十七日より約二週間で、その目的を達した。この會戰でドイツ軍は俘虜二十四萬、破壞または鹵獲戰車約一千二百五十の大戰果をあげた。

また一方、イルメン湖北方地區では、冬季作戰によりソ聯軍は、同方面で相當深くドイツ軍陣地に喰入つてゐたが、ドイツ軍は五月二十三日以來、これを包圍し、逐次その包圍圈を壓縮し、二十九日これを殲滅した。ソ聯軍の俘虜三萬二千、大砲六百五十、戰車百七十に達した。

更にフインランド方面においては、米英のソ聯援助が主に北方ムルマンスク港より鐵道によつて

行はれるので、この鐵道の近くにドイツ軍側の戰線があることは、ソ聯にとつては堪へ難い惱みなので、同方面に對しソ聯軍はしばしば反擊に出たが、却つて大なる損害を被つて失敗をつゞけたものである。

コーカサス地方の資源　この地方の戰況を資源的觀點からいへば、南部戰線において、ドン河に沿ひ東に南に猛進するドイツ軍は、ヴォルガ沿岸の要衝スターリングラードに迫り、一方コーカサスの關門ロストフ市は陷落した。かくてソ聯抗戰の源泉である資源地帶コーカサスは、最大危機に直面することになり、ドイツ軍がこの地帶を手に入れゝばソ聯の抗戰力は資源的に大打擊を受けることになる。從つてソ聯もこゝを先途と躍起の防戰に努めるであらう。

この地方は各種資源に惠まれたソ聯の寶庫であるが、特に石油と農作物は有名である。石油については後で述べるが、農作物としては、各種の種子をはじめ大麥、小麥、玉蜀黍、煙草類が生産される。この地方は帝政時代の昔から知られた穀產地帶で、ソ聯誕生後、集團化、機械化された大農業法が實施され、各方面へ約百三十萬キロトンも移出されてゐる重要な食糧供給源となつてゐる。

そのほか緬羊、畜牛、畜豚、馬、山羊の飼育が盛であつて、畜產飼料の豐富なことゝ交通未發達のため、特に馬匹が飼育されてゐる。

石油に次ぐコーカサスの地下資源は、これまた豐富である。まづ全ソ石炭埋藏量の四割三分を占めてゐる。このほか、マンガン、銅、亞鉛、クローム、硫黄、砒素の埋藏も相當にあるが、未だ大量開發の域には達してゐない。

この重要資源のうちで、軍需として缺くべからざる石油（原油）が、世界第二位（第一位はアメリカ）の年産二千九百五十三萬トン（昭和十四年度）に及ぶのである。その石油は、バクー、グローズヌイなどのコーカサス油田からであり、またウラル西斜面に發見された第二バクーよりは、現に年産四百萬トンの石油が產しつゝあるといふ。

獨ソ戰の前、一九三九年九月の獨ソ計畫經濟宣言によつて、第一年目にソ聯からドイツへ供給すべき物資は、石油百萬トン、棉花二十萬トン、鐵鋼二萬トン、穀物百五十萬トン、大豆五十萬トンなどであり、ドイツ側よりは工作機、その他の機械類を供給することになつてゐたが、實際のドイツへの供給量は、なんとかいつて協定量よりは遙かに少量であつた。殊にドイツが望んでゐた石油の如きは、輸送困難の名目でソ聯では送るのを餘程手加減したのである。何故かといへば、ドイツをみすみす强化させる結果になることを怖れたからである。

これらの資源については、既に周知のことであらうから詳しく述べないで、あまり世に知られて

ゐないソ聯のゴムに就いて少しく記してみたいと思ふ。

ゴム栽培　軍事物資として缺くことの出來ない重要なゴムが、ソ聯で生産されるかなどといへば、突拍子もない愚問に見えるであらう。何故なら、ゴムは南洋諸國の如き熱帶地方の太陽の下でのみ生成するものであると常識上考へられるからである。

ところが、中央アジヤ及びコーカサス地方に産する百三十種の植物について研究を重ねた結果、比較的ゴム含有量の多い植物九種を發見した。この中でタウサギツツ、コクサギツツ、クリムサギツツなどは、特にゴム含有量の多いことが明らかにされたのである。

そしてゴム樹といへば、一般に喬木のもので、その幹に傷をつけて（これを切付けといふ）ゴム液を採集するといふのが通念になつてゐるやうだが、このソ聯地方のゴムは半草本（小灌木）であつて、根からゴム液を採集するのである。

このタウサギツツは、カラタウ山（カザクスタン地方）の一千乃至一千八百メートルの高所に野生してゐる。この地方の溫度は最高攝氏四十度から最底零下三十度の範圍である。そのゴム含有量は一三――四〇パーセントである。またコクサギツツはチヤンシヤン山脈中の二千メートルの高所に繁殖するもので、ゴム含有量は一〇――二七パーセントである。これが繁殖力は旺盛であつて、

一九三六年にタウサギツツは千五百萬本、コクサギツツは六億本が栽培されてゐるといふ。

この植物のゴム乳は殆ど根の中に存在し、葉や莖の中にはわづか〇・五パーセントしか含有してゐない。根の大きさは大體二〇センチであるが、短いものには一〇——一五センチのものがあり、また長いものになると半メートルにも及ぶものがある。根を横に切斷すると、縱の方向に通つてゐる乳管を切るので、熱帶ゴム樹の切付けの場合と同じやうに、ゴム乳が流出するのである。

さて、このサギツツ草にゴムが充分に蓄積した頃を見計つて根を採集し、これよりゴムを分離するのであるが、これには二、三の方法がある。

機械的分離法——これは根を乾燥粉碎し、そして水簸すれば比重の大きいゴム含有部分だけを集めることが出來る。このゴムは通常のゴムと比較すれば多少劣つてゐるが、一般の使用に耐へられる。

抽出法——これは根を乾燥粉碎し、それからベンゾール、或はその他の芳香族溶劑を加へて抽出し、ゴムを充分に溶出する。この溶液にアセトン、アルコールなどを加へると、ゴム分は凝固分離する。このゴムを集めて溶劑を完全に除去するのである。

醱酵法——これは根を細斷し、溫水で處理した後、尿素、炭酸アムモニウム、或は酸性燐酸アム

モニウムなどを含む醱酵液中に加へ、溫度を調節しながら七日間くらゐ放置して纖維質を分解する。醱酵が完了するとゴム分は分解するから、これを集めて充分に洗滌した後、乾燥すると組成のゴムとなる。

浸出法——この方法が現在大規模に行はれてゐる。根の採集には機械的方法で行ひ、これをまた機械で充分に洗滌する。それを一二——二四時間ほど冷中に浸して後細斷するのであるが、一センチの長さに切斷すると二〇——四〇パーセントのゴム乳が流出する。ミクロトームでもつて極く薄く切ると尙多量のゴム乳を流出するが、その反面には纖維質、電解質その他の物質が溶出して、ゴム乳を不純にすることになる。細斷した根を水中で激しく攪拌すれば、ゴム乳が浸出する。

次に根を浸出液より分離し、遠心分離機で完全に水分を除去する。かうして得た水溶液は極く稀薄なゴム乳であるが、これを更に浸出液として繰返し用ひるときは、濃度の高いゴム乳を得られる。なほ、これに酸を加へて凝固させ、水より分離し洗滌、乾燥することによつて、いはゆる生ゴムが得られる。

サギツツ草の栽培は、現在ではソ聯に限られてをり、しかもこの植物の國外移出を堅く禁じてゐるやうである。かくて、この栽培面積は年々著しい增加を示し、ゴムの自給自足の確保に努めてゐ

る状態であるが、その產出高は詳かにしない。

四、ソ聯と英米の關係

英ソ條約の內容　獨伊軍の作戰進展により、刻々とヨーロッパ戰域を狹められてゐるイギリスと、大東亞戰爭においてわが果敢な作戰に敗潰をつゞけてゐるアメリカは、ドイツ軍の攻勢によつて次第に壓迫を受けてゐるソ聯と共に、今後の戰爭を遂行するため、對策の根本的建直しの必要に迫られて來た。

そこでモロトフ・ソ聯外相は、ロンドンとワシントンを訪問し、ソ聯と英米側との提携工作の强化につき協議を遂げ、こゝに英ソ條約と米ソ協定がそれぞれ成立した旨を、この六月十一日に至り三國當局から發表されたのである。

その英ソ新相互援助條約の主とする內容は、

一、英ソ兩國は戰爭繼續中は、あらゆる手段をもつて相互援助をなすことを再確認する。

一、兩締約國は、双方の諒解なしにはドイツ及びその歐洲における協力者とは、單獨平和交涉も休戰も行はない。

一、兩國は戰後ドイツ及びその他の國により平和を再び破壞されることを防遏する。

一、全世界の安定が確保されるまでは、兩國は軍事的、經濟的、政治的援助をなす。また戰後いづれかの一方が、ドイツその他の國と戰爭を行ふ場合は、他の一方は軍事並にその他の援助を行ふ。

一、本條約は二十年繼續し、且つ本條約の條文の目的が實現するまで條約は延長される。

なほイーデン英外相は、この新條約は何等秘密協定が附屬してゐない旨（卽ち日本には關聯しないといふやうな意味）と、一九四二年における歐洲での第二戰線構成が含まれてゐる旨を公表した。

米ソ協定の内容　一方、アメリカ當局も六月十一日、戰爭共同遂行に關する米ソ協力の諒解成立について、次の要旨の發表を行つた。

「今回の會談において、一九四二年中における歐洲第二戰線形成が、緊急の要務であるといふことに意見が一致し、ついでアメリカよりソ聯に對する飛行機、戰車、その他の軍需資材の輸送增加問題に關する諸措置も議せられた。更に、戰後の平和と安全とを保障することを目的とする米ソ兩國間協力に關する基本的問題も討議し、共に見解が一致したことは滿足である」

といひ、またアメリカ國務省は、上記の協定成立とは別個に、米ソ兩國間に經濟協定の締結された旨を發表した。

これによれば、今次の米ソ協定は、一九四二年中に歐洲第二戰線の設置を目的とした八ケ條から成る協定と、ソ聯に對するアメリカ側の物資援助を目的とする經濟協定との二つから成つてゐることが、明らかになつた。

この經濟協定は、次ぎの要旨を含んでゐる。

一、アメリカが武器貸與法に基づき、ソ聯に供與する食糧並びに物資に對する支拂期限については、兩國間において改めて協議する。

一、平和の確立及び戰後における經濟機構の確立に關する取極め。

一、生產、就業、物資交換などを含む戰後における諸問題に關する取極め。

一、兩國間の通商貿易に關する差別待遇の撤廢。

ソ・英・米の肚　昨年の六月、獨ソ開戰となるや、チヤーチル英首相は「ナチスと戰ふものなら惡魔とでも手を握る」と公言し、その七月十二日、獨ソ開戰直後モロトフ・ソ聯外相とクリップス（當時駐ソ英大使）間に英ソ軍事同盟が締結され、相互援助と單獨不講和を約した。

ところが歐洲戰爭は、獨英戰線よりも獨ソ戰線の方が第一戰線となつたので、イギリスはあくまでソ聯をしてドイツに當らせようとする老獪な戰法に出て、米英は九月末より三國會議を開催し、同十月下旬アメリカは對ソ十億ドルクレヂツトを供與するなど、名目だけの援ソをつゞけるに大童であつた。

かゝる英米側の態度にソ聯は不滿をいだき、スターリン・ソ聯首相は英米の對獨第二戰線結成を强調したので、これに答へるべくイギリスは、外相イーデンをモスクワに派し、ソ聯側と種々懇談したのであつたが、意見の一致を見ず、たゞ本年初頭のワシントンにおける反樞軸二十六ケ國宣言に、ソ聯を一枚加へただけのことであつた。

かくするうち大東亞戰爭の急進展に驚き、英米は手をかへ品をかへソ聯引込みを策し、漸く第二戰線成立を餌に條約、または協定に到達したものである。

しかしながら、かゝる條約にしろ協定にしろ、その實効果に至つては甚だ疑問とすべきもので、要するに宣傳効果を狙つたに過ぎないわけである。卽ち今次のソ聯の對英米取極めは、ソ聯國民の士氣を昂揚させると共に、ドイツ軍の對ソ攻勢を前にソ英米三ケ國提携の强固なることを誇示し、內外に對する宣傳効果を主眼としたものに外ならない。更に英米側としては、ソ聯が萬一の單獨和

平を慮つて打つた手ともいへるものである。

ソ外相の内容説明　モロトフ・ソ聯外相は「ソ聯現下の强敵ドイツ及び歐洲におけるその協力國に對し、英米とのわが協力はいよいよ强化した」と抗戰中の國民を激勵した。その演說の要旨は次の如くである。

「英ソ條約は二部より成り、一部はヒツトラー・ドイツとの戰爭中におけるソ聯とイギリスとの相互關係、二部は戰後における兩國の相互關係を規定してゐる。從つて英ソ間には何等の秘密協定も存在しない。

歐洲第二戰線に關する諸懸案については、ロンドン、ワシントン兩會談において眞劍な注意が拂はれた。この會談に當つて一九四二年に歐洲で第二戰線を形成するといふ緊急問題に關し、ソ英、ソ米兩國間で完全なる諒解が成立した。

更にまた米英よりソ聯に對する軍需品供給、これを今後改善、增大する諸問題も審議された。本年度後半期より同盟諸國から、ソ聯邦に對する軍需品供給と補給は增大され促進されるであらう。これはまづ第一に、米國よりの供給の規模が增大しつゝある點に徵しても明瞭である。今回、米國の供給新計畫は總額三十億ドルと定められてゐる」

と發表したのである。

第二戰線は可能か　この問題に至つては、現在の英米軍事力をもつてしては不可能であることは、英米側の軍事專門家も認めてゐるところである。また援ソ强化については、英米自身の必需品輸送にすら船舶不足で困つてゐる有樣であり、しかも對ソ輸送が不安であつてみれば、果して實効的なソ聯援助が出來るかどうか、甚だ疑はしいものである。

今やドイツ軍は、ロストフを攻略し、南部ソ聯へ進擊をつゞけてゐる時、リトヴイノフ駐米、マイスキー駐英ソ聯兩大使は、斷乎として米英兩國に第二戰線の卽時結成方を要請してゐるといふ。たとひチモシエンコ軍が冬まで、ドイツ軍を或る一線で支へることに成功したとしても、ソ聯軍の弱り方は大なるもので、この冬はソ聯軍にとつて堪へ難いものとなるであらう。それに、ソ聯戰線と對ソ輸送路が今や切斷されることになれば、戰爭物資が危險になり、また食糧狀態が不安定となる。しかもソ聯に食糧まで送らねばならないとなれば、聯合國の船腹不足は極度に惡化するであらう。

イギリスの軍事專門家の說によれば、第二戰線を設置するには、十萬の將兵と、それに充當する裝備とを輸送する一萬トン級の船舶四百隻を必要とする上に、上陸作戰を掩護するために制空權を

握らねばならないから、聯合國には見込みはないとしてゐる。

その第二戰線設置案としては、

（一）英佛海峽を横斷してフランスに上陸作戰を敢行すること。

（二）地中海を渡り、北阿戰線に活躍中のロンメル將軍麾下のドイツ軍を擊破すること。

（三）北歐ノルウエーに上陸作戰を行ふこと。

などの計畫が立てられてゐるが、いづれにしても尨大な船腹を要する以上、いはゆる第二戰線設置案も、結局はソ聯への物資供給程度に止る外はないであらう、といはれてゐる。

アメリカの軍事通の說によれば、飛行機一臺を飛ばすためには平均一臺に二十人を要するから、米航空部隊が本格的に對獨爆擊を行ふためには、米陸軍航空部隊四十萬を派遣し、新たに百五十の飛行場を建設する必要がある。もし三千臺の爆擊機を飛ばすためには、飛行場における仕事は容易なものではないから、實現は不可能と見てゐる。

ところがこの八月中旬、わざわざチャーチルがモスクワを訪問し、スターリンと會談の末、第二戰線卽時行動を要求されたと見え、英軍がデイエツプ上陸を敢行したが、ドイツ軍鐵壁の防衞陣の前には完全に大敗し、ダンケルクの二の舞ひで、生命からがら佛海岸より逃げ戻つたといふ醜態を

演じたのである。おまけに、参加したアメリカ兵數百は俘虜になる憂目を見た。この際、ドイツ空軍のために英艦艇十九隻が擊沈された。

イギリスはこれで六回のフランス上陸戰に失敗したのだが、ドイツ軍の前には、制空權も制海權もないイギリス海軍も、また弱い陸軍も、到底物の數でないことは知れてゐる。

第六章　フランスは何故敗けたか

一、敗因の檢討

數々の敗因　フランスがドイツ軍のために敗れた期間は、一九四〇年（昭和十五年）五月十日から六月二十五日休戰までであつて、その失つた將兵は、死者八萬、行衞不明二萬、負傷者十二萬で、捕虜推定數は二百萬人といはれてゐる。これが僅か四十五日間の戰爭の結果であることを思へば、決して少ない數字ではない。

その敗戰の理由を檢討することはひとゝとではないので、ここで特に述べるとしよう。

フランスの敗因としては、

一、心理的には――國民の戰爭憎惡による。

一、社會的には――フランスの人的資源の涸渇、勞資の對立激化による。

一、軍事的には――準備の不充分、作戰の失敗による。

一、產業的には――生產の低下、殊に航空工業の甚だしい能率低下による。

一、政治的には――政治家の腐敗による。

などが擧げられるが、これらのものが集つて遂にフランスを滅亡の淵に叩き込んだことは事實で

ある。しかし單に、これらの如き表面的な缺陥だけで、戰意を喪くしたものといへるか、どうか。
いかにも、レイノオの戀人が、ダラディエの愛人と組み、そして反目して、フランスの政治に牝雞晨を告げたがためとも、いつていへないこともなからう。
また、フランス人は戰爭を好まなかつたことも事實である。だが、對獨宣戰布告を喜び迎へたのは、單に好戰者だけに限つたものではない。一般國民のすべてが、必ずしも戰爭反對ではなかつたので、戰爭を最も嫌つた農民といへども、開戰前の一九三九年の夏頃までは、「これ位の程度で戰爭は片づけたいものだ」と考へてゐた。「これ位の程度」とは六ケ月目毎にどしどし動員される慌しい狀態を目擊して、これ以上の態勢を望んではゐなかつたのである。
また、軍備の不充分、作戰の失敗、生產の低下などによつて敗戰を招いたことはいふまでもない。
アンドレ・モーロアがその著作のなかで、
「一九三九年十二月末、私はマジノ・ラインで數日間を過ごして、深い感銘を受けたのである。
マジノ・ラインの兵士は殆どローレン州出身で、要塞地帶から徵集された青年である。彼等は平和時においても、日曜日といへば要塞にやつてきたものである。メッツ出身の技師である一青年中尉の如きは、八年の間、週末には必ずマジノ・ラインで過ごして、大砲の射程を研究してゐたので

ある。

だから、マジノ・ラインの火力の正確さは絶對的なものであつた。要塞の前面にある監視所には寫眞地圖があつて、敵がこの地圖に示された區劃、たとへば『二四八――B』に現はれたとすれば、監視者は單に『二四八――B』とさへ電話で報告すれば、十秒の後には、その區劃では砲彈が炸裂するのである。それ故に、武器に對する兵士達の信頼と自信、並びに乘組員――各要塞は軍艦と考へられてゐた――相互の親睦尊敬の念は、フランス全陸軍の手本とすべきものであつたと、私は信じてゐる」

これほど完備した要塞が、どうしてドイツ軍のために容易に陷落されたかといへば、ドイツ軍が迂回したからであるといふ。迂回されたならば、その堅固な要塞は空しく銃口を、あらぬ方向にさらしたまゝ何の役に立つものではない。

軍需生産力の低下については、一九四〇年二月、ギ・ラ・シャンブル空相が飛行機製造能力は月二百臺に達したと議會で答辯したものの、實は百臺にも達してゐなかつたといふ事實がある。

ミュンヘン會議の後、フランスは五千臺の飛行機を必要とすることを切望した。しかし一九三四年のドナン案による一〇五〇臺、一九三六年のコート案による一五〇〇臺、一九三八年のギ・ラ・

シャンブル案による二六一七臺などの各豫算は成立したが、ドナン案は一九三六年に至るも完成せず、コート案は案のまゝ怠業して豫算を喰ひ盡し、ギ・ラ・シャンブル案は成立した時、フランスの月産は僅かに四十一臺に過ぎないといふ有樣であつた。

それに戰爭勃發の當時、フランスは約五百五十萬を動員した。その結果、工場は操業を短縮し、農村は荒廢に歸せんとする苦情が出たので、政府ではあわてゝ、折角完成したばかりの動員を、再び解除して百五十萬人を工場及び農村に後送しなくてはならなかつた。ために工場の生産能力は、戰爭開始直前の八月に較べて五割を減じた。これも政府と軍部の失態によることはいふまでもない。

これらの要素は、全くフランスを敗戰に導いたものではあるが、もう一つ決定的な要素を擧げなければならない。

左翼の敗北　卽ちフランスの敗北は、同時に急進黨をも含めて左翼の全面的敗北であつた。右翼の意圖するところは勿論、フランスをして敗北させないで左翼を滅ぼすのであつたらうが、しかし共和制に代表されたフランスを敗北させないで、左翼を打破ることは不可能であつた。

右翼がフランスの滅亡を賭しても、左翼の覆滅を期したことは、次の事實でも知られる。

一九四〇年六月、パリ陷落前後、ツールにおける緊急閣議の席上、ウエイガン將軍は「パリには既に、共產黨の暴動が起り、やがて全國に波及しようとしてゐる。故にフランスは卽時、ドイツと講和して、赤の鎭壓に進まなくてはならぬ」と主張した。この際、時の內相マンデルは、直ちにパリ警視廳に電話して「そのやうな事實がない」旨を確め、ウエイガン將軍の提案は閣議で一蹴された。だが、ここにマンデル、レイノオの沒落する運命は決定されたものといへる。何故なら、彼等は共に右翼であつたけれども、共和主義者だつたからである。

同じく、その當時、ウエイガン將軍は自己直系の優秀な將校を、すべて前線から引揚げて後方勤務とし、已れの身近かに召集したともいはれる。これが理由としては「何れは敗北と決まつた戰鬪において、將來ある優秀な將校を無益に犧牲にすることは國家の損失である」といふのだが、これでは既に前線において戰死し、または捕虜となつた將兵こそ、全くうかばれないであらう。

しかし、將軍の心のうちでは、フランスの共和制が改められないならば、自己の麾下の手で斷行する決意であつたといふ。

共和制は滅ぶ　だがフランスは敗けた、同時に第三共和制はラヴアルの有能なる才腕によつて、滅びてしまつた。だから、ウエイガン將軍のクーデーターの必要を見ないで濟んだわけである。

ここに共和制といふことについて一言するが、フランスの共和制はフランス大革命によつて、一七八九年に生れたもので、第三共和制は一八七〇年ナポレオン三世のセダン敗戰の後をうけて生れたのである。その過程は、第一共和制、ナポレオン帝政、七月王朝、第二共和制、第二帝政、それから第三共和制に達するまで、いはゆるフランスの自由民權思想の鬪爭史が展開された。

そして共和政治の四十年、第一次世界大戰に至る間、フランスは平靜を保ち得たかのやうに見える時期もないではなかつたが、前世界大戰後の思想上の混亂は、フランスの古創を再び開いて、殊に一九三〇年以後から今次の大戰の勃發までの十年間は、フランスを四分五裂の狀態に陥らせたのである。

ツオン裁判　彼等の第三共和制に對する憎惡は、ペタン政府が何よりも先に、敗戰後直ちに、同年七月三十日、最高法院を設けて敗戰の責任を問ふ擧に出たことで判るであらう。第三共和制の末期を擔つた政治家の殆どが捕へられ、獄に繋がれて斷罪の日を待つてゐる。また共產黨前代議士七十餘名は、アフリカへ送られたのであつた。

このフランスの敗戰責任を裁くツオン裁判は、作戰問題にも觸れず、戰爭宣言責任にも觸れず、單に國內的の武器準備の不足といふ極めて限定された範圍の責任追究に決められたのである。

法廷におけるダラディエ、ブルムラの陳述によつても、一九三九年までのフランス軍部の要求に基づく武器製造準備は相當出來てをり、結局は軍の作戦準備或は敵の軍備に對する認識を誤つたといふことに歸する。ガムラン將軍は武人の面目として、一切の辯護を拒否してしまつたので、從つてダラディエなどの行爲が、果して法律的に斷罪されるか、否かが問題である。公判廷の感じは正に裁判者側が被告であるかの印象を與へてゐる。

それに裁判範圍を、右の範圍に限定したことによつても、つまりこの裁判は全く工作的なものであり、しかも敗戰大詰の主役を演じた當時の首相レイノー、内相マンデルを除外したことによつても、既に推知される事實である。元來、敗戰責任の追究は龍頭蛇尾に終るのが常である。そして今後、證人の召喚などで波瀾はあらうが、結局は被告の辯護戰術に關する興味に終るだけで、結末のつかない裁判を、裁判長がいかにけりをつけるかが山であらう。

人民戰線内閣　或は一九三六年における人民戰線内閣の出現をもつて、フランスの致命的痛手となり、そのために國内の相剋は激化して產業は萎靡し、遂に今回の敗戰を招く原因になつたともいふ。これも理由のあることで、フランスの軍備が著しく低下し、國民の士氣が極度に沈滴してしまつたのは、正にこの人民戰線時代であつた。

しかし人民戰線を誕生せしめたものは、右翼への積極的攻勢のためであつて、人民戰線側からいへば一種の自衞手段であつたともいへる。だが、この民衆運動が外國、特に第三インターナショナルの利用するところとなつたがために甚だしく非國家的要素を含むことになり、從つてフランスをして敗戰に導く大なる原因となつたことはいふまでもない。

右のほかに、第二章の三でも述べたやうに、フランス敗戰の原因を幾つもあげたが、要するにこれらが綜合してフランスをおそろしく弱體化したことを知るとき、われわれは大なる教戒の必要を感じないでは得られないであらう。

二、新しきフランスの建設

そこで、今日のフランス內閣を見ることにしよう。

新內閣の工作　世界注視の中に行はれたフランス組閣工作は、この四月十八日に終了して、閣僚名簿をペタン國家首席に提出したのである。一昨年十二月十三日ヴイシーを逐はれて以來約一年半、ここに再びラヴアル氏はフランス政府首席（首相）として、フランス政界にその巨腕を揮ふこととなつた。卽ちピエール・ラヴアルは政府首席（首相）、外相、內相兼情報相を兼任することに

なつたのである。

この佛新内閣の閣員名簿發表に關聯して、次の如き公式聲明を行つた。

「ペタン國家首席はラヴアル氏と協議の後、ダルラン提督ともフランスの政治情勢を検討したが、その結果、現在の政府機構はもはやフランスの内外政策の要求するところと合致しないとの結論に到達した。ダルラン提督は將來ペタン元帥の後繼者となるべき特殊使命を有するので、ペタン元帥はダルラン提督にフランス陸、海、空三軍の最高指揮權を委讓することに決定した。かくてダルラン提督は、彼の管轄事項に關係ある問題が議せられる場合は、閣議に出席することを得るのである」

といふ。

そして、新内閣成立の翌十九日、ペタン首席はラジオを通じて、軍、政兩權の分野を明らかにし、ダルラン、ラヴアル兩氏の擔任を示し、併せて國民の政府支持を求めた。その要旨は次の如きである。

「今回新内閣は成立し、ラヴアル氏が政治外交の掌理に當ることとなつたが、ダルラン提督は余の後繼者として止まり、且つわが祖國及び植民地防衛の任に當るであらう。

余の二年前、ラヴアル氏と共にフランスの最も悲劇的な秋において、フランスの更生を保證すべ

き新秩序を發見したのである。一九四〇年の六月（獨佛休戰協定成立の當時）と同様、今日われわれは再び手を握り、二年前に築いた基礎に歸つて歐洲再建の大使命に立ち上つたのである。されば國民諸君は、衷心より政府を支持するやう要望してやまないものである」

といつた。

このラヴアル内閣の復活は、英米に對し大なる衝動を與へ、樞軸側に積極的協力するであらうといふので、アメリカは食糧輸送を中止したり、イギリスは外交使節を派遣したりしたが、フランスでは受附けないため、後には佛領植民地へ無法上陸をするといふ惡辣手段に出たのである。さうでなくても、ラヴアル佛首相はドイツの援助を仰いで、ド・ゴール派に對して攻勢に出るだらうといはれてゐる。

ド・ゴール派　ド・ゴール派とは、シヤルル・ド・ゴオル將軍の率ゐる、ロンドンに結成された自由フランス國民委員會を指すもので、今日フランスがドイツによつて敗れたとしても、明日は、フランスが敗けたその同じ方法で、ドイツを破つて見せるといふのである。一九四〇年八月七日、チヤーチル英首相と、ド・ゴール將軍との間には、協定が成立した。

なほ、このド・ゴールの主張したものは、軍隊の「速力と數量」であり、「戰車と飛行機」であ

り、「より多くの戰車とより多くの飛行機」であつた。彼の理論はフランス軍最高首腦部では餘り注意しなかつたが、ドイツでは眞先きに採上げて實行に移された。それ故に、ド・ゴール將軍は敵に武器を與へて、祖國を破らせるといふ皮肉な運命に立つたわけである。

想起するに、一九四〇年六月、獨佛休戰協定後、副首相としてペタン內閣に入閣したラヴアル氏が、新憲法を起草し、七月十日の國會（舊憲法による最後の國會）で決定された。そしてペタン元帥は翌十一日、この憲法を公布し、大統領の職制を廢止して、自らフランス國家元首に就任したのである。そこで共和國第十四代目の大統領、アルベール・ルブランは消えてなくなり、グルノーブルの近郊ヴイジルの村莊に歸つて行つた。

ペタン元帥の國民に告ぐ演說　かくてペタン元帥は、立法、行政の最高地位に就いたのであるが、當日の元帥の國民に告ぐのラジオ演說は、新フランスの建設目標を明らかにした、實に歷史的文獻であるから、ここに掲載したいと思ふ。

フランス國民よ。

國民議會は余に廣汎なる權力を附與した。余は如何に、これを實施せんとするかを諸君に告げね

ばならない。

政府は、フランスが曾て知つた最も困難なる情勢に直面しなくてはならない。國内の交通を回復し、各人をしてその家庭と勞働に復歸せしめ、食糧を確保しなくてはならない。

平和を交渉し、また締結しなくてはならない。この最近の日において、新らしい試錬がフランスに課せられた。イギリスは長い同盟を破つて、港に繫留され、一部武裝を解除したフランス軍艦を突如として、攻擊し、これを破壞した。かゝる暴擧は、われわれの全く豫期しなかつたことで、正當づける何ものもないのである。

イギリス政府は、われわれが軍艦をドイツ及びイタリヤに引渡すことを、承知するとでも信じたのであらうか。もしさうだとすれば、それは重大な誤解である。

われわれがイギリスから脅迫されて、敵に對してした誓約を破るとでも考へたならば、それもまた誤りである。フランス海軍には、自ら防衞すべしとの命令が發せられた。勢力の不均衡にも拘らず、わが海軍は決斷と豪勇とをもつて、その命令を實行した。

フランスは、その英雄的戰鬪に敗れ、數多き困難なる犧牲を供與したイギリスから、昨日は棄てられ、今日は攻擊されて、運命の前に孤立し直面してゐる。

しかしフランスは、將來に全的な信賴を保ちつゝ、その勇氣を培ふべき新たな希望を見出すであらう。

われわれに課せられた廣大な事業を達成するため、余は諸君の信賴を必要とする。諸君の代表者は、諸君の名において、余にこれを與へた。彼等は諸君と同樣、そして余自身と同樣、國家の無能力が、國民を痲痺せしめつゝある現狀を改めようと欲した。

かくて余は、新らしい政府を組織した。

十二人の大臣が國內行政を分擔するであらう。彼等は、國家の樞要なる事務を取扱ふ何人かの事務總長によりて輔佐される筈である。

フランスの各大地方には首班として總督がおかれよう。かくして行政は、中央集權化されると同時に地方分權化される。

官公吏は、もはや從來のやうに、餘りにも些末な規則や、餘りにも多數の監督により、行動を阻害されるやうなことはないであらう。彼等は一層自由に、一層敏活に働くであらう。しかし同時に彼等はその犯した過ちに對しては、自ら責任を負はなければならない。政府は、緊急に實施する必要のある諸問題を、一層容易に解決するために、占領地帶內にその所在を置く希望をもつてゐる。

この點に關して、われわれは既にドイツ政府に對してヴェルサイユ及びパリにおける各省の所在地區の解放を要求した。

われわれの政策は、フランスにその失つた諸種の力を恢復せしめるにある。フランスはあらゆる時代を通じて、あらゆる國民が、その生命と健康と繁榮とを確保するに要した單純なる諸原則に從ふ以外に、力を見出す方法はない。

われわれは從ふ者の規律が、上に立つ者の權威に呼應し、萬人に正義が行きわたる組織立つたフランスを作らうと思ふ。

あらゆる方面において、創造に努め、その能力と功績以外の何ものも考慮することなく、彼等に指揮を委ねたいと思ふ。フランス國民の勞働は、祖國の最高の資源である。勞働は尊崇されねばならない。國際資本主義と國際社會主義は、勞働を食物とし、これを墮落せしめたが、何れも同じく戰爭以前の時代に屬するものである。彼等の一層唾棄すべきは、表面相抗爭するかに見え、裏面において相提携してゐたことである。われわれは、もはや何等の陰謀的同盟によりて苦しめられることはないであらう。

われわれは都市における軋轢を排除する、と同時に、工場や農園の內部における不和をも許容し

ないであらう。常規を逸脱したわれわれの社會では、金錢が餘りにも虚僞への奉仕者となり、道具となり、支配の手段となつてゐた。われわれは利潤が有する强力な推進力、儉約によりて蓄積された貯蓄などを否認しようといふのではない。

依怙贔屓による不公平な配分は、もはや許さないといふのである。利潤は勞働と冒險の報償としてのみ存在する。再建されたフランスでは、金錢は努力の報償としてのみ存在するであらう。

諸君の勞働は擁護されるであらう。諸君の家庭は國家の尊敬と保護をうけるであらう。

若返つたフランスは、いきいきとした危惧に乾くことなき希望をもつて、諸君の心を充たす子孫を欲しておる。フランスは諸君の子女の敎育について、將來に對し失はれてゐた信頼を諸君に取戻すであらう。

フランスの家庭は長い名譽ある過去の保管者たるであらう。家庭は强い國民を作る基礎であるところの舊い種々の德性を、時代を通じて維持してゆく義務をもつてゐる。

家庭の規律は保障されねばならない。しかしわれわれの知るやうに、近代の靑年は靑春と共に生き、その力を大氣のうち、人生の戰ひへの準備のため、健全な友愛の中に求める必要がある。われわれは、そこにも心するであらう。

維持すべき舊き傳統、新らしい意力に通ふ若い情熱、これらがわが民族の根抵を形作るものである。

フランスを誇りとするあらゆるフランス國民、フランス國民を誇りとするフランス、われわれが創造せんとするのはかゝる秩序である。われわれはこゝに全力を傾注するであらう。諸君もまたこゝに献身の誠をそそいでほしい。

祖國はわれわれの弱くて、痩せ細つた生命を確保し、美化し、正當化することが出來る。われわれをフランスに捧げよう。フランスは常に、その民を偉大にすることを忘れなかつたではないか。（主に井上勇氏の譯による）

最近におけるフランスの危機　この十一月十五日、北阿戰線で米英陣營に投じた前フランス陸海軍司令官ダルランは、ペタン佛首席により叛逆者として正式に、その公職一切を褫奪されたのである。

さればフランス國の永久性を代表する國家首席ペタン元帥は、現下の非常事態に鑑み、ラヴアル首相をダルラン提督に代へて、國家首席推定後繼者に指名した。これによつて「政府首席に對し憲法によらずして單にその署名により法律を制定し法令を發布する權限を附與す」といふことで、ラ

ヴァル首相は國政燮理の全權が委任されたのである。そして、內閣の改造が二、三行はれた。

ところが、アメリカ軍の北阿侵入以來、フランス陸海軍當局の「信賴すべからざる」態度に對し、ドイツ軍は同月二十七日ツーロン軍港に進駐し、ヴイシー政府に對し全佛軍の解散武裝解除を要求したのである。ためにツーロン港にあつたフランス艦隊は、フランス海軍の手によつて軍艦及び船舶を全部自沈もしくは破壞する擧に出たのである。その中には戰艦ストラスブルグ、ダンケルク(各二萬六千トン)などが含まれてゐるといふ。

この間の事情を、ヒツトラー總統からペタン首席へ發した書簡で詳しく述べてゐるが、そのうちの一節に、

「某提督は十一月十一日、ツーロン軍港におけるフランス艦隊が如何なる外敵の攻擊に對しても交戰するだらうと約束しながら、翌十二日には英米兩國海軍部隊の上陸ある場合に、斷じて發砲してはならないとの軍命令をフランス艦隊に出して誓約を破つた事實がある。その他、休戰協定違反の實例は續々發見されてゐる」

といふ。そして獨伊兩國はフランスの植民地を破壞せんとするが如き意圖は毛頭抱いてゐないが事情止むを得ざる旨を强調してゐる。フランスの危機はまたまた切迫してゐる。

第七章　沒落へ急ぐイギリスの苦悶

一、イギリスの沒落過程

英聯邦　イギリス本國の面積は約十四萬五千方キロであり、その人口は四千六百萬に過ぎないが、その他の領土、即ち歐洲、アジヤ洲、アフリカ洲、米洲、大洋洲などに亘つてゐるところの、その總面積は實に本國の百四十倍餘にも及んでゐるのであり、その總人口は本國の九倍に當るといふ狀態である。なほ、英聯邦（ブリテツシユ・コンモンウエルス）の構成は、英帝國――大ブリテン及び北部アイルランド、海峽諸國、アイル・オブマン、植民地、保護領及び屬領、インド、ビルマがあり、自治領――カナダ、オーストリア、ニユー・ジーランド、南阿、エアルがある。もつとも、大東亞戰爭によつてこれが全貌を變化せしめたことはいふまでもない。

この地球全面積の四分の一を占める英帝國は、十六世紀以前はヨーロツパの一端に偏在する島國として、獨立を維持するのに汲々としてゐたものであつたが、僅か三百年の間に、前記の如き諸大陸に廣袤四千萬平方キロの領土を獲得するには、あらゆる老猾陰險な策謀と惡虐無道な非人道的行爲を逞しうしたことはいふまでもない。

海賊行爲　英國の海外發展は海賊行爲によつて始まつたもので、例へばスペインやポルトガル

の商船が植民地から財寶を積んで歸つて來るのを待ち受けて掠奪したり、或は各地の港を襲つて財物を押收したりして、これでもつて巨萬の富を築き上げたのである。しかもこの海賊行爲は、王公その他からの援助の下に公然に行はれ、その首魁にナイトの勳位を授けたのである。また暴虐を極める奴隷賣買を殆ど英國の獨占事業として、不當な利益を積んで行つた。

その後になり、東亞に魔手を伸ばして、濠洲土人を滅亡させ、印度人の自由を完全に剝奪し、それから支那においては阿片戰爭を機としてはびこり、遂には神國日本に對し侵略の毒牙を磨くに至つた經路については、讀者が熟知せられるであらうから省くことにする。

「かつて英帝國に太陽沒せずとか、七つの海を支配する英國とか、世界的大版圖を呼號した大英國も、今は昔の夢物語りと化し去らんとしつゝある。しかもかくの如き衰退は、決して第三國のためでなく、英國の愚劣なる政策そのものの結果した運命なることを思へば、ここに敵ながら一掬憐憫の情を催さざるを得ない次第である」

とは堀情報局第三部長の談であるが、まことに宜なるかなといふべきである。

國防完備を期するためには、資源と生産力とを持たねばならないが、しかし重要なる國防資源のすべてを國内に持つといふ國は皆無である。このイギリスの如きも、十八、九世紀に亙つて他民族

の國々を侵略して多くの資源を獲得したが、その本國には鐵と石炭とがある位のもので、他の重要資源は何れも海を越えて運ばねばならない。從つて常に輸入額は輸出額の倍以上にも當る輸入超過を示してゐる。

食糧饑饉　しかも國民の食糧の七十五パーセントを海外から船で持ち込むのであり、殊にパンの原料たる小麥の八十七パーセンを、やはり船で運び込まねばならない大きな難艱がある。この難艱こそ、イギリスの一大弱點である。即ち本國が島國であるだけに、第一に食糧の自給自足が出來ないといふのが、いはゆる大英帝國の苦患である。そしてこれを護るのが、世界第一を誇るイギリス大艦隊と大商船隊であることは、改めて說くまでもなからう。

現に、イギリスのこの食糧不足は、いよいよ深刻の度を加へてゐるにも拘らず、特權階級のみが未だに贅澤な食事をしてゐるのに對し、國民一般の不滿が昂まり、政府は外食の均一價格統制を實施することになつた。ロンドンのレストラントは一週間に出す料理の數量も制限され、一般にその質が恐しく落ちて來た。そして晝、夕食の價格は五シリングを超ゆることが出來ず、且つ三皿以上は出すべからずとの禁令を發するに至つた。更にこの六月一日からは夜半以後の食事は禁ぜられることになつたといふ。

またイギリス人にとりては食膳に缺くことの出來ない果物が、一九四〇年の終りに果物の輸入が止つて以來、殆ど市場に出なかつたのが、今年の二月、即ち二年何ケ月ぶりで、罐詰の果物にありつけて大喜びをしたといふ。

闇の横行　イギリスの國民は世界中で、最も洗錬された常識の發達した國民として自ら高しとしてゐたのであつた。この假面は果然剝がれ、今日の英國民は口に國家を唱へて腹では己れのポケツトをふくらますことにかゝつてゐるが、これでは戰爭に勝てるものではない。その現象として嚴罰を潛つて闇取引は横行し、昨年一ケ年のその件數は約一千件、罰金總額は五萬五千ポンドであるといふ。それが今年になつてはますます顯著になり、最初の一ケ月半で旣に昨年一ケ年を凌駕するといふ惡い盛況である。この一事を見ても、いかに國民生活が不安であるかが知られる。

「要塞經濟」　商相ドールトンは、この六月から衣料切符がぐつと切り下げられたのに對して、「われわれは、もつともつと要塞經濟を强める必要がある。船腹を出來るだけ軍需品に向けねばならないから、軍需品以外の一切の物資は今後、日を追ふて減少するのみであることを、國民は覺悟すべきである。今度の切符の切り下げも、ほんの着替へを購ふに足るだけになつたが、これも國民に我慢してもらふより他にない」

といつて、「要塞經濟（フォートレス・エコノミス）」なる言葉を繰返してゐる。この切符の切り下げの要領として、男子用上衣のダブル・ブレストは仕立禁止、ズボンの折り返しは禁じられた。

住宅難もかなりひどくなつて、最近五年以内の期間では、まず借りられなくなつたといふ。また一九三六年に七十五ポンドだつた貸家が一九四一年には一千五百ポンドになつたといふ話がある。

沒落への二つの道　イギリスの戰時經濟について、或る論者は、大西洋におけるドイツの通商破壞戰が激化するに伴ひ、イギリスは食糧不足のために、混亂に陷るに違ひないと豫測してゐる。事實、イギリスの大なる弱點の一つは、この食糧の自給不足であり、從つて沒落への大きな道ともいへる。

しかし、また考へようによれば、イギリスはこの弱點を表面化させないために、他のあらゆるものを犧牲にしても食糧自給に力を注ぐであらうから、これでもつてイギリスが忽ち參る、と見るのは早計であらうといふ見方も成立つ。案外持ちこたへることが出來るかも知れない。

けだし、わが艦艇の活躍によつて、濠洲の食糧品搬出は殆ど不能に陷つたとはいへ、大西洋をへだてたカナダ、アメリカ、アルゼンチンなどには、小麥をはじめ各種の食糧が市場を求めて、各地

の埠頭に山積されてゐるといふのだから、これらをイギリスが輸入するためには、如何なる船舶の犠牲を拂つても敢行するであらう。それだけに、食糧品確保のために要する船舶の大なる無理は、他の方面に現れる結果になるわけである。即ち船腹の不足は、食糧品の側面に現れる以前に、軍需品生産に必要とする原料物資、或は直接軍需品を輸送し來ることに困難を生ずることにならう。

この時にこそ、イギリス戰時經濟の致命的な弱點を白日下にさらされることになる。その最後の日も、近頃の樞軸陣營の英米に對する通商破壞戰の激烈さから見ると、近い將來であらうと思ふ。

重要資源　イギリスは重要資源の自給率の高い點から見れば、アメリカに次ぐ世界第二位であるが、それは平和時における船舶の航行が安全である場合を前提とするもので、もし平和を失へば忽ちその自給率は轉落する。ところがアメリカは、イギリスとは反對な立場であつて、戰時の方が却つて有利となる、たゞし南方資源の重要さを考へに入れないでの話である。即ちアメリカが平時にありては、カナダやメキシコ、その他近接諸國の物資を、わが物のやうに自由に取り込むわけにはゆかないが、戰時下の今日ではわが物のやうに自由に取り込むことが出來る。既にカナダ及び中南米の資源の殆ど全部は、アメリカの手中にあるも同じ狀態で、しかもその量は相當に大なるもの

である。

しかるに、屬領から切り離されたイギリス本國は、みじめなもので、食糧品生産の貧弱さはいふまでもなく、金屬及び非金屬鑛産物においても、同じく貧弱極まるものである。

それは石炭、鐵鑛、石油からヴアナヂユム、モリブデンに至る二十四種類の重要鑛物資源のうち、イギリス本國で産出されるのは、一九三七年の實績で見ると、鐵鑛、鉛鑛、錫鑛、タングステン鑛、亞鉛鑛、石炭の六種類であつて、石油、銅鑛を始めとして、あとの十八種類は産出皆無である。

イギリスの鑛物資源として、一九三八年の年産は

石炭	二二七、〇一五、三〇八トン
鐵鑛	一一、八五九、一九一トン
銑鐵	六、七六一、〇〇〇トン
石油	四五五、六九六、〇〇〇ガロン

であつて、銑鐵は世界第四位に、石炭は世界第二に富んでゐる。

炭坑罷業　ところで、本年四、五月頃から燻りかけてゐたイギリス炭坑罷業が次第に擴大して六月に入るとその規模は殆ど全英をおほひ、更にこれが濠洲にまで波及するといつた具合で、敗戰

に苦しむ英本國要人を慄へあがらせた。

これが原因といふのは、軍需工場の勞務者ばかりを優待して、本當に緣の下の力持ちとなつてゐる炭坑夫をそつちのけにしたため、炭坑勞務者が俄然勞賃の値上げを要求したことに端を發してゐる。

ところが、それでなくても勞働爭議が年中行事の一つとなつてゐるイギリスに、最近は要路の人物で大分左かぶれがあるため、特に解決が困難になつて來た傾向がある。何しろ一千五百萬トンの石炭不足では、今冬の軍需工業が不能力になるので、應召兵を解除してこれを廻すとか、或は勞働軍隊制度なるものを創設して勞務者はすべて軍法の適用を受けしめるとか、更に全炭坑を政府の支配下におくとか、いろいろな案を建てたが、それでも解決を見ることが出來ない。

チャーチルも遂に我を折り、一週最低賃銀八十三シリング制を認め、一應爭議は解決の形となつた。なほ當初の爭働者側の要求賃銀は最低八十五シリング保證であつた。そして七月一日から石炭法を發動して、全英國炭坑を政府自ら接收しその支配下におくことになつたので、依然利潤追求に夜も日もない英國資本家が滿足して、政府の管理經營に甘んじるか、どうか頗る疑問である。

石炭に次ぐイギリス本國で有名な資源である鐵鑛が、このやうな狀態であるから、その他の重要

資源における自給の狀態が非常に惡いことは、推して知るべきである。
現在の歐洲大陸の情勢では、殆どイギリスを封鎖してゐる有様だから、鐵鑛の輸入も思ふやうにならず相當に苦境に陷つてゐる。
アングロサクソンは、比較的辛抱强い民族であるといへども、喰はずには生きてをれない以上、船腹が不足して來るに從つて、先づ輸入を減らすべく餘儀なくされるものは軍需生產用の原料物資及び同資材であつても、食糧品を減らすわけにはいかない。
これらの弱點から見て、長期戰におけるイギリスの破綻は、先づ船腹の不足から、それが直ちに重要軍需產業の原料資材に影響して、崩れて行く經路を辿るのではないかと思ふ。食糧の苦窮に耐へかねて手を擧げるのは、その次ぎ位なもので、それだけの對策が講ぜられてゐるのではなからうかと考へるのである。
この食糧の苦窮と軍需資材の缺乏との、いづれが前になり後になつてイギリスが崩壞するか、見方によつて異にするであらう。

二、イギリスの戰爭遂行の豫算

イギリスの豫算　イギリスの本年度の豫算は、最近、英藏相ウッドが議會で發表したが、その特徴は英財政の根幹をなす所得税が、旣に限界に達して引上げられないので、遂に免税率を引上げ、その代り間接税を大幅引上げをしたことである。即ち高率所得税、殊に高率累進税を得意としたイギリスがそれに行詰つて、急激な大衆課税に向つたことが注目される。

勞働者へ所得税　最近は賃銀勞働者から所得税を徴收することになつたが、これについて政府で出版した「勞働者用所得税問答」といふパンフレットで、「大變な負擔だが、この大戰爭に勝つために」を强調してゐる。

そして極めて平易に、國家の今日の出資は一日一千三百萬ポンドで、その六分の五が戰爭費に使はれてゐること、一千人の使用人を有する工場では全使用人が年三萬五千ポンドの所得税を納めることになるが、これだけの金があれば、政府は一週間に一個づゝ阻塞氣球が造れるし、六個の大型破甲爆彈かタンクのエンジン一個が造れる。一ケ月にはコーヴエット艇二隻乃至は二百萬のリヴエツト、これは驅逐艦二隻分以上である。或は飛行機スピットファイヤーのエンジンと機銃、一年にすれば海軍戰鬪機七機乃至はスピットファイヤー機四機、或は普通の大型爆彈七百七十七個を造ることが出來ると、細々と並べて所得税は高いが納めてほしいと泣きついてゐる。

だが一方、物價騰貴の傾向は、政府の各種對策にも拘らずますます激しくなるといふ矛盾に困りはててゐる。

戰爭遂行の豫算　イギリスが今後一年間に、戰爭遂行のために費す金は、一般歳出を含み六十五億ポンド（邦價約千百七十億圓、昨年より十億ポンド增加）といふ尨大な見積りである。このうちアメリカからの武器貸與、カナダの財政援助、海外財產處分、その他で償はれるものを差引いて四十五億ポンドの豫算が計上された。

これに應じて國庫收入二十四億ポンド、公債及び豫算外收入は二十一億ポンドが計上され、このうち稅收入は二十二億四千四百萬ポンドで、うち一億五千萬ポンドは增稅による。卽ち豫算の四十九パーセントを稅金で賄ふもので、この率は一昨年度の三十三パーセント、昨年度の四十パーセントより遙かに高いのである。

增稅されたもののうち、商品に課する稅のほかに、所得稅の免稅點を獨身者週給三十七シルリング六ペンスより二ポンドに、妻帶者二ポンド十七シルリング六ペンスより三ポンドに、子供一人ある者四ポンドに、二人ある者五ポンドに引上げ、既婚女子の免稅點を年四十五ポンドから八十ポンドに引上げたのである。

過剰購買力の吸收は、物の供給の調節と貯蓄が主たる手段となるが、物の供給はますます減少し、貯蓄も不活潑である以上、インフレ危機に直面してゐる狀態である。

とにかく總支出六十五億ポンドに對する、國庫收入二十四億といふ莫大な開きは、外國の借金と財產の賣食ひで食つてゐる老大國の前途こそ、まだ心細いものである。しかも、イギリスは既に一九四一年（昭和十六年）三月には、戰爭遂行の能力を失ひかけてゐたのを、アメリカの武器貸與法によつて辛うじて支へられたものである。

アメリカの誤つた對英援助　アメリカの對英援助には、大きな誤算がある。アメリカ自體が戰爭に參加しないで、またアメリカが他國の攻擊を受けない場合でなら、アメリカの經濟力をしてイギリスの戰鬪力に役立てることが出來たであらう。しかし現在、アメリカ自身が戰爭行動に入るに及んでは、豫期しない多くの缺陷を曝けてしまつたわけである。

アメリカの經濟力はイギリスよりも以上に、戰爭經濟編成が整備されてゐない。またその有する軍需資源を戰爭遂行に用ふる準備が、更にしてなかつた。その著しい例としては、最も豐富なる國內資源である石油の輸送力の不足に惱んでゐるのでも知れる。

アメリカの國防費　その數字をあげれば、アメリカ政府の經費は一九四〇年（六月末に終る）

には約九十億ドルに近く、國防費は十五億八千萬ドルであつた。

しかるに一九四一年度には、歳出百二十七億ドルを超え、國防費は六十二億ドルを超えた。

更に一九四二年（六月末に終る）には、歳出豫算二百四十五億ドルを超え、國防費は百八十億ドルに達した。

本年一月には更に百八十億ドルの追加豫算が要求された。

一九四三年度（六月末まで）豫算は、本年一月の大統領教書に示された歳出五百九十億ドルに始まつて、その後再三の追加豫算要求となつて、四月末までに既に一九四三年度豫算は七百八十億ドルに達するといふ有様である。

しかし、この巨額の財政需要を充たせるだけの經濟力が整つてゐるかといふに、決して整つてはゐないのである。一九四二年度豫算は前掲の如くであるが、本年三月までに豫算の使用濟額は約二百億ドルであつて、そのうち國防費が約百五十億ドルであるといふ。卽ち財政需要を充たし得る生産力が、豫算額に伴はないことを證明してゐる。

國防費の支出は本年一月には二十億ドル、更に三月には三十二億ドル、五月には三十五億五千二百萬ドルに達してゐる。過去十ケ月の戰費支出額は二百二十一億三千萬ドルに達するといふ。

これがために、經常收入增加を圖るのに大增稅を斷行したが、その主要財源の大部分は公債である。その國債現在高は一九四〇年六月末に約四百三十億であつたのが、四一年六月末には約四百九十億ドルに近く、更に本年六月末には七百五十億ドルを超える始末である。

この大規模の公債政策の運用にも圓滑を缺いてゐる。昨年五月より本年四月に至る一ケ年間に、米國政府の債務は約百七十億ドルを增加したのに對して、僅かに五十三億八千九百萬ドルが消化されたに過ぎない狀態である。

そこで、物資及び勞務に對する戰爭資材の需要が急激に增加して、現在の供給能力を遙かに超えてゐるのである。いひかへれば直接軍需及び間接軍需生產は、資材と勞力との不足に行悩んでゐる。それにも拘らず需要が急速に增加し、政府資金は公債を財源として多額にばらまかれてゐる。しかもその公債消化による政府資金吸收は僅かな程度に止まつてゐる始末であるから、當然、アメリカ經濟は財政手段を原動力としてインフレの方向に進まざるを得ないことになる。

ために、ルーズヴエルトのインフレ抑制對策の提案が現はれたが、ここに米國財政の大規模なる戰爭豫算額全額が、未だ支出されてゐないことに注意すべきである。その豫算に準備されてゐる政府資金が、今後實際に支出されるにつれて、インフレの抑制は不可能とならざるを得ないのである。

それ故に、アメリカがかくの如く巨額の財政資金をもつて戰爭を遂行する用意ありといつて、外國に示威し得ると思ふならば大なる見當違ひである。この事實に卽して、インフレによる經濟が安定を失ひ、從つてアメリカの戰爭能力に破綻を來す原因となるのである。

英米の腐れ緣　ここに至りて、アメリカの支持によつて戰爭能力を保持してゐるイギリスが、アメリカの戰爭經濟力でもつて、いかなる程度の援助を得られるかが致命的問題である。

當面の事態においては、米英いづれに弱點があるかといへば、イギリスの戰爭能力の脆弱性の方が早く現はれることにならう。

もつともイギリスが戰爭能力を失へば、アメリカも抗戰力を失ふことにならう。現に、イギリスは獨力をもつて戰爭を遂行し得なくなつてゐるが、アメリカもまたイギリスを離れては樞軸に對して戰爭遂行の能力はないのである。これが全く腐れ緣といふのであらう。

戰爭能力の前提　アメリカの經濟力が、イギリスの戰鬪力に役立てるには、第一にアメリカからイギリスへ武器及び食料品などが輸送されねばならない。

そこでイギリスの戰爭能力なるものは、その制海權が確保されてゐた場合を前提とすることになる。例へば反ナチスの論者、フリツク・ステルンベルヒの如きは、次のやうなことをいふ。

「英國海軍と商船隊とは英國の戰爭遂行における二つの決定的要因である。英國海軍は四つの異なる海洋――北海、大西洋、地中海、太平洋――で敵と交戰することになるであらう。英國海軍は戰爭の武器だけでなく、英國經濟はその必要とする物資の供給を確保しなければならぬ、それをなくすれば英國は崩壞するであらう」

誰でもイギリスの長期戰爭の能力は、その制海權を前提とするが、しかしその前提が否定されるか、また脅かされた場合には、從つて結論を修正せねばならない。それに、前記のステルンベルヒは英國海軍が四つの海上において戰ふといつてゐるが、インド洋の制海權を失ふことには言及してゐない。

インド洋の制海權を失へば、イギリス本土に對するインド及び濠洲よりの援助が不可能になることは知れてゐる。ために濠洲は、英本國及び米國に救援を求めてゐる。それどころか、遂にインド本土さへも失はねばならない當然の破目に追込まれてしまつた。

かうしたことから英本國が、インドと濠洲の資源を、その戰爭能力の增强に使用し得る可能性は失はれてゐる。

故に、英帝國屬領の支援が弱化すれば、專ら米國の經濟力の支持を力とたのまねばならない。だ

から米國政府の資金を、武器貸與法を通じて使用することになるわけである。けれども米國の經濟力は、既に參戰してゐるものであり、殊に日本との戰爭によつて慘敗を重ねてゐる以上、自國の戰爭力補塡に追はれてゐる始末である。

その苦しいなかの經濟力の一部を割いて與へる武器や食料品も、大西洋でドイツ潛水艦のために著しく制限されてしまひ、その輸送力を確保する制海權は失つてゐる。

結論するに、英米の戰爭能力は先づ、英國の經濟力を戰鬪力に換へようにも財政力の缺乏によつて困難になり、次いで英國の財政力の缺乏を米國の財政手段を通じて補塡しようとしても、米國自體も必要に迫られてをり、また英國へ輸送の途も遮斷されつゝあるといふ、八方塞りの立場におかれてゐる。

だから、英國の戰鬪力が衰へることは、米國を脅かしてその戰爭經濟力を弱める結果になる。かうした英米財政に現はれた戰爭能力は、既にこの因果關係の發展過程を進みつゝあるのが、今日の兩國の現狀である。

三、失ひつゝあるイギリス制海權

イギリスは「造船業は世界無比、海上王と稱せられる」とか、また「海軍は强大、商船も世界全體の凡そ三分の一を有する」とかいふことが、以前はれいれいしく書かれたものである。成程、第二次世界戰爭の直前までは海における力、即ち船と艦の制海權、いひかへれば通商と海軍力とは大なるものであつたに相違ない。しかし大といふ數値は、必ずしも强といふ質量を意味するに限つたものではない。それどころか、數量が大なるために却つて質量を低下させるのに役立つことさへあり得る。

今日のイギリスの狀態は、これを如實に示してゐるのである。艦船の數が多いだけに、わが大東亞戰爭のために、また歐洲ではドイツ、イタリヤのために、イギリスの海軍力は刻一刻と沒落への淵におちこみつゝある始末である。

前世界大戰におけるイギリスの悲鳴

この前の世界大戰のとき、ドイツはこのイギリス海軍を擊滅して海上權を剝奪すべく、一九一五年二月四日の潛水艦宣言で、Uボートを盛に活躍させ、一九一七年一月三十一日からは無制限潛水艦戰の擧に出たのであつた。その効果は覿面、二月には五十三萬トン、三月には六十萬トン、四月には實に八十七萬トンといふ商船が、Uボートのために海の藻屑と化してしまつた。そしてシムス提督が「今やイギリス國内に存在する食糧は、僅かに三週

間を支へるに過ぎない」といふ、どたんばにまでイギリスは追ひ詰められたのである。

それほどまでに活躍したドイツ潜水艦が、一九一七年四月の撃沈噸數八十七萬トンをレコードにして、段々と戰果を落してしまつた。それで結局イギリスは救はれたのだが、思へばドイツとしては惜しいことをしたものである。

これにはいろいろの理由はあるが、軍事評論家の中には「ドイツが、通商破壞戰によつてイギリスを屈服させようとしたのは邪道である。健全な兵術思想から見れば、直接または間接に敵の通商を保護してゐる軍艦を撃滅することが、通商破壞をやる前に採るべき仕事ではないか」といつて、ドイツ潜水艦を非難したものもあつた。

しかし、前大戰におけるドイツ艦隊の勢力は、イギリスの六割しかなかつたのだから、堂々と戰つても勝味はないと觀念したので、そこでドイツはUボートを放ち、敵艦隊を一艘また一艘と沈めて行つて、大體敵味方の勢力が互角になつたら、大決戰に出ようといふ作戰計畫であつた。ところが、イギリス艦隊は根據地スカパ・フローに逃げかくれ、港口には潜水艦防禦網を嚴重にはりめぐらしてしまつたのだから、Uボートとしては手の出しやうがなかつた。それがために、通商破壞戰一本槍に出るより外になかつたのである。

しかし、今次の世界大戦においては、今日のドイツ海軍力は、イギリス海軍力の六分の一しかないのだから、直接または間接に敵の通商を保護する軍艦を撃滅することは容易でない。だが機會さへあれば、ロイヤル・オールを沈めたU二十六號や、フッドを沈めたビスマルク號のやうなこともやつてのけるが、そのほかには直接商船を沈める通商破壊戰を採る必要がどうしても起るのである。

この潜水艦の數だが、前の大戰勃發前には、大型Uボートは三十六隻しかなかつたが、大戰中に百三十六隻も增加して百七十二隻となり、また中型、小型のUBボートは百五十三隻だつたが、九十六隻新造されて二百四十九隻となつた。これら大型、小型四百二十一隻のドイツ潜水艦が、思ひのまゝ「北海の狼」と荒れ狂つてイギリスを脅かしたのである。

ヒットラー總統の演說によれば、前大戰では三百四十三隻となつてゐるが、一日一隻の割で殖えて行くのである。ドイツの工業力でもつて五百トン、七百五十トンといふ小型のものなら、それ位は可能であらう。

なほ、このUボート戰を助けるところの、强力なドイツ空軍が通商破壊戰に力を合せることはいふまでもない。

英米の海軍既成艦艇數　今、イギリスの海軍既成艦艇數を見るに、主力艦、航空母艦、巡洋艦

（甲級、乙級）驅逐艦、潛水艦、水上機母艦などを合せて三百四隻、總噸數百三十一萬八千六十九トンとなつてゐる。

またアメリカの海軍既成艦艇數を見るに、それは三百九十一隻で、總噸數は百三十四萬七千三百七十トンとなつてゐる。

これらは昭和十五年九月現在のものだから、その後になつて、當時建造中のもの、または未起工のものが、今日では既成に加へられたであらう。

英米の船舶數　次にイギリスの船舶は、その隻數九千四百八十八で、總噸數二千百二十一萬五千二百六十一トンであり、またアメリカの船舶は、その隻數三千三百七十五で、總噸數千二百萬三千二十八トンである。これは昭和十四年の調査であるから、その後に至り何れも增加したことであらう。

これらの數字は、前記の如くわが海軍により、またドイツ、イタリヤ海軍によりて、相當減少したことはいふまでもないが、敗戰國英米では一切を頰冠りして、詳しい發表をしないから不明ではあるが、かなりな數量が海の藻屑と化したことは、その一部を知ることによつても大體を推算することが出來よう。

日・獨・伊の通商破壞戰果　昭和十七年七月十八日の大本營發表によれば、帝國海軍が開戰以來撃沈破した敵國側船舶は合計三百六十六隻、百九十三萬五千トンであり、更に同月二十八日の發表によれば、米濠沿岸に葬つた八隻、七萬一千トンであるのを加へれば、わが敵國通商破壞の戰果は實に三百七十四隻、二百萬六千トンになり、一ケ月平均二十數萬トンに上つてゐるのである。

ドイツ側の通商破壞戰果は、（前記八十八頁のものは今年半歳の戰果を示したもの）、開戰以來本年六月末までに千五百六十四萬トンと發表されてをり、イタリヤ側の戰果は、本年四月四日の公表によれば、三月までの撃沈百萬トン、撃破六十九隻、その後に至りても相當の戰果を獲得してゐるので、今日まで百五十萬トン内外を撃沈してゐるものと推算する。

以上、日獨伊樞軸側の戰果を綜合すれば（單位萬トン）

日本	二〇〇
ドイツ	一六〇〇
イタリヤ	一五〇
合計	一九五〇

しかして日獨伊の敵通商破壞力は毎月百萬トンに上つてをり、この攻勢は將來ますます假借なく

展開されることはいふまでもない。

今次大戰前當時の保有噸數　イギリスは今次大戰勃發前、大體二千百萬トンの船腹を擁し（前記、昭和十四年の調査と同じ）、その後ノルウエー、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス諸國の船舶を傘下に收めると共に、ドイツ、イタリヤ船の若干を拿捕したり（以下外國船と呼ぶ）、或は新造船、購入船などで計千三百萬トンを增加してゐる。

これを種別すれば（單位萬トン）

戰前保有	二、一〇〇
外國船	一、〇〇〇
新造船	二〇〇
購入船	一〇〇
合計	三、四〇〇

輸送能力　これが合計三千四百萬トンのうちから喪失船千六百萬トンを差引けば、現有船腹は千八百萬トンとなるわけであるが、實際に貨物輸送に當ることが出來る船腹は、右のうちから更に軍用船とか沿岸用小型船とかの如き、外國貿易に從事出來ない船腹を差引かねばならないから、結

局はせいぜいで九百萬トン程度に過ぎないであらう。
そこで一方、イギリスでは歐洲大陸の封鎖とスエズの通過困難に伴ひ、その配船はカナダ、北米、南米、南阿を迂回しなければならぬ結果となつた。これによる輸送距離が二倍に延長されれば、とりも直さず船腹が半減したことを意味するものである。
さきの船腹事情と輸送距離の延長とから、ここにイギリスの物資輸入量を概算してみれば、九百萬トンの現有船は重量トンに換算して、大體總トン數の一・五倍なる千三百五十萬重量トンとなり、この重量トンの一割引即ち千二百十五萬トンが貨物輸送能力（載貨重量トン）であり、三航海半（普通は一年に三回半を回轉率とする）として三・五を乘ずれば四千二百五十二萬となり、それで大體現在のイギリス輸送能力は四千五百萬トン以下と見るのが至當であらう。
そこで問題は、要輸入量と輸入能力との差額がどこまで、その幅を擴げた時にイギリスが參るかであつて、即ち通商破壞戰の前途こそ刮目に値するものであらう。

英米の造船能力　更にイギリスの造船能力について、最近數年の推移を見れば（單位萬トン）

昭和十一年	八五
十二年	九二

十三年　　　　一〇三
十四年　　　　約六〇
十五年（進水豫定）　一二五

であるが、まづ百萬トンと推算される。

このやうな船腹事情にあるイギリスにとつて、唯一の賴みの米國現有船は、戰前保有航洋船約一千萬トン（前記昭和十四年の調査と同じ）のうち既に二百數十萬トンを失ひ、現在深刻なる船腹飢饉に喘いでゐる狀態である。

そのアメリカの造船能力は（單位萬トン）

昭和十四年　　二四
十五年　　四四
十六年　　約一〇〇

であつて、たとへ尨大な造船計畫を立てたにしても、實際の可能性は二百萬トン程度に過ぎないであらう。

かくして米英合計三百萬トン（これを、かなり小さく見る人もある）の造船能力は、月に百萬ト

ンを喪失させられる日獨伊樞軸の通商破壞攻戰の前には、焼石に水でしかあり得ないことは必定である。

アメリカは現在、軍艦、商船、軍需品その他で巨額を支出してゐるが、これは紙上の計畫ばかりでなく、その幾分は實現してゐるとしても、太平洋、大西洋の藻屑をこしらへてゐるに過ぎない。しかも、その紙上計畫では、今明年度に二千三百萬トンの新船を建造することになつてゐるが、事實は昨年中に百八萬トンしか建造してゐない。チャーチルの狼狽知るべきである。

「イギリスはもう駄目だ」　それ故にこそ、かつては大東亞戰の直前、シンガポールにありてＡＢＣＤ包圍陣の結成に暗躍した、ランカスター公領相ダフ・クーパがラジオ放送で、かう述べてゐる。

「イギリス帝國は八方危險にさらされてゐる。國民は敵の攻撃がしば〳〵勝利を得るのを不思議に思つてゐる。しかしその理由發見のために王立委員會を作る必要などは全くない。歐洲、アジヤ、アフリカの英帝國領土を同時に防衞するには、現在のものよりも三倍の英海軍と十倍の英空軍を必要とするのだ。しかし殘念ながら、英國民はかゝる大兵力を保持してゐないのを悲しむ」

と本音を吐いてゐる。

「イギリスはもう駄目だ」といふ悲觀的な敗戰主戰言論が、英國民への警告といふ形式をとつて、英國内部より頻々として現れつゝあるのは注目すべきことである。イギリスの合言葉「フォア・アワー・ヴイクトリ（われらの勝利のために）」を、首相の議場における演說、將軍、提督の訓示から、女中や子供をたしなめるのにも、皆が申し合せたやうにこの言葉で結んでをり、また挨拶代りに用ひられるほど、イギリスは戰爭に勝つことに夢中になつてをりながら、はかない夢でしかないことに諦めねばならない始末である。

そして、私がいひたいことを、しかもイギリスでの有力な政治雜誌「エンパイヤ・レビュー」が左の如く代辯してくれてゐることは、甚だ痛快とするところである。さすがに强がりで僞裝してゐるチャーチル首相も、その脚下の國民からあいそをつかされたのでは內心苦しんでゐることであらう。それは、

「英國はもはや他國民の保護者であるかの如く行動すべきではない。何故なれば、英國は權威を失墜してしまつてゐるのだから、かゝる行動をとれば物笑ひになるからである。實際上から見て、この戰爭の遂行にはワシントンの指導に從ふべきである。もし英國が根本的にその政治方針を變更せざれば、英國は今次大戰と共に崩壞しはじめるであらう。英國が勝つてゐるのなら、かゝる考へ

方は悲觀的であらうが、英國は現に次から次へと領土を失ひつゝあり、また樞軸國に對する聯合國の指導權も、英國國防も、皆ワシントンへ移りつゝあるからである」

といふ。

これは米國の優位性を承認し、老英國の末路を悲しんでゐるのだが、しかし日本は、その米國の優位性さへ更に認めないのだから、これこそ眞に無敵、無雙なることを證據立てゝゐるわけである。

制海權の限度　いかに空軍の威力が躍進した今日といへども、制海權の價値は少しも低下するものではない。事實、マレー作戰における敵の死傷者、俘虜の合計が、開戰當時に半島にあつた兵數とほゞ一致するといふのは、マレー沖海戰において英國東洋艦隊が擊滅され、英國がインド洋以東の制海權を去つたがためである。即ち海峽植民地總督が、援軍來らず賴むは神のみ、と嘆聲を發したのであつた。

一昨年夏、フランス崩壞の直後、今にもドイツ軍が侵入して來るかと全英國民が怯えてゐた際に、もし英國海岸のイギリス海峽支配が二十四時間だけ崩れたら、どうなつたであらうと、米國の一軍事評論家が書いてゐる。

だから、たとへ弱小になつたとはいへ英海軍がまだ存在する以上、また通商船舶が殘つてゐる以

上、或る限度までは保つことが出來るであらうが、それは時間の問題に過ぎない。もつとも、アメリカに過分の依存をかけてゐるから、まだいくらか腰が强いとはいへ、これとてやはり程度の問題で、太平洋における日本、大西洋における獨伊の活潑な躍動によつて、アメリカが武器輸送などのために犧牲を多く出せば、手加減することになるは必定、さうなればイギリスは國內の食料缺乏と共に國防不備から、自ら破滅に至るは當然の結果である。

ドイツ空軍が、イギリス本土爆擊を一日の延べ機數二百機でもつて、何ケ月も連續して襲つたのだが、遂に手を擧げさせることは出來なかつた。

空軍だけで手を擧げさせたためしは、どこの國でもまだ聞いたことがない。それには陸軍を連絡させねばならない。この陸軍の後方連絡線の確保は海軍の制海によることはいふまでもない。

そこで、かういふことがいへる。ドイツではイギリスの船艦の力を弱めるだけ弱めておいて、そして一擧に陸軍上陸作戰に出ようとするのであらう。ドイツでは一日でも遲いだけ、それだけ犧牲を少く効果を大にして、攻略しようとする肚に違ひない。

つまり、イギリスの制海權を奪へば、第一に困つて來るのは食料、第二に武器がアメリカから來なくなる。これがためにはアメリカの輸送船を獨伊が擊たねばならない。そして弱劣を示しかけた

とき上陸策戰に出て攻略するといふのが、極く常識的な方法であらう。

しかしイギリスといへども、これまでの歷史もあり、また强大國を誇つた手前、最後まで頑張れるだけ頑張りもしようし、あらゆる老獪な外交手段を弄してまで、その補强策を講ずるであらう。

それ故に、イギリスを沒落させるには、加速度的に攻擊の手を加へて、專ら制海權を縮少し、これを奪つて孤立せしめ、そしてじり貧に陷らせて行けば、即ち食糧と國防資源とに困つて來れば、自壞作用を起すに至るであらう。

この自壞作用を早めたものは、いふまでもなくわが帝國海軍の威力によるもので、やがては獨伊軍のスエズ、コーカサス方面の作戰が順調に進展して、日、獨、伊がインド洋で手を握ることになれば、イギリスの海洋支配は全く喪失して、ここに崩壞することは明々白々である。

イギリスの老獪　それがために、イギリスは制海權の失ふことを恐れ且つ焦つて、アメリカを利用するのに汲々としてゐることが、珊瑚海海戰において如實に示してゐる。即ち大本營海軍報道部課長、平出英夫大佐の報告放送の中に、

「ここで興味のあるのは、珊瑚海海戰における米英艦隊の作戰行動を日本側として比較研究すると、實に面白い差異のあることとである。それは海戰にまで、その國民性が現れてゐるといふことで

あつて、英國艦隊は英國民の老獪さを遺憾なく發揮し、米國艦隊をお先棒に利用して、自分はなるべく危險を避ける行動をとつてゐる。例へば米國のカリフォルニヤ型が撃沈されて英國のウォスパイトが大損傷のまゝ逃げ失せてゐるのも、また濠洲側の飛行機が殆ど協力してゐないのもその明白な證據である。

一方米國側は、英國に比べると、お人よしとでもいふか、英國におだてられて、わが鋭鋒の正面に出て來て、一生懸命になつて、力闘してひどい目に遭つてゐるのがはつきりと見られるのである。殊に航空母艦機の搭乘員は、相當勇敢に闘つたやうだが、航空部隊指揮官の愚鈍はどうすることも出來ず、みすみすやり損つて大敗を喫してゐるのが明瞭に現れてゐる」

とある。

これによりても、三百年の榮華の夢を貪つた大英帝國は過去の歷史に過ぎないものであつて、曾つての日英同盟破棄の首唱者の一人であるチャーチルが、シンガポールの陥落は日本國民の恨みによるのであらうと述懷したといふが、既に遲しである。

チャーチルの惱み　このチャーチル首相の圖太さには、少々あきれる。一九四一年、ギリシャで大敗した際は、自ら信任を議會に問ふて、四四七對三で大勝し、シンガポール陥落の際には、東

亞を手薄にしたからだと辯明して、自ら信任を議會に問ひ、四六〇の全會一致で大勝した。次にはこの七月一日、二日に亘つて、北阿敗戰は司令官リッチーの責に歸して、不信任案を四七五對二五で大勝した。もつとも下院に三百七十名を占める保守黨が反チャーチルにならない以上、チャーチル内閣は存續し、ますます樞軸國側のために窮地に追ひ込まれるであらうが、結局、イギリスは行くところまで行くより外に途はないであらう。

それにもう一ついひたいことがある。チャーチルが昨年八月、プリンス・オブ・ウエールズ艦上でルーズヴエルトと會談した頃は、まだ日本を威嚇すれば戰爭にはなるまいと、强がつてゐたから英國は、表面上では米國と對等のやうな地歩を占めてゐた。

ところが、大東亞戰爭の勃發で、イギリスは太平洋、インド洋における廣大な領土をアメリカに保管して貰はねばならなくなつた。たゞしアメリカ海軍力といへども、眞珠灣の大打擊以來、賴み甲斐がなくなつたとは知りながら、イギリスの弱り方が一層甚だしいから、チャーチルはルーズヴエルトには頭が上らないわけである。

これに反し、獨伊兩巨頭の會談は、いつも双方で國境に出掛けるが、ルーズヴエルトは昨年十二月も今年六月も、チャーチルをワシントンに呼びつけてゐる。これが賴むものと賴まれるものとの

立場であらう。

第八章　アメリカ如きはわが敵に非ず

一、アメリカの軍人氣質

現地報告二つ　火野葦平氏の現地報告の中に、左の如き一節がある。

「こんなに多くの敵兵がゐて、しかも精鋭な兵器を擁しながら、何故に戰はうとしないのか。それは日本の兵隊である私には如何にしても諒解出來にくいことであつた。米比軍にとつては戰爭も一種のスポーツであるが如く思はれる。やれるだけやつて勝負がつけばケロリとしてゐる。彼には死を以て死に對するといふ眞劍な氣持はなく、常に自分の生命の方だけは安全であることを考へてゐる。

われわれの部隊が突擊すると、彼等は最後まで機關銃を打ち、眼前に來たわれわれの兵隊を支へて置いてから手を擧げて捕虜になる。終りまで抵抗すれば命も危いので、投降しさへすれば命は安全だといふ虫のよい考へ方である。彼等は兵隊としての誇りなどは全く持つてゐないのだ。捕虜になつた彼等のきまつていふことは、いつ捕虜放置になるかといふことである。將校などでも捕虜になると吞氣なもので、冗談をたたいたり、お世辭をいつたり、ニコ／＼笑つたりしてゐる。

マリベレスの街に入つた時には十五、六名の敵將校團が、私達の宿營してゐるところに來た。米

國人で大佐や中佐などもゐた。その大佐が日本語を敎へてこれといふ。何を聞くかと思ふと「水を下さい、御飯を下さい」といふ日本語を習つておきたいといふのであつた。そのシヤア〳〵した様子を見て、唾をかけてやりたい氣がした」

また、このやうな一節もある。

「をかしかつたのは米國兵とフイリツピン兵との關係で、米比軍はもとより米兵がこれを指導し、幹部の大部分は米國教官であつたらしいが、一様に投降して捕虜になつて見ると、彼等はまるで他人同士である。すでに第一線はフイリツピン兵ばかりだつたし、米國兵は後方にばかり行つて盛んに督戰してゐた。また糧秣などの補充は十分でなく、フイリツピン兵は殆ど食ふや食はずにゐるのに、米國兵は十分食物をとつてゐたし、給料なども同階級にゐて米國兵とフイリツピン兵とでは格段の差があつて、フイリツピン兵の間では相當の不滿があつたらしいが、それは内部的なもので、計畫的な叛亂の起るといふやうなことはなかつた。

私は炎熱の街頭で、興味の深い光景に接した。多くの米比兵の投降者が列をなしてやつて來たが、水道の傍らに來ると水を飲むために、彼等はそれ〳〵水筒をぶら下げて一列に並んだ。その列にはフイリツピン兵とアメリカ兵がまじつてゐたが、その内のアメリカ兵の誰もがフイリツピン兵を後

廻しにしようとはしなかつた。

まだ彼等が投降しない前はアメリカ、フイリツピン軍の中にはすべてアメリカ兵が何でも優先權を握り、フイリツピン兵は酷使されて後廻しにされてゐたのだ。ところが今、敗北の軍隊となると共に、彼等は平等になつた。米兵の中には將校もゐたが、自分の前にゐる兵卒のフイリツピン兵をのけようともせず、おとなしく順番を待つてゐた。否、却つてさういふ時にはフイリツピン兵の優越を認めてゐるやうにさへ見えた。それは彼等が無意識の中に、日本軍とフイリツピン軍とは同じ東洋民族であるといふことを自覺してゐたのかも知れない。

フイリツピン兵の捕虜は、米兵の捕虜を恨めしげに睨んだ。フイリツピン兵は多く憔悴して瘦せ細り、米兵は血色がよかつた。捕虜收容所にあつてもフイリツピン兵は疲勞困憊のはてに、日に數名宛仆れて行つたが、米兵は倒れることもなかつた」

この腐つた軍人精神を示すものに、左記の如き事實がある。

コレヒドール要塞の施設　バタアン半島は科學の要塞であり、コレヒドール要塞はその典型であるだけに、地形を恃み巧みに施設されてあつた。それは全部コンクリートで固められ、その厚さが約十二インチといふのだから、わが空爆、砲撃に長い間もちこたへた頑强さが判る。そして飛行

場と各要塞との間には地下輕便電車で連絡をとるやうになつてをり、各要塞の中央地下室がコレヒドール要塞司令官の官舍になつてゐる。その中の事務室には多數のボタンがあつて、そのボタン一つで各要塞に命令が下せるやうな仕組になつてゐる。

わが軍に降つたこのコレヒドール米比軍司令官中將ウエーンライトに代つて副官少佐トマス・ドウシーは「今度こそ日本軍の威力が腹の底にしみた、日本軍は不可能といふ文字を知らない軍隊だ。米比軍の中には日本軍の攻擊が餘り凄いため氣が狂つたものも數知れずあつた」と皇軍の威力に驚嘆したのである。

このコレヒドールの陷落によつて、最後の根城を失つたアメリカ陸軍當局では「米比軍は既に食糧を食ひ盡し彈丸も射ち盡して初めて降伏したのである」と公表して、あだかも刀折れ矢盡きるまで頑强に交戰したかのやうに宣傳し、またコレヒドール島要塞の米比軍は陸海軍合せて約六千五百であると稱し、敗將ウエーンライト以下自國軍を英雄化して奮戰振りを稱讃したものであつた。

わが戰果によりて暴露　ところが、わが大本營發表の綜合戰果によつて、この米比軍のデマ宣傳が全く暴露されてしまつた。卽ちコレヒドール島及びマニラ灣口比島要塞攻略作戰において、

（一）俘虜　一萬二千四百九十五（大部分はアメリカ兵）

遺棄死體　六百四十

（二）鹵獲品

（1）大砲　二百四十六門
（2）重輕機及び自動銃　六百八十五
（3）小銃、拳銃　五千二百二十
（4）自動車類　二百七十
（5）飛行機　八
（6）砲彈　十萬三千發
（7）機關銃彈　八十九萬發
（8）糧食　少くとも一萬人に對する二ケ月分

といふ戰果を收めたのである。

これを見ても、彈丸はあり、食糧はあり、兵力はありながら、戰ふ意志がなかつたことが明白である。

このことはシンガポール要塞の陷落におけるイギリス軍と同樣である。また前に述べた如く珊瑚

海海戰にありても、米艦隊を前線の戰鬪に立たせて英艦は背後に逃げ込んで、その難を避けるといふ不誠意ぶりであつた。もう一つは、これもイギリス軍であるが、蔣介石軍はビルマの英印軍と協同作戰に進出したが、そのイギリス軍の誠意のないのを知つて、遂にビルマ遠征軍の總引揚げを命ずるに至つたといふことである。

わがマレー方面軍參謀談として、

「一番强いのは支那兵、これは噓や掛値はない。その次がソ聯兵、次がイギリス本國兵、濠洲兵、印度兵といふ順序である。將來の大戰爭を考へる時、同じ東洋民族である支那が一番强いといふことは一つの示唆になると思ふ」

とあるが、これにはアメリカ兵のことがない。しかしイギリス本國兵と同じ順位のものであらう。

機械の奴隷　即ち反樞軸國の米英は、第一に生命の安全が保證されなければ更に戰意がない、もしそれが危險に曝されゝば、忽ち降伏して、おのが生命の保全に汲々とする。その危險に曝されるといふことは、武器の機械力を發揮することが出來る最大限度の範圍を指すのであつて、少しでも機械の威力を發揮する餘地が縮少されゝば、直ちに生命の危險を感じて手を擧げてしまふ。

つまり、機械の奴隷になり果てたのが、強大國を誇つた米、或は英の軍人氣質である。

戰爭に生命の安全を望むやうでは、戰爭が出來るものではない。それでゐてヤンキー魂といふか、何事でも世界一のレコードホルダーになるのを名譽として、懸賞附きならば、かなり冒險的なことさへやつてのける。けれどもいざ戰爭となれば、このヤンキー魂は更に役に立たない始末である。

士氣を金で釣る　アメリカでは海軍志願兵を募集するのに、世界見物が無料で出來るといふ宣傳で釣らうとするのでも、アメリカ軍人の氣質を窺へるのだが、珊瑚海海戰、ミツドウエー島海戰など相次ぐ敗戰にくさり、何とかして士氣を挽回せんものと思案の末、この六月二十二日、米上院では潜水艦勤務の士官に對し二割五分の加俸案が可決した。また海水潜水夫に對しても特に困難な仕事、または海底九十フイート以上に潜水するものには一時間五ドルの割で手當を支給することになつたといふ。また七月一日以降實施することになつた增給法案によれば、應召兵の俸給は月額二十一ドルから五十ドルへと二倍以上にはね上り、海外勤務には俸給の二割の手當、最下級士官の年俸千八百ドルになるといふ有樣である。また休むことになつてゐる日曜日に、特に勤務する將兵には平常日の倍額を支給するといふ、われわれから見れば滑稽にしか思へないことが、アメリカでは眞劍になつて、これで士氣を鼓舞しようとするのだが、さて「金が欲しいが命も惜しい」の個人主

義に錬成されたアメリカ軍人では、甚だもつて心細い限りではある。

二、アメリカの資材饑饉

戰前のアメリカ商船隊は、いはゆる持てる國としては相應しくない貧弱なものであつた。さきに記した船舶數のうちには、航洋船（外國向と國內向）、タンカー（石油運送船）、官有船、河用船などを含むのだが、しかもそのうちの二割以上は老朽船といふ有樣であつた。從つて外國航洋船は、殆どイギリス船に負ふところが多く、自國の船舶だけでは海上輸送を賄ふことが不可能であつた。それが、樞軸國側のためにどしどし撃破されるので、これを補ふにも造船能力が及ばないといふ苦窮に惱んでゐる實情は、前に記した通りである。

しかも米英ともに、造船の基本材料なるマンガン及びボーキサイドの大部分を、これまで輸入に仰いでゐたのが、今次の戰爭で停止するに至つたため大支障を來してゐる始末である。

紙上計畫 ルーズヴエルトの紙上計畫によれば、本年度內に飛行機六萬、戰車四萬五千、對空火器二萬を、來年度においては飛行機十二萬五千、戰車六萬五千、對空火器三萬五千を製造するといふのだが、その原料資材や勞力（殊に熟練勞働力）に著しい不足を生ずるだけでなく、造船所は

潜水艦及び補助艦艇の建造、破損艦艇の修繕などで手一杯だから、軍備計畫といひ、また造船計畫といひたゞ數字の机上計算に過ぎないのである。

それに最近の報道によれば、相次ぐ慘敗に狼狽せるアメリカ政府では、空軍戰鬪力の强化擴充に主力を注ぐために、航空母艦の建造につとめ、新戰艦（六萬トン級大型戰艦五隻）の建造準備を中止することにしたといふ。

資材の不足は、單に金屬類に止まらず、皇軍の南太平洋制覇によつてゴム、錫、その他重要なる補助資源が不足するため、今年度の計畫はその四分の一、來年度においてはその十分の一も實現出來ないだらうと見られてゐる。

ゴム　戰前のアメリカは世界第一のゴム消費國で、年々六十萬トンのゴムを消費してゐたもので、その國内消費の九割五分まではマレー及び蘭印から供給してゐたのが、大東亞戰爭勃發により全然それを得られなくなつた結果、政府は新らしいゴム製品のストック全部を、當局の許可がなくては賣ることを禁じてしまつたのである。

このゴム不足は自動車工業に大きな影響を與へ、乘用車及びトラックの小賣販賣は禁止され、それから民需用自動車の生産は全く停止し、最近では民間自動車のタイヤを徴用することになつたの

である。

それ故に、議會では合成ゴムを無制限に製造せよと提議するものが出て來た。この合成ゴムといふのが甚だ疑はしい代物であつて、ルーズヴエルトが新聞記者團との會見で、ゴムの代用品が發見されたといつたのは、穀物からとつたアルコールに化學變化を與へて合成ゴムを製造するものであると說明したといふ。またスタンダード石油會社では、ガソリンからゴムを製造する方法を發表したと傳へられてゐるが、何れにせよ、專門家はこの種の合成ゴム製法の實際化には疑問を持つてをり、今後二年や三年經たなければ合成ゴムの大量製產は不可能であらうと見てゐる。

錫 錫の不足にもアメリカでは弱り拔いてゐる。每年平均十萬トンの錫を消費してゐたが、その中の四十五パーセントは罐詰の生產に當てられてゐた。ところが皇軍のマレー半島戡定により、全然その錫の輸入が杜絕した結果、急に南米のボリヴイヤに錫の供給を求めてゐるが、肝心の錫の製錬工場がないために困つてゐるといふことである。

砂糖 砂糖であるが、これにはアメリカに深刻な影響を與へてゐる。比島及び東インドから供給してゐたのが忽ち斷たれてしまつたため、平時でさへ國內の砂糖生產は全需要の三分の一しかなかつたのに、戰爭による船腹不足からキユーバ糖の輸入さへも思ふやうに得られなくなつた始末で

ある。

それで早くも昨年十二月には砂糖卸賣相場に最高價格を定め、越えて今年の一月には一人一週一ポンド（四百五十グラム）の消費割當制を實施した。それでも及ばないので三月に入ると、四月分卸賣砂糖割當の大削減を行ふことになつた。そして四月二十七日より一週間砂糖を販賣し、それ以後は切符制を採用することになつた。

「持てる國」を誇つてゐたアメリカにも、生活必需品の切符制は遂に砂糖において始めたわけである。これによる一般民衆の不滿はいふまでもない。

生糸　また日本の生糸が輸入杜絶によつて絹靴下がなくなり、これに代つてナイロンが登場したが、落下傘用の纖維不足でこのナイロンも軍需用に優先されることになつて、四月一日以降は靴下が全部人絹といふことになつた。また洋服の仕立、寸法に制限がつけられたり、あらゆる點で大東亞戰爭による影響は甚大なものである。

石油　ところが、アメリカでは資源不足で惱んでゐるのは、ひとり東亞における資源だけでなく、自國で生産するものにまで及んでゐる狀態である。その代表的なものは石油である。

それは石油の生産が減少したからではなく、油槽船の擊沈による不足のため、輸送の不圓滑に基

づくのである。米國船舶協會の發表によると、昨年十月末の油槽船は三百五十隻、二百六十萬トンであつたのが、その後、日、獨、伊の樞軸國側の潜水艦の活動によつてその五分の一を失ひ、ために石油の輸送力は平時の五十五パーセント、卽ち約半分に減つたのである。

この油槽船の喪失が增大したため、アメリカ東部地方では頗る石油不足に惱み、最近に至つては遂にガソリンの割當制を實施することになつた。一週一臺につき二ガロン乃至五ガロンと定めたのだが、一方、自動車の減少と相俟つて交通に影響を生じてゐる。それに勤人や勞務者は、遠い郊外に住宅を持つてゐるので、足をとられたため能率が上がらなくなつたといふことである。

銅と鋼　ガソリンは原料の不足ではなくて油槽船の不足であるが、その油槽船の不足はつまり鋼の不足といふことに歸着する。元來、アメリカには銑鐵はあるが鋼が不足であり、といつて新設工場も急場の役には立たない。

銅も不足なので、銅の代用品として盛に銀を使用して、機械の部分品などに用ひてゐるといふことである。

本音を吐く　されば、民主主義國の兵器廠を誇稱してゐたアメリカも、參戰と同時に軍備の不足を暴露して醜態を極めてゐるが、この六月十五日の米下院において、ルーズヴェルト大統領は戰

爭資材獲得の困難なる旨を訴へて、左の如く演說した。
「武器貸與はもはや一方的なものではなくなつた。アメリカは多量の資材を同盟國に送つたが、これと同時に同盟國から多量の物資を仰いでゐる。なほアメリカの工場では、イギリスで製作された工作機械を使用してゐるが、更に海外から多量の原料資材を仰がねばならない」
と申譯的な說明をした最後に「アメリカの海岸は外國製の大砲によつて防禦されてゐる」と本音を吐かざるを得なくなつたのである。

三、アメリカの經濟惡化

曾ては米英兩國が、その尨大なる經濟力に物をいはせて世界を支配してゐたところの、その根底である重要資源の原產地を、わが日本の戡定することによつて、逆に米英國に對し經濟封鎖をし、そして經濟的混亂を招來させただけでなく、當面の戰爭における大なる消耗に支障を與へてをるのである。
ルーズヴエルトの考へでは、アメリカが經濟的に壓迫すれば日本は起ち上ることはないといふ見方から、戰爭をする氣持は全然なかつた。從つて物の戰爭だけで濟ますつもりだつたのが、日本が

起ち上つたために俄に動員もせねばならず、それに少しも準備がないので、急に計畫を始めて每日々々新しいプランが無力な議會によりて承認されて行く始末である。

「金さへあれば」　とかくアメリカ人の氣持は、金さへ出せば何でもすむと思つてゐる簡單なものだつた。成程平時でなら金で飛行機や戰車は造れるし、またその資源も勞力も容易であらうが、戰時におけるアメリカでは、それがすべて不可能になり、また第一に組織といふものがなければならない。そこでルーズヴエルトは應急處知で何とかしようと、その都度何々委員會といふものを開いてはゐるが、結局委員會倒れになつてしまふ有樣である。

ために、今や「金さへあれば」のインフレが議會や經濟界の最大問題となつてゐるが、物價は每日鰻昇りである。ミルクが十四パーセント、ベーコンが七十パーセント、バターが二十七パーセント、纖維類が二十三パーセント、平均して三十から四十パーセントの上昇ぶりである。

既に惡性インフレの徵候が見えて來たのに、さきに述べた如き生活必需品の物價停止令をもつて最高價格は去る三月中の最高値を釘付けしたのである。これは今日までにインフレ抑制のための米國政府が實行した唯一の措置である。

反戰氣勢を昂める　だが、こんな不完全なものでは決してインフレを抑制され得るものではな

く、ますます國民をして不安をいだかしむるのに役立つだけであらう。その結果はルーズヴエルトがアメリカ國民の怨嗟の的となり、ひいては反戰氣勢を昂めるといふ、アメリカ全土の國民をしてまつしぐらに戰爭目的に向はせようとする希望と、正反對の効果を生むことになるであらう。

これを如實に示す例をあげるとしよう。

株界の反應　昭和十七年五月末のニユーヨーク株式取引所は、アメリカ始まつて以來の崩落を演じ、國債の急落はもとより、工業株は最近七年間の最低値を更に割り、スチール株、鐵道株、事業株なども支那事變勃發當時に比較して五割程度の暴落を示し、なほ落潮をつゞける模樣である、と外電は報じてゐる。

これが原因は何かといへば、アメリカにおける物資不足のための人心不安が株界に反應して、その人氣ががた落ちを呈したものである。

しかし、われわれは物資の豐富潤澤をもつて世界に誇つて來たアメリカが、ニユーヨーク株式未曾有の崩落を來たすまでに、物資が缺乏を告げてゐるとは一應信じられないやうに思へる。だが、これを委しく檢討すれば、かゝる先行の不安もあながち行き過ぎとだけでは、片づけられない經濟的な破綻を見ることができる。

無計畫な戰時體制　それは前にも述べた如く、アメリカが急に、戰時經濟に再編成しなければならない立場に直面したために、盲目的に無計畫なる戰時經濟機構を立てたからである。

こゝにいふまでもないことだが現代の戰爭は、國家總力戰でなければならぬ。戰爭における最後の勝利者たらんとするには、國家と國民とが完全に一體となつて、迅速に且つ强固に、しかも持續的に最後まで總力態勢を保つことによりて定まるのである。これがためには、初め平時段階から準戰段階、準戰段階から臨戰段階へと移行してこそ、國民の總力が發揮されるに至るものだが、これをアメリカでは、一擧に臨戰段階に入り、しかもその國民性とはかけ離れたところの擧國一致などとは思ひもよらないことであらう。

とにかく米國政府當局は躍氣になつて戰時經濟の保全に努力してゐるが、何分にも自由主義と民主主義と、そして物質生活の向上とを建前としてきたアメリカが、今急にルーズヴェルトの希望するやうな國防國家に編成替へすることは困難といはねばならない。

經濟上の獨裁權　それ故に、國內態勢を統一せねば戰爭は不可能であるといふことはアメリカでも痛感したと見えて、議員が產業獨裁權といふ重大な權限をルーズヴェルトに與へたのである。これによつて全產業に、全國民生活に、戰爭體制へと切替へを呼びかけて、日獨伊擊滅のために一

路邁進しようとするのが、彼の目的のすべてゞあらう。

巨大な戰費　即ち「持てる國」を誇示するアメリカの經濟力をもつて、直ちに軍事力を即斷することは大きな誤りである。その戰費をやたらに發表するが、前に「アメリカの國防費」のところで述べたやうに巨額を計上してゐる。しかも政府の發表によれば、アメリカの戰費は前にも述べたが現在一日平均一億三千萬ドル、本年末までには二千億ドルに達するものと見られる。もし金でもつて勝利が購へるものなら、アメリカは確實に世界最强の國家といへるであらう。

しかし問題は、巨額の豫算を如何に消化し、また如何に物資を調節して、軍備を充實することが出來るかであり、同時にこの豫算がもたらす國民生活への壓迫、不安を如何にして出來る限り最小限度に止め得られるかである。これによつて見れば、アメリカ明年度の軍事費は、その國民所得の五十五パーセント强に當るといふ。いづれにしても、たゞ勝ち拔かうとして戰費をばらまくだけの能で、やがては自ら苦しむのがおちであらう。

增稅と物價騰貴　しかしアメリカが、平和から急に戰爭に突入した事情から見て、ここに大きな變調がアメリカ國民の生活に及んだことはいふまでもない。それは第一に增稅であり、第二に物價騰貴の問題である。

今年三月三日發表の大增税案によれば、所得税は平均六割の增税、消費税も大幅の增税となるので、これが國民生活に影響することは深刻なものに違ひない。勞働省の發表では、生活費指數が昨年二月一〇〇・九が、本年二月には既に一一二・六に上つてゐるのであるから、（しかし事實は、前記のやうにもつと上つてゐるが）とにかく定額所得者は相當脅威を感ずることになる。

しかし問題は、一般物價の水準に重大なる關係を有するところの農産物の價格如何である。これをアメリカ準銀調査の農産物價格指數によれば、一九三九年の獨英開戰以來本年度までに、農産物は實に六十五パーセントの大幅の上騰を示し、そのうち四十九パーセントがここ一年間における騰貴となつて現れてゐるのである。この農村インフレの數量は、當然一般物價へ波及し、ひいては國民生活を脅威することになる。

「ルーズヴエルト式生活設計」　ここにおいてルーズヴエルト大統領は、過般、議會に特別教書を送り、國民生活規正を强調したのである。いはゆる「ルーズヴエルト式生活設計」或は「ル大統領のインフレ防止教書」などと名づけられてゐるものである。

彼はその要旨として

「われわれの少數の敵は緒戰におけるあらゆる利益を占めてをり、われわれは兵力及び軍需品に

闘して形勢を確立するまでの期間は、辛い敗北や重大な損失を堪へ忍んで行かねばならぬ」

とて、アメリカが大東亞緒戰においてあらゆる利益の喪失したことを確認し、更に、

「眞珠灣事件の後、アメリカが採用した全國的軍需生産計畫を、もし二年以前に提案されたとしたならば、大多數の人々によつて否定されるに違ひないほど大規模なものである。この尨大なる計畫は、産業、勞働、農業及び金融の各般に互り編成替を來すことは必然であり、且つ國民一人々々及び各家庭の日常生活用式を破壞すべく、しかもそれが現在及び將來に互つて續くことを覺悟せねばならぬ」

とアメリカの國民の前途やうやく多難なることを示唆し、そして

「今次戰爭では生活費の昂騰は、前大戰當時の昂騰と同樣上昇を示してゐる」

とて、われわれは生活費を充分に切詰めねばインフレの招來することを苦にしてゐる。

「生活費は現在、一九三九年秋以來一割五分の昂騰を示してゐるが、（これも前記のやうに、もつと昂騰してゐるが）、これを今後二年の間に八割、九割と暴騰することを阻止せねばならない。一週間毎に、一ケ月毎に上昇しては、月給袋は小賣物價の昂騰に追ひつかず、國民は全體としてだんだん貧乏になるばかりである。もし物價が昂騰すれば戰爭は何十億といふ風に上騰するであらう」

と解説し、これが對策として、次の諸點を根本原則として決定したのである。

一、重稅方針――まづ重稅を課すること、その方法として個人及び會社の利益を合理的な率に維持しなければならぬ。

二、最高價格の決定――消費者、製造業者、卸賣業者などが買入れる物資の價格に最高限を設定すると共に、全國に亙つて地代、家賃にも同樣の限度を設定すること。

三、賃金固定――各個人がその勤勞に對して受ける報酬を安定せしめること。

四、農產物價固定――農民がその土地から生產する農作物に對する價格を安定せしめること。

五、戰時公債の奬勵――全アメリカの國民に對する生活必需品以外の購入はなるべく差控へ、經費を節約し、勝ち拔くための公債の購入に充てるやうに奬勵すること。

六、生活必要品切符制――不足せる必需品の全面的統制を實施し、購買力を有する富裕階級のみにこれら商品の流入するを抑へ、一般消費者へ平等に配給する機構を整備すること。

七、浮動購買力の吸收――掛賣及び月賦制度の阻止、金錢その他の債務返濟を勸告し、これによつて購買者の過剩購入を節約し、公債の購入に便ならしむること。

以上の七ケ條に要約される特別敎書の內容をもつて「余はこれら七つの方法が、いづれも生活費

の低減に多大の效果あることを廣く認められるものと確信する」と力んでゐる始末である。

立遲れたアメリカ　けれども、それは六菖十菊、既に遲しである。われに經濟封鎖をして開戰を餘儀なくさせながら、緒戰に立遲れたアメリカはすべての部門に立遲れたのであり、從つて國民經濟再編成にも立遲れたのである。

四、アメリカの弱點

現實性のない航空機の生産目標　さきに「立遲れたアメリカ」の理由を述べたが、この立遲れに對しても、あくまで自惚に强いアメリカでは、ル大統領のいふ「兵力及び軍需品に關して形勢を一變するに足るだけの優勢を確立する」だけの自信があるかのやうに見える。その希望をつないでゐる正體は、アメリカの航空機であり、航空工業である。アメリカ自身はもとより、濠洲も、ソ聯も、重慶も、イギリスも、今なほ絕大な期待をこれにかけてゐる。從つて「こゝ一、二年以内に世界最大の空中艦隊と世界最高の飛行機生産能力を獲得しなければならない」といふ要望が、最近とみに昂まつて來てゐる。

この要望に對してルーズヴエルトは、前記の如く今年一月六日に、飛行機の生産目標を今年度六

萬機（内戰鬪機四萬五千）を、明年度は十二萬五千機（内戰鬪機十萬機）と聲明したのであるが、勿論、紙上計畫でしかあり得ない理由が三つある。

その一は、わが南洋攻略によつて、飛行機に必要なる各種の資材、特にアルミニウム輕合金用の非鐵金屬と、ゴムの給源地の喪失による資材不足である。

その二は、徴兵の增加による一般の勞働力の低下と、そして軍需工業も進展する關係から、これが飛行機製作における必要勞働力の追加に困難な點である。

これらに原因して、その航空機の質と量、即ち大量製造による品質の低下である。

その三は、飛行基地の問題がある。

その四は、飛行士の素質に考へねばならないことである。

よし科學技術と資本力に物をいはせて、その大量製造を解決したとしても、基地を持たぬ陸軍機、母艦を失つた海軍機が、どれ程の威力を發揮することが出來るであらうか。更に飛行士を養成するに、にわか作りの粗製品でもつて、その訓練と精神を充分に敎育することが出來るであらうか。この二問題は矛盾だらけである。

かくの如く幾多の制約や矛盾を包藏しながら、徒らに聲を大にして國民の失つた士氣を振作すべ

く努めたとしても、ほらはいつしか剝げて却つて國民を失望のどん底に落ちこませるに役立つだけであらう。なほ詳しいことは第九章で述べるとしよう。

敗戰彌縫策　現在のアメリカ國民は、インフレの襲來と樞軸潜水艦の攻擊に四苦八苦の態である。だから、日本との敗戰を隱蔽して「日本と交戰しつゝ」だんだん窮地に追ひつめられてゐる事實を、虛僞の言葉でもつて歪曲した公報で一時は胡麻化し得ても、やがては眞相が暴露されて、一層國民の精神力を頹廢させることになるのである。そしてやがては盛返して見せる積りで、表面上だけでも餘裕綽々として勝算胸にありといふやうに裝ふてゐる。しかしいよいよわが身體に火のついたアリユーシヤン列島における敗戰に狼狽したルーズヴエルトは急遽、英、蘭、濠、重慶、ニユージーランド、カナダの太平洋方面反樞軸國の六代表をホワイト・ハウスに集めて、太平洋軍事會議を開催し、專ら各國代表の不安除去に努めたといふことである。

かと思ふと、メキシコが聯合國側に立つことになつた結果、アメリカは近く同國へも武器貸與法を適用することになるのだが、これだけではない、米政府は英、ソ聯並びに蔣政權に許容したと同樣の內容の武器貸與協定締結をポーランド、ベルギー、ギリシヤ三國の亡命政府に對しても實行することに決定したといふなど、外交政策に汲々としてゐる有樣である。

相手を利用する　第一に米英間の共同作戦がしつくり行つてゐるであらうか。大東亞戰爭勃發以來、わが皇軍の攻略によつてイギリスの太平洋における勢力は、次第にアメリカに移管されて行く始末である。例へば濠洲はマッカーサーの支配下にあり、ニュージーランドもアメリカの提督が頑張つてをり、カナダが母國を離れつゝあるなど、一口に方便とのみいへない點があらう。皮肉家のバーナード・ショーが「濠洲、ニュージーランドについていふならば、戰後は英帝國から離れて米國の保護下に入ることにならう」と喝破してゐるのも道理がある。

また前記の如くアメリカとソ聯との關係といひ、また重慶との關係といひ、一つとして心から許せる何ものかがあらうか。

これで見ても明らかなやうに、聯合國側の緊密性は、互に相手を利用し自己の利益を圖らうとする化し合ひに過ぎないのである。しかし日獨伊の緊密性は、世界新秩序なる最高目標の下に連繫したものであるから、いよいよ強固さが加はるばかりであることはいふまでもない。

アメリカを降伏させるには　そこで、アメリカに手を擧げさせる問題であるが、米國人の戰爭に對する氣持はゼロである、犧牲的精神などは藥にしたくもない、これでは精神的に戰爭に勝てよう道理がない。東亞の情勢は緒戰以來、國民には秘してゐるし、國民も遠い東亞のことだからとい

ふので直接關係がないと思つてゐる。またアリユーシヤン列島を皇軍に攻略されてもアメリカが大戰果を收めたやうに宣傳してゐるから、一般國民は安心し切つてゐる。

それに何しろ面積は七八四萬方キロもあり、人口は一億二七五〇萬あり、そして金はだぶついてゐるのだから、いかに戰時經濟で窮屈になつたとしても、この點だけで容易に沒落するものではなからう。しかしこのアメリカ全土の人口なる國民が、三十五の異人種の寄合世帶であるといふ點に弱味がある。そして黑色人種を引いた全人口の九割弱を占めるものは白色人種であつて、それは主として英國系のアングロサクソンである。それに同じ白色人種でも樞軸國側もあれば、反樞軸國側もある。またアメリカの原住者たるニグロ（アメリカ・インデイヤン）が、この機會に少しでも伸びようとすれば、忽ち第五列組織だといつて彈壓を加へてゐる。だから、樞軸の勝利を堂々と主張する新聞や雜誌などが九十五種もあるといふ狀態である。これなどは決して小なる事實として見逃せないものがあらう。

そこで沒落を速めるには直接、アメリカ本國へ敵前上陸をして攻略するよりほかに手がないであらう。さうなればアメリカ國民が初めてわが身に火のついたことを知つて、あわて出すに定まつてゐる。それにはニユーヨーク位を攻略しなければ、容易に手を擧げないであらう。われわれはホワ

イト・ハウスにおいて城下の盟をさせる覺悟がなければならぬ。それ故にこそ戰爭しつゝ建設し、建設しつゝ戰ひ拔いて百年戰爭を決心してかかることが肝要である。

ドイツ潛水艦は最近、カナダのセント・ローレンス灣やミシツピー河口に出沒して、米船を破壞してゐるが、もう一息であらう。やがて日獨伊が協力して、專ら米本土攻擊にかゝるとなれば、ワシントンを占領することなどは決して夢でないのである。それに、アメリカを空襲して一番効果的なのは、ロスアンゼルス市郊外の油田であらう。

第九章　樞軸國と聯合國の空軍

一、アメリカ航空工業の宣傳

空軍の威力　空軍は、戰爭の花形である。世界を擧げて、戰ひに暮れ、戰ひに明けて、樞軸軍は地球上に新らしい秩序の礎石を据ゑるべく、聯合軍に對して空爆がつゞけられてゐる。

空軍の威力については、今更語るまでもないが、最近、ドイツの軍事專門家は極めて興味ある研究を發表してゐる。それは空軍の特異性と存在性とを、最も的確に述べたものであつて、即ち

「空軍は、他のいづれの軍備よりも高價であるが、しかしいづれの軍備よりも、有効なものである」

といふのである。

この論者は、歐洲に戰爭の起らない以前の、まだ平和であつた一九三〇年（昭和五年）頃から、軍事豫算のうち、空軍は豫算の五十パーセントをその裝備に消費されてゐることを擧げてゐる。陸海軍では軍裝備の經費は、いづれも豫算の二十五乃至三十パーセントに過ぎないことを指摘して、いかに空軍が高價な性質であるかを示してゐる。

空軍裝備　しかも、その空軍裝備とは飛行機及び發動機に限られ、燃料や格納庫、工場、兵舎、

飛行場などの設備費を含まないのである。

海軍の建艦費、艤装費、陸軍の機械化に要する經費など、ちよつと考へると莫大なもののやうに思へるが、空軍のやうに機械の經費に豫算の半分も費すことはないのである。そこで論者は、航空用發動機を一〇〇とすれば、銃器六〇、砲類四〇、彈丸七、自動車用發動機四、蒸氣タービン三の割合になり、航空の裝備がいかに高價なものであるかを述べてゐる。

もつと實際的にいへば、フォード自動車用發動機の部分品は一千七百個から成立つてゐるが、新式航空發動機は一萬一千個から成立つてをり、そして一臺の爆撃機を作るには七萬個の部分品を要し、七、八千枚の製圖を作らねばならないといふことである。

この精密科學の最高峰にある空軍の裝備は、大量生產によることも比較的困難であり、よし大量生產されても原價の低減には不向きのものであるだけでなく、もつと大きな差異は、一隻作れば十年二十年の艦齡を保つ艦艇や、一通り裝備すれば二三年使へる戰車隊と違つて、航空機と發動機は、敵方に一臺でも味方より優れた高性能のものが出來れば、すぐに新鋭機と代換せねばならないことである。

だから、航空工業は常に流動するわけになる。まして戰爭といふ國を賭しての場合、その國の科

學智能を總動員して、常に新らしく、常に優れたものを追つて行かねばならないから、ますます經費を高めることになる。

世界の列强といはれる國々では、空軍において質的にも量的にも、いかに經費を要しても國防國家の建設に、その裝備の萬全を期せねばならない。

ところが、航空工業なるものは何も飛び離れた別個の工業ではなく、一般重工業、輕工業の完全な基礎の上に立つ綜合的なものなのである。

航空工業の國家的分類　イギリスの航空評論家は、

「大戰後（前歐洲大戰の後）に貧弱な航空兵力しか有しなかつたのに拘らず、巧みに既存してゐる他國の航空工業を攝取して、優秀な航空工業を自國に確立した偉大な國家が二つある。それは日本とソヴイエットである」

と驚嘆してゐるが、そこには寸時もゆるがせに出來ない國の力を表はしてゐるわけである。

國家の有する航空工業を分類して考へると、まづ三つになる。第一は、完全に航空工業を自國の力で所有してゐる國家、卽ち日、獨、伊と英、米、佛、ソ聯などがこれに屬する。第二は、小規模の國產航空工業を有するが、主に外國の設計、製作權に依存してゐる國、卽ち戰前のポーランド、

ベルギー。スペインなどがこれに屬する。第三は、全く國產力がなく、あつても物の數でないから、專ら外國製の輸入を仰いでゐる國、この最もよい例は蔣介石軍の支那である。

この意味から世界の空軍の現狀を見るに、空軍の貧弱な國は、どこかの强大な空軍を有する國のブロックに依存するより他に道のないことが知られる。

リンドバーグ大佐の報告書　ヨーロッパがダンチヒ問題で大戰前夜の苦悶をつゞけてゐた一九三八年八月、グライダーの先驅者オットー・リリエンタール氏記念の科學者會議に出席のため、ベルリンを訪問したアメリカ空軍の重鎭チャールス・エ・リンドバーグ大佐は、ドイツ政府の盛な歡迎を受け、ゲーリング空相の案内で各所の航空機工場を視察した。

彼はロンドンへ行くと、米國政府へあて次のやうな「報告書」を認め、ケネディ駐英米國大使に手交した。

「ドイツの航空界は最もよく裝備され、また世界最新銳である。量においても質においてもドイツに追從し得る國は、現在は一つとしてあるまい。もし現狀のまゝで行くならば兩三年のうちに、米空軍は存在の意義を失ふであらう。フランスは飛行士の素質はすばらしい上に訓練も行屆いてゐるが、飛行機の大部分は舊式で、その機數が甚だしく不足してゐる」

獨米空軍力の比較

これによつて英佛は空軍擴充に力を入れたものだが、肝心のアメリカでは殆どこれを默殺して顧みなかつた。ために一九四〇年七月現在では、ドイツが第二次世界大戰勃發後　年を經て一萬二千の軍用機と三萬の現役操縦士を擁してゐるのに、アメリカ空軍は陸海軍を合せて僅かに四千の軍用機と八千の操縦士があるに過ぎない有樣であつた。しかもドイツの航空工業は毎月三千機の生産力があるのに、アメリカはその六分の一に當る五百機なのであつた。

この一九四〇年七月におけるドイツとアメリカの空軍力の比較は、左の如くである。

	ドイツ	アメリカ
軍用機	12,000	4,000
操縦士	30,000	8,000
地上勤務員	304,500	52,000
高射砲	1,900	300
飛行機生産力（月額）	3,000	500

なほ、ドイツの飛行機生産力を、さきに「空軍の強味」で述べたやうに月額二千臺と見るものもある。

そこで俄に軍備擴張熱とドルの洪水に浮かされはじめて躍氣になつた。その生産目標は第八章の四に記したやうに、實現されさうにもない數量である。

勞働時間延長案の否決　だから七つの飛行機製作工場では、勞働時間を週四十時間の現在制から四十八時間へ、更に三直交代の七十二時間制へと、まるで物の怪につかれた熱病のやうに航空機工業のために夢中になつてゐる。

ところが、それで能率があがつたかといへば、さうはゆかないのがデモクラシーのアメリカである。といふのは右翼の勞働組合A・F・L（米國勞働總同盟）も左翼のC・I・O（産業別組織會議）も、それぞれ四百萬人の勞働者を擁して働く者の權益擁護と勞働の自由を叫んでゐる。この勞働側の壓力が政府にとつては深刻な惱みである。政府もこれには困り拔いたと見え政府の勞働調整機關たるN・L・B（米國勞働關係局）を新設して、勞働者の協力を要望し、勞働力の調整に努力をつゞけてゐるが、何にしても八百萬の組織勞働者はなかなか企圖する壺には嵌まつて來ない。

それどころか、この勞働時間延長法なるルーズヴェルト政府案は、最近、米下院で二百二十六票對六十二票で否決されてしまつた。かゝる重大法案が否決されたことは、大衆が政府の笛に踊らない證左といへよう。

スチムソン陸相の告白演說

前にスチムソン陸相は、自ら軍備の弱體を暴露したことがある。それは、

「米陸軍の有する第一線軍用機は、各種を合せても總數六百五十機に過ぎない。しかもこのうち自動ガソリン漏洩防止裝置を裝備してゐるものは一機もなく、操縱席を蔽ふ裝甲及び機銃の數、並びに口徑などにおいて、現在歐洲戰に使用されてゐる軍用機に比べて遙かに劣り、現代航空機の水準に達してゐるものは一機もない。アメリカの一九三九年度の軍用機生產總數は約二千八百機だつたが、このうち約八百機が米陸軍に編入されたに過ぎず、他は全部外國へ輸出された。即ち總機數の約七十五パーセントが外國、主としてイギリスに輸出されたのである」

と、上院外交委員會の質問ぜめにあつて、苦しまぎれに告白した始末である。

この事實を、米國航空年鑑（一九四〇年版）では、次のやうに合理化してゐる。

「アメリカはイギリスのやうに、海軍にばかり力を入れて陸、空軍を輕視したりしない。またフランスのやうに陸軍にだけ力を盡して海、空軍を輕視したりしない。更にまたドイツのやうに强大な陸軍と空軍を造りあげて、海軍を抑壓するやうなことはしない。アメリカ陸、海、空の三つが一樣に發展の途上にある。イタリヤと日本はこの三つの軍備を併用する方法をとつてゐるが、彼等は

資材に乏しいために強力な空軍を持つてゐない」

とある。もつともらしいが今日のアメリカ兵力を知るものは、一笑に附するだに價値のないことは分り切つてゐる。

航空工業の計畫だけは立派　更にその航空工業界を見るに、前記のルーズヴエルトの聲明といひ、また今年は月産二千三百臺、明年は「一年間五萬臺生產」といひ、文字通り世界一の航空生產力を實現しようといふのである。しかしドイツが今日、年產三萬臺乃至五萬臺に達するためには、二十年の歷史を經てゐるのに、アメリカが僅か四年そこらで年產一萬から五萬に進まうとするには尋常一樣の手段で出來るものではない。

現に歐米の軍事專門家の見積りによれば、ドイツ空軍の每月の消耗は五百臺から二千臺位と見てゐるから、殊にアメリカの如きは太平、大西兩洋に敵を持ち、その上に蔣、英、ソ、濠などへ送らねばならない破目になつてゐるから、なまじつかな數ではアメリカ本國の防備さへも困難な狀態である。

自動車製造會社の轉出　では、どんな方法でこの目的を達しようとするかといへば、第一が航空機會社の簇出である。これとて軍需景氣を狙ふ營利會社であるから、利益さへあればどしどし生

産するであらう。

次に、軍用機製造に乗出したのが、自動車工業である。このアメリカの自動車製造會社協會は、議會の國防委員會で全面的に協力することを申合せ、主として軍用航空機製造に肩代りすることである。

これがメンバーには有名なパツカードの社長アルベン・マコーレイ、フオードの社長エドセル・フオード、ゼネラル・モータースの社長C・E・ウイルソンなどをはじめ、タイヤ會社やボデー會社に至るまで、いはゆる全米の錚々たる業界首腦部が加はつてゐる。そしてこの委員會が躍氣になつてゐることは、その申合せでも知ることが出來る。

卽ちアメリカ自動車業界の年中行事であり、且つこれによつて多大の收入を得てゐるところの毎年の新型自動車の賣出しを、一九四一年に限り一齊に中止するといふのである。つまり一九四一年型などを造つてゐるどころではない、それよりか飛行機へといふのであらう。

アメリカの最近の戰鬪機に盛に裝備されてゐるアリソンといふ液冷發動機は、世界的に優秀品といはれてゐるが、このアリソンは實は自動車屋のゼネラル・モータースが造るのであり、また有名なキヤデラツクの工場は、最近ではこのアリソンの部分品を作つてゐるのである。

ハドソンの自動車工場ではカーチスの航空機部分品を造り、パッカードではロールス・ロイスを造つてをり、フオードはP&Wツイン・ローといふ空冷航空發動機を造りはじめた。ビウイツクとスチユードベーカーの兩社もライトの航空發動機生産に大童になつてゐる。クライスラーとゼネラル・モータース工場の一部では軍用機用の機關銃や機關砲がどしどし造られてゐる。また有名な自動車の車體專門會社デトロイトでは早くもダグラスの機體生産に轉向したといふやうに、その他あらゆる自動車關係工場が軍用機の生産に轉業しようとしてゐる。

またかうもいふ。フオードではダグラス爆撃機を、クライスラーではマーチン爆撃機を、ゼネラル・モータースではノース・アメリカン機を、それぞれ擔當して各千二百臺を製作する計畫だといふ。しかもヘンリー・フオードの如きは、或る公開の席上で

「自分は六ケ月以内にフオード工場で、日産一千臺の標準型軍用機を造り出す決心である」

と見得を切つた。

ところが實際は、口でいふやうに巧く行つてゐない。

半身不隨の「持てる國」 なるほどアメリカの勞働力は、ソ聯に次いで勞働員に惠まれてゐるだらう。即ち十八歳から六十五歳までの男子を四千百五十萬人、女子を二千九百二十萬人を持つて

ゐるが、これを軍隊、軍需工場に動員して見ると、その動員に全く連絡がないため、陸軍は陸軍、海軍は海軍、工場は工場で奪ひ合ふといふ始末で、勞務動員計畫に少しも組織がない。

また大工場の設備を擴大しても、勞働者の住宅問題で行き詰つてゐる。例へばフォードは飛行機工場に轉出して、飛行機工八萬人を集めたが、これに家族を加へた二十五萬人の住宅が近くにないので、その住宅建築から始めねばならない有樣である。これとて資材缺乏ではかばかしく進捗しないのである。

それに第一、ゴムがないので困つてゐるのに、コンヴエイヤー・システムで五分間に一臺の飛行機を造るなどとは宣傳だけとは知りながらも、少々藥が利き過ぎる。要するに半身不隨の「持てる國」でしかないことを知れば充分であらう。

航空母艦と海軍兵　そこで、ドイツと日本の空軍力に恐れをなしたアメリカでは、急に航空母艦の增强に着手したが、これらの母艦は何れも平時は八十機、戰時百機乃至百二十機の艦載飛行機を搭載し得るのであるが、アメリカ海軍はあくまで强がらうとして、艦載機は大部分が上昇力の優れた單座（一人乘）爆擊機であつて、次に戰鬪機と輕爆擊機を兼ねた複座（二人乘）の急降下爆擊機と見られ、敵地深く空襲する本物の爆擊機は少いものと見なければならぬ。しかも防ぐ立場には

非常に弱點がある。それに前にも述べたことだが、アメリカの海軍兵が「世界見物が出來るから海軍に來れ」といふ廣告によつて應募して來たところの、半ば觀光客氣分のものであることを思へば、その飛行機を搭載する航空母艦及び水上機母艦の戰鬪力こそ、けだし想像されるであらう。なほ、これらの航空母艦や水上機母艦のことは略しておくが、既にその九分通りはわが海軍のために擊沈破されたが、目下大急ぎで造つてゐる。

二、獨・伊・米・英・ソ聯の空軍比較

わが空軍の特長　まづノモンハン事件で陸の荒鷲部隊長として名を高めた松村實次郎中佐の說を、ここに述べるとしよう。

「戰前、世界最優秀を誇つた米英の戰鬪機が脆くも、わが戰鬪機の餌食と化し去つたのは、實にわが戰鬪機が超優秀なる特徵を有するからである。米英空軍の戰法は、自己の損害を極度に輕減して敵に可及的大なる物質的打擊を與へて勝を占めんとするのだから、戰鬪機の如き小型機においても、まづ搭乘者の防護裝置を完全ならしめ、しかもその速度、火力、その他あらゆる數字的威力を增大せしめんとしてゐるのである。從つてその戰鬪機は自然鈍重となるは免れず、戰鬪機として最

も緊要なる戰鬪性能に大きな缺陷を有することとなる。

これに對し、萬邦比類なき國體に淵源する崇高な犧牲的精神に燃え、必勝の信念を堅持する、わが戰鬪飛行隊の將兵が撓まずたゆまず實戰的訓練を重ねて、その戰鬪技能の向上發展を期してゐる限り、わが戰鬪飛行隊の無敵ぶりが將來といへども變ることなく、米英空軍に對する破邪の利劍たり得ることはゆるぎなきものである」

と力說されたことは、けだし名言で、そこに見敵必殺の精神を科學することが出來るのである。

ここで、初めにアメリカの空軍について、次にヨーロッパの中心勢力であるドイツとイタリヤに對する、イギリスとソ聯の空軍について述べるとしよう。

アメリカの戰鬪機　アメリカの空軍では、戰鬪機を大體次の三つに分けてゐる。

一、空中で敵機と格鬪する普通の戰鬪機

二、偵察機を兼ねたもので、輕爆機などを追擊して射ち墜す追擊戰鬪機

三、敵機戰鬪機の活動を阻害する阻害戰鬪機

即ち急速な上昇力と輕快なる運動性と强力なる火力をもつて、空中における敵機を擊墜するのが戰鬪機の任務であるが、速度が增大すれば運動性が鈍くなり、運動性に重點をおけば速度が鈍くな

るので、一つの戰闘機であらゆる空中戰闘に適するものを製作するのは困難であるから、結局は戰闘機が幾つかの種類に分れることになる。

そこでアメリカ空軍では、一年ばかりの間にさまざまの目的に適ふ戰闘機が濫造された。その試作數は二十數種に及ぶのであるが、實際に採用されたものは數種に過ぎない。かういふところにも新奇を追ふヤンキー氣質がうかがはれるといふものである。しかし金と好奇心にまかせて研究を進めてゐることは、あながち輕視出來ない點もあらう。

例へば、世界各國の戰闘機が大體八百馬力から千百馬力級であるのに、アメリカは千五百馬力から二千馬力級を目指してゐる。また火力の重要性から搭載機關銃を二挺から四挺へ、更に六挺へと多數を装備して武装强化に大童である。そして三十七ミリ口徑の機關銃を備へてゐるが、これは普通の戰車砲程度のもので、從前に比し射程距離が著しく長くなり優に二千メートルの遠距離まで威力を發揮するといふ。現にドイツのメッサーシュミット戰闘機をはじめ歐洲諸國の戰闘機は僅かに二十ミリから二十五ミリ程度で、その射程距離も六百メートルから千メートルであるから、性能の點からいへばアメリカの空軍は相當威力があるわけである。

またロッキードP三八型、單座双發戰闘機は時速八百キロといふことだが、ドイツの新鋭機ハイ

ンケル双發戰鬪機は時速六百八十八キロといはれてゐるから大體獨米對比は殆ど同じと見てよい。また上昇速度はカーチス・ライトCW二一B型阻害戰鬪機は、一分間に千六百メートルといふすばらしさだが、多くの戰鬪機は一分間一千メートル程度のものである。

アメリカの爆撃機　次に爆撃機であるが、これは空軍にとつて最も本質的使命を果す機種である。敵空軍基地をはじめ軍需工場地を爆碎して、その戰鬪力を挫碎するのが爆擊機である。しかもアメリカはその地理的條件から長距離爆撃機を作戰上から要求してゐる。だから歐洲各國の長距離爆撃機は、その多くは航續力二千キロ——三千キロであるが、アメリカの長距離爆撃機または飛行艇への要求は五千キロ——六千キロである。その最も大なるものではダグラスB一九型が一萬一千二百キロといはれ、コンソリデーテッド三一型飛行艇が一千五千キロといふ數字を誇張的に宣傳してゐる。しかし、この數字は爆彈を搭載しない場合を指すのに違ひない。

アメリカで「空の要塞」と稱するボーイングB一七型四發爆擊機がある。これを自慢物として援英、援蔣へ送り出したが、イギリスの航空專門家はあまり歡迎してゐない事實を見ても、武裝が貧弱だといふこと、性能が第一線機としては劣るからであらう。こんなものが假にわが上空に來襲しても、わが戰鬪機の好餌となるだけのことである。

これの舊型は、胴體に機關銃座を設け、機關銃各一挺を前後左右に動かして射撃出來るといふ銃座が三ケ所、ほかに胴體上部、機首に合計機關銃五挺を裝備したものだが、新型では胴體下部、上部、機首などに機關銃を裝備するやうに改造したのである。そして全備重量も二十二トン、最大速度も四八〇キロと向上し、航續力六千四百キロで、この場合爆彈三トンを搭載し得るといふことである。なほ九千メートル以上の高々度でも好性能を發揮するやうになつてゐて、成層圈爆撃への段階を示してゐる。

この「空の要塞」と同じ程度の新銳で、コンソリーデーデッドB二四型といふのがあるが、これは大體ボーイングよりやゝ小さいものと見てよいから略しておかう。

アメリカの中型爆撃機　また中型爆撃機に屬するものの中にも、世界最高水準をゆく優秀な新銳機がある。現在制式機となつてゐるダグラスB一八型、同A型などがある。

アメリカ輕爆撃機　輕爆撃機、急降下爆撃機には現在制式機ではダグラスBT一型の單葉機、カーチスSBC四型の複葉機などがある。何れも七五〇――九五〇馬力、複座乃至三座機で機關銃三挺程度の武裝がある。

アメリカ哨戒飛行艇　哨戒索敵の任務には、コンソリデーテッドPBY四型双發飛行艇が制式

となつてゐる。廣い洋上で敵艦隊を發見するのには、飛行艇が持つて來いの役割を受持つのである。哨戒飛行艇は普通航續距離五千キロ乃至八千キロで、三十時間以上の航續時間を持つ。これは乘員十名、全金屬性製の單葉双發で、千二百馬力の空冷式發動機二基を裝備し、最大速度三二八キロ、航續距離六千四百キロ、飛行中は翼端の補助浮舟が引きあげられて主翼の端部となるが、この構造は姉妹機PBZYI一型にも用ひられてゐる。なほボーイング三一四型七十二人乘飛行艇なども あるといふが、いづれは「空の巡洋艦」といつたやうな全備重量百トン級の超大哨戒飛行艇も出現することにならう。

とにかく米空軍は鳴物入りで、次から次へと試作しては何型、新型と宣傳するので、これをくどくどしく書き立てゝゐたら際限がないからやめるが、結局は實驗室的な遊戯として實用的價値は低いものである。かういつたからとて、最近では人員の犧牲を顧みず火の出るやうな訓練をつゞけ、ヤンキー特有のスポーツ的氣質から脫却しようとしてゐるから、決して侮ることは禁物であることをいひ添へておきたい。

次に獨、英兩國を比べて見ると、いづれ劣らぬ多彩な空軍陣で、またいづれも世界一流と稱へられる優秀機を裝備してゐる。

獨・英の戰鬪機　まづ戰鬪機では、ドイツのメッサー・シュミット一〇九、一一〇に對しては、イギリスのホーカー・ハリケン、スピット・ファイヤがある。兩國とも自國機の性能を世界一と稱してゐるが、メッサー・シュミットは速度と武裝に優れ、スピット・ファイヤは上昇力と運動性に勝れ、空中戰ならば全く伯仲の力である。

獨・英の輕爆擊機　輕爆擊機では、イギリスのブレンハイムとドイツのドルニエ「飛行鉛筆」乃至ユンカース八八型双發機は、速度といひ武裝といひ互角であらう。

獨・英の急降下爆擊機　急降下爆擊機では、イギリスのスクワ艦上攻擊機があるが、ユンカース八七B型には及ばず、その代り重爆級では、イギリスのウエリントン、ホワイトレー、ハンプデンなどの方がドイツのドルニエ二一五級よりも勝るといはれてゐる。要するに英獨兩國に關する限り、空軍機の性能における點は、ほぼ均衡狀態であるといへる。

ドイツの飛行機生產能力　ただドイツ側にありては、生產能力がイギリスの約五倍近い優越性を備へてゐることが、この戰爭の解決の鍵である。たゞしドイツ軍がソ聯を敵としないで、またイギリスがアメリカより飛行機を補はれないとしたら、勝敗は自ら明白になるのだが、さうでないところに戰爭の大きな惱みがある。しかしドイツの偉大さは、現に戰場匆忙のうちにありながら、フ

オッケ・ウルフ一九八型推進式戰闘機、同一八七型双發空中驅逐機、ハインケル双發戰闘機の如き新鋭機を製作してゐるのである。もつともイギリスとて、デェファイアントの如き旋廻機銃附の戰闘機を活躍させてゐる。

イタリヤの戰闘機　イタリヤとなると少し事情が異なつて來る。この國の戰闘機は常備三千臺位であつて、その半數は新式のフイアツト四二、五〇、マツキイ二〇〇、カプロン＝C二〇〇などであるが、殘る半數はアフリカにゐるイギリス派遣軍の舊式機と同じ程度のものであらうといはれてゐる。しかしAUT一八型單座戰闘機や、双發攻撃機サボイヤ八五型の如きは、ドイツの第一流機に比べて劣らぬ優秀なものである。けだしイタリヤ空軍の勇敢さと、生產能力の活潑さとには、大いに期待されるべきものがある。

ソ聯の空軍　ソ聯は、宣傳によると世界一の空軍力を持つやうであるが、ノモンハンでお手並のほども知れてゐるし、秘藏のイー一五、一六もわが荒鷲にかかつては數ではなかつた。專門家の說によれば、「大體においてロシヤの機材は舊式であり、約五千臺の常備機中、新式と思はれるものは二千臺あるまい。特に水上機は極めて舊式である」といふ。それ故に、米英の飛行機援助に奔命するのであらう。

第十章　再び日本の勝利

第一章で、赫々たるわが陸海軍の戰果を多數に收錄したが、なほ最近の絶大なる戰果を特記せずにはおけないのである。勿論、前記に擧げた戰果後においても度々快報を發表されたのであるが、ここでは空前の戰史に絶する一大海戰を、われわれは切に銘肝すべく左に掲げるとしよう。

ソロモン海域の大海戰

昭和十七年八月七日に展開された第一次ソロモン海戰以來、百餘日に亘つて間斷なく交戰を續け、第二次ソロモン海戰、南太平洋海戰及び第三次ソロモン海戰といふ、長期でしかも同一海域における大海戰は、全く千古の戰史に未だ曾て見ないものである。

この間、わが戰果は左記の如く大なる武勳を示すといへども、同時に米英必滅の熾烈なる盡忠報國の一念にのみ燃えるわが將兵の尊き犧牲に對し、甚深なる敬意を表する次第である。

第一次ソロモン海戰以來の綜合戰果

	敵ニ與ヘシ損害		我方ノ損害	
	擊沈	擊破	沈沒	破損
戰艦	三	三	一	一
航空母艦	四	四	〇	三

巡洋艦	三〇	五	三	四
驅逐艦	(一八)一九	(一二)一三	六	三
潛水艦	九	一	一	一
艦型未詳	〇	三		
計	(六四)六五	(二八)二九	一一	一二
輸送船	一七	六	五	一二
飛行機	撃墜破	八百五十機以上	未歸還自爆約二百六機	大破三十一機

註 右は大本營發表により、第三次ソロモン海戰の戰果を追加されたる綜合戰果である。

ハワイ海戰にてわが痛撃を喫し、ジャバ沖海戰、スラバヤ沖海戰、バタビヤ沖海戰などでは英蘭艦隊との混合編成にて苦杯を甜め、更に珊瑚海海戰にて大敗戰を演じたるにも懲りず、執拗なる出擊をソロモン群島海域に繰返し、第一次ソロモン海戰、第二次ソロモン海戰、南太平洋海戰、第三次ソロモン海戰と、その都度擊碎したる帝國海軍の勇猛さには今更に驚嘆のほかはないのである。

かゝる大損害を蒙りながら、敵が反擊を續ける所以のものは、ソロモン群島が戰局の現段階にお

いて最も重要なる戰略的據點だからである。即ちソロモン群島は、ハワイと濠洲とを結ぶ、いはゆる米濠連絡路の一部に當るため、アメリカはこれを失へば、彼の恃む防禦陣の一角が崩れ、米濠の連絡は遮斷され、そして對日反攻の意圖を空しくすることになつては、その國民の米國海軍に對する信頼が根抵から崩れ去るのを惧れるからである。

なほ詳しくいへば、敵がこの海域において決定的に敗退し、この方面の制空權、制海權を喪ふに至れば、當然、敵の戰略線は著しく後退を餘儀なくされるわけである。從つてわが方にありても、ソロモン群島方面の決戰に敗れ、制空權、制海權を喪ふことになれば全戰局に重大なる影響を及ぼすものである以上、絕對に敗けることの出來ない戰鬪である。それ故にこそ、アメリカは數次に亘る反擊の失敗にかゝはらず、死力を盡し、われに抗せんと試みたのである。

この海戰が勃發するや、ノックス海相は「アメリカが從來編成した如何なるものよりも强力な大艦隊が、日本の强力なる艦隊に遭遇した」と述べてゐる。しかも南太平洋海戰の直前、西南アメリカ太平洋艦隊司令長官の更迭を發表したが、その時、旣にその聯合艦隊はサンタクルーズ島北方を航進中で、作戰行動のさなかであつたといふのである。

これらの一事を見ても、アメリカがこの艦隊に多大の期待をかけ、且つソロモン海域の制海權獲

得のために、如何に重大な決意をいだいてゐたかが察知される。

近代海戰の新しい樣相　昭和十六年十二月八日、大東亞戰爭勃發以來の一周年の間に、わが軍の擧げた戰果により、敵の尨大なる抗戰力を相次いで破碎したことは、既に發表された數字が示す通りである。これを逆にアメリカとしては、この間に喪失した戰鬪艦艇及び飛行機の數は實に莫大なもので、正に致命的であるといへる。例へば太平洋艦隊の如きも殆ど主力が壞滅されてしまつたのだから、基幹を失つた敗戰艦隊としてゲリラ戰に出る位が關の山で、制海權の爭奪を目的とする海戰の勝負は一應決したかのやうに見える。卽ち從來の海戰では、兩軍の主力部隊が決戰海面に接近して、乾坤一擲の一大決戰に出で、その主力艦を喪失した方が敗北を喫したものである。

そこで大東亞戰爭における最も顯著な性格として、航空兵力が海上作戰の主兵力として登場して來たことである。もつともアメリカ海軍は、制空權下の艦隊決戰を信條として作戰上航空兵力を重視してゐたが、制海權掌握の決定要素としては、これまで通り大艦巨砲主戰を堅持して來たものである。

しかるにアメリカは、大東亞戰爭劈頭、わが海軍航空部隊の活躍に怖れて、制海權を制空權に置き替へるべく、建艦計畫においても從來固執して來た大隊巨砲主義を一擲して、空母第一主義に變

へ、一方飛行機の飛躍的增强に拍車をかけることに至つたのである。これには勿論、戰艦や巡洋艦を短期間に建造して補强することは出來ない理由もあるが、飛行機ならば急造することも出來、しかも飛行機が海戰において決定的な役割をする以上、航空母艦を多數に建造せよといふことに轉換したのである。

更に、航空母艦並びに飛行機の重要性を認めると同時に、航空基地の確保に重點を置くやうになつた。現にアメリカは北はアラスカ、ハワイ諸島から南太平洋に連なる各島嶼に晝夜兼行で航空基地を建設しつゝあるといふ。

また飛行機が戰鬪の主力的要素であることによつて、戰爭は長期化することになる。卽ち飛行機は短日月に大量を生產することが出來るから、艦隊を喪つても航空兵力をもつて補充し得られるからである。アメリカの狙ひは實にここにあるので、月產四千機といふ强大な生產力に物をいはせてわれに復讐せんと着々反擊態勢をとつてゐるのである。

いはゆる近代海戰の新しい様相は、航空機の驚嘆すべき進步發達によつて、攻勢兵器として決定的威力を有することである。これがため海戰は單なる艦艇、兵力のみをもつては優劣を決することが出來ないだけでなく、航空兵力は敵海上艦艇の作戰行動を阻止するまでに至つたのである。

前にも述べたやうに、アメリカでは、一年に五萬機、或は六萬機の飛行機生産能力があると豪語してゐる。月割にすれば四千機で、假に月産三千機としても一日に百機といふ數になる。近代戰の特質は消耗戰であり、生產戰であるとよくいふが、飛行機に關する限り、全く文字通り消耗戰であり、また生產戰でもある。卽ち總力戰そのものである。

ところで、われわれが注意すべきことは數字の魔術に驚いたり脅えたりしてはならないといふことである。そもそも一國の軍需生產能力とか、軍隊の兵力編成裝備とかいふものは、列國が等しく絕對機密のもので、徒らに發表するものであつてはならない筈である。防諜の重點もここにあるので、その國力なり、戰略なりを具對的に敵側に知らせてしまつたのでは、敵側に對應策を講じさせる結果になつて、戰略上重大な不利に陷ることはいふまでもない。

こんな判り切つたことをアメリカが不用意に公表する筈はない。そこには數字のマジツクを利用しようとするのに外ならないのである。卽ちアメリカの尨大なる生產力や、强大なる軍備擴張の內容を誇示することによつて、政略上の利益をねらつてゐるのである。それは樞軸國側を恫喝すると共に、ソ聯、重慶をして武器貸與の可能性を知らしめて、あくまで樞軸側に對し抗戰を續けさせようとするものであり、また第三國にはアメリカの國力を信用させ、やがては聯合國側に加擔させよ

うとする魂膽である。一方アメリカの國內に對しては、たとへ今日まで敗戰したからとて生産力によつて最後の勝利をかち得ることを保證して、士氣の沮喪しないやう、また戰爭體制を强化しようとする、つまり一石何鳥かの策略を用ひてゐるのである。

だから、アメリカの公表する數字を信じて驚いたりしたのでは、その宣傳に踊らされたことになる。

われに勝算あり　だからといつて、決してアメリカを侮つてはならない。侮ることは油斷を意味する。油斷は大禁物である。

大東亞戰爭緒戰以來の戰略を見るに、わが忠勇無双なる將兵の肉彈によつて攻勢に出でたので、戰略態勢は一應整ふた感がある。從つて今日では、攻勢と同時に防禦に意を用ひねばならない立場におかれてゐる。即ち一方アメリカは、戰略的に手も足も出ない不利な態勢に追ひ詰められためにこれを打開すべく、日本が整へた戰略態勢を逆に崩しにかゝらうとして攻勢、反撃に出たのである。

それ故に、さきに述べたやうにアメリカは從來固執し來つた大艦巨砲主義を一擲して空母第一主義となり、次いで沈まざる航空母艦であるところの陸上基地の價値が重要視されることになつた。

それでアメリカは一旦、われに攻略された基地を奪還することに主力を注ぎ、それを足場として日本本土を衝かうとするのが目標である。即ち現在では航空基地が作戰の中樞を形成するに至つたわけで、その典型的なものが八月七日以後のソロモン海域の死鬪決戰である。

繰返していへば、アメリカ海軍はわれに反攻せんとして、近接せる最前線において一島を奪還し、これに航空基地を建設しつゝ制海權を確實に獲得し、これを制空權下においてわれに海上決戰を挑み、徐々に失地を回復せんとするところにある。さればソロモン海域の雌雄は直ちに全戰局の支配者を決定することになる重大な岐路である。

されば、第三次ソロモン海戰において、十一月十二日以來戰鬪續行中の帝國海軍部隊は、十三日夜間ガダルカナル島敵航空基地を猛擊して飛行場及びその施設に大損害を與へ、更に翌十四日は敵機の猛烈なる反擊を排除しつゝ味方輸送船團を護送中、その夜同島の西北方において主力艦四隻を基幹とする敵增援部隊に遭遇した。大東亞戰爭以來、彼我の戰艦が堂々と相見ゆる戰鬪は、今次をもつて嚆矢とする。これによつても如何に戰爭の壯烈を極めたかが充分に窺はれるであらう。

この夜戰においても壓倒的大勝を博し、敵二戰艦を擊沈（大本營の追加發表による）同一隻を中破せしむるの大戰果を擧げた。この敗色に狼狽せる他の敵の戰艦一隻は、わが驅逐艦の砲彈を浴び損

傷を受けながら敗走したのである。これだけの大激戦にありてわが方の損害を蒙つたのは戰艦一隻大破、驅逐艦一隻沈沒の貴き犧牲の如きは、けだし止むを得ざるものである。

しかしソロモン群島の戰略的意義が失はれぬ限り、第四次、五次のソロモン海戰は續いて行はれるであらう。またわれに一艦を喪へば二艦を新造するの決意によつて、斷じてわれに勝算あることは言を俟たないものである。

日米の戰爭能力　この戰爭能力といふものは、物質力と精神力から構成されてゐる。いくら物質力があつても、精神力卽ち戰爭意志力がなければ負ける。またいくら精神力があつても、軍備の基本をなすところの生產力卽ち物質力がなければ負ける。總力戰といふのは、この物質力と精神力の兩面の戰を意味するのである。

そこで日米兩國を比較してみる場合、日本は物質力より精神力に勝れた國であり、アメリカは精神力より物質力に勝れた國である。だが、戰爭といふものは物質力だけでやるものではない。その物や金だけで戰ふのであつたら、戰爭の妙味といふものはない。物や金を超越した魂の力、卽ち精神力によるもので、結局、人によつて戰爭の勝敗を決することになる。

だから國力といはれるものが如何に大であつても、それが戰爭能力となるためには、或る順序を

經なければならない。例へばアメリカに百萬臺の飛行機が製作されたとしても、その能力を充分に發揮するところの人を養成し、訓練し、統制ある軍隊に編成する必要がある。日本の如く月月火水木金金の猛訓練をしても一人の陸軍の兵隊をつくるのに三年の日子を要する。潜水艦乘組員の如きは十何年もの訓練を要するものであるといふ。

それ故に、アメリカが何百萬トンの軍艦を建造しようが、何萬臺の飛行機を製作しようが、それに乘組む人、それを操縦する人の、魂が腐つてゐたならば、何等の働きをしないことは明白である。例へばシンガポールにおいて日本軍四萬に對しイギリス軍二十數萬が降伏したことによつても實證される。

生産力の擴充　かういつたからとて決して物資生産力を輕く見るものではない。近代戰は武力戰の勝利と共に、經濟的の勝利、思想的の勝利、即ち經濟戰、思想戰に完勝することが絶對的に必要である。米英の反撃を破碎するだけの經濟組織と、物資生産力を培養することが、特に日本において肝要なのである。

今後は第一の消耗戰として飛行機が登場した以上、殊に戰爭の運命を左右する飛行機製作に重點を置くべく、これが生産力を積極的に擴充しなければならない。そして現在の戰爭は逐次、質から

量へと移る。いふまでもなく質は大事であるが量とにらみ合さないことには、これを質で抑へられない結果になる。だから飛行機を多數に製作することが重要である。

これにつづいて、南方の資源と日本の生産機構を繋ぐところの船舶と、戰鬪に用ひる各種の艦艇とである。

されば日本産業戰士は、生産增强に一路邁進すべく、前線將兵の壯絕な決意を體して、その能力を二倍にも、三倍にも、いな百倍にも生産戰のために戰はねばならない。

思へば太平洋戰線におけるアメリカの反攻といひ、獨ソ戰線におけるソ聯の抵抗といひ、また北阿戰線における英米の防戰といひ、何れにありても樞軸側の壓倒的優勢を保持してゐるものの、いよいよ長期戰化せんとする相貌を示して來たことである。この長期戰はいふまでもなく夥しい資材兵器を必要とする消耗戰であり、これに對處するためには生産が一層重大な役割を演ずることになるから、ここに生産戰が重大視されることになつたのである。

この生産戰こそ、巨大な生産力を恃みとする米英にとつて、唯一つの期待をつなぐ鍵なのである。それ故にこそ、アメリカの軍事評論家ハンソン・ボールドウインは、

「短期電擊戰により勝利を得んとする段階は今や過ぎ去り、戰爭は明らかに長期消耗戰となつた。

戰爭が長期化したといふことこそ、聯合國側にとつてまづ有利な點であらう。今後數ヶ月、或は數ヶ年の間は聯合國に對する危機は依然存續するかも知れないが、しかしわれわれに對する危險の年たる本年（註、昭和十七年を指す）の最惡の時期は既に大部分過ぎ去つた」

と、大言を弄してゐる。

しかし、この生産戰によつて最後の勝利を得ようとする米英のおもひあがつた希望は、われわれにとつて何ら問題にするに當らないことは、前に述べた通りであるが、わが國としても、戰力のバランスを維持し、進んでその優位を確保するために、アメリカの生産力擴充に對應して劃期的な生産力擴充に努めることが一大緊要であることを切に警告するものである。

必勝の信念　結局、日本はどうしても勝つ、必ず勝つ、しかも完全に必ず勝つ、といふことは理論でなく、大御稜威のもと燦たる歴史上、牢乎たる信念と決意の存することは今更いふまでもない。そして大東亞及び世界新秩序を成し遂げるべく、盟邦ドイツ、イタリヤと固く手を握り、打倒英米のため戰い拔かねばならないのである。これに就いては第一章で述べたから省くことにしよう。

昭和十八年二月十日　初版印刷
昭和十八年二月十五日　初版發行
三、〇〇〇部

日獨伊必ず勝つ

定價　金貳圓

（出文協承認　あ250210號）



著作者　伊藤千代藏（イトウチヨゾウ）
東京市京橋區銀座西七丁目六番地
發行者　菊池定男
東京市京橋區湊町三丁目十二番地
印刷者　大壁早治
東京市京橋區湊町三丁目十二番地
印刷所　大倉印刷所

東京市京橋區銀座西七丁目六番地
發行所　博聞堂
振替口座東京一五五九七二番
會員番號一二六〇五一番

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社